

長野県東筑摩郡生坂村

# 東 部 八 幡 原 遺 跡

緊急発掘調査報告書

1999.12

生坂村教育委員会

## 東部八幡原遺跡正誤表

無校正で製本される手違いがあった為、大量の誤りが生じたことをお詫びいたします。このため遺構をすべて1/40で指定しましたが、まちまちの縮尺になってしまいました。また、遺構内の遺物番号をふること、および各住居跡の時期決定の所見欄の挿入もできませんでした。

頁	行	誤	正
序	08	興64年7月	平成元年7月
例言	02	昭和63年7月	平成元年7月
02	02	昭和64年	平成元年
12	03	図版21-23)	第21-23図、写真図版2)
12	15	" "	" " " 2・10)
13	01	" 27-1)	第26-1図、写真図版2・6)
13	12	" 26・27・28)	" 26・27・28図、写真図版2・3・6・7)
13	26	" 29・30・31・32)	" 29・30・31・32図、写真図版3・8)
14	07	" 38)	" 38図、写真図版3)
14	25	" 32・37)	" 32・37図、写真図版8)
15	02	" 33)	" 33図、写真図版3・8)
15	21	" 34)	" 34図、写真図版3・4)
16	01	" 24)	" 24・42図、写真図版巻頭・3)
16	10	(図版、写真)	(第42図、写真図版3)
16	12	第15図・写真)	第15図、写真図版4)
16	25	" " " )	" 、写真図版4)
17	01	図版35・写真)	第35図、写真図版巻頭・4・9・10)
17	14	図版)	写真図版4・10)
17	16	第16図・写真)	第16図、写真図版4・9)
17	26	石輪	石輪(写真図版9)
17	27	図版25・写真)	第25図、写真図版4・9)
18	04	" " " 写真)	" 25図、写真図版4・9)
18	19	第20号住居跡	" 20号住居跡(写真図版4)
19	17	図版35)	" 35図、写真図版8)
19	19	第19図・写真)	" 19・36図、写真図版5・8・10)
19	22	(写真)	(写真)→附録
19	32	(写真)	(第35図、写真図版8)

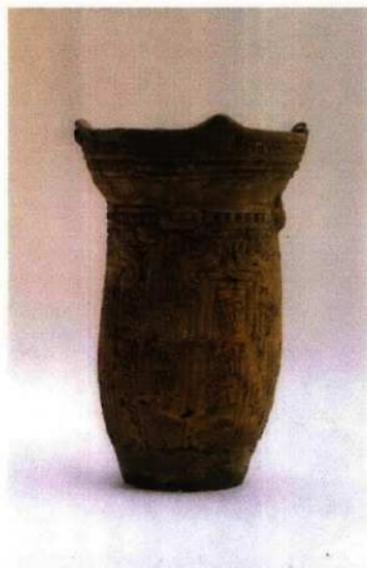
22	06	(備考 空欄)	備考に「土器埋設」
37	06	◎亀尻から	◎亀尻から
37	18	第1期①(写真)	第1期① (写真)→別巻
37	22	第Ⅱ期①(写真)	第Ⅱ期①(第32・37図、写真図版8)
37	30	第Ⅲ期①、◎(第Ⅳ期写真)	第Ⅲ期①、◎(第29・30・31・32・37図、写真図版7・8)
38	07	第Ⅳ期①、◎、◎(第Ⅴ期写真)	第Ⅳ期①、◎、◎(第26・27・28・33・34・35図、写真図版巻頭・2・4・6・8)
38	20	第Ⅴ期①、◎(第Ⅵ期写真)	第Ⅴ期①、◎(第26・27・28・36図、写真図版巻頭・6・7・8)
40	34	(写真)	(写真図版4・10)
41	04	(写真)	(写真図版2・10)
44	17	ピエスエスキューユ	ピエスエスキューユ
50	02	聖穴伏惣祀遺構について	聖穴伏惣祀遺構について(第19・36図、写真図版5・8・10)
53	01	(第35図、写真)の小型埋鉢について	(第16・35図、写真図版巻頭・4・8)の小型埋鉢について
53	03	平成63年	平成元年
55	01	(第42図、写真)	(第20・42図、写真図版巻頭)
56	01	(第42図、写真)	(第14 #、写真図版巻頭・3)
59	36	新津鏡	新津鏡
61	03	平出で3A(第Ⅳ期)	平出3A(第29図)
61	09	キーポイント	キーポイント
61	20	〈屋外埋設土器、写真 図が発見された。〉 ※写真図版2 右上:第2次調査区層序 ※写真図版8 左:11号住、1 ※写真図版8 中:9号住、1 * * 右:グリット、屋外埋設 ※報告書抄録:調査期間 昭和63年7月30日~ * :特記事項 オ7ス	(土坑94埋設土器、第20図、写真図版8)が発見された。 ◎トリミングミスの上層部欠 右:11号住、1 中:16号住、1 右:土坑94、埋設土器、1 平成元年7月30日~ オ7ス
<p>所見:第1・2号住:前期前葉~後葉期。第3号住:中期前葉、新前期。第4号住:層内期。第5号住:前期後葉。遺構AB並行跡。第6・7号住:平安中期。第8号住:前期初葉、中融期。第9号住:中期前葉、後期。第11号住:中期前葉、新前期。第12・13号住:前期中葉~後葉、層浜~遺構A期。第10・14・15・17・20・21号の各住居跡は、その形態と新旧の切り合いおよび出土遺物の積層から、前期後葉に帰属されると想定されるが明確なる断片はできない。第16号住:中期初葉、北陸系新保型行期。第18号住:前期後葉、遺構A期。第19号:前期後葉、遺構B期。聖穴伏惣祀遺構:中期中葉、井戸尻期。と、それぞれ比定した。</p>			

## 東部八幡原遺跡緊急調査報告書

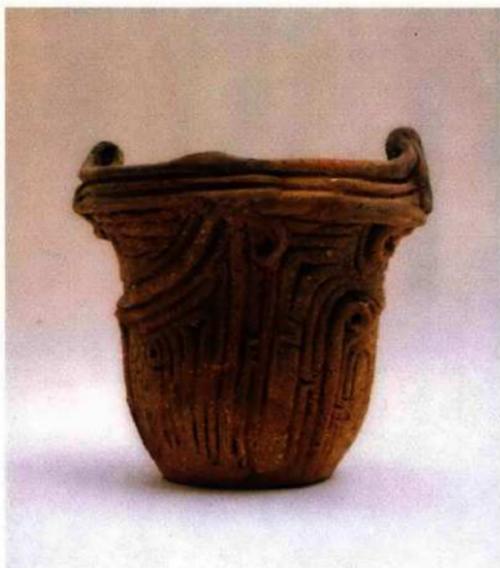
発行 平成11年12月 発行  
 発行者 生坂村教育委員会  
 印刷 有限会社光陽印刷



出土装身具 (第1次調査区)



16号住



4号住

# 序

---

東部八幡原遺跡（下生坂）は生坂村北部の犀川河岸段丘上にあり、以前から縄文時代の遺物が採集され、遺跡の存在が知られていました。生坂村内での古代遺跡は計18箇所において確認されていましたが、それは縄文時代から平安時代におよぶ連続たる歴史の跡を示すものでした。しかし、これまで発掘調査によってその内容が解明された遺跡例は皆無であり、このたびの本遺跡の調査がその嚆矢となるものです。

昭和62年、下生坂地区で圃場整備事業が施行されるのに伴い、緊急に発掘調査が実施される運びとなりました。調査は昭和62年2月と同64年7月の二次にわたりましたが、関係各位のご努力により多大な成果を挙げることができました。

すなわち、八幡原一帯には縄文時代前期から中期、さらに平安時代に至るおよそ6000年の長きにわたり、途絶えることなく営まれた人々の生活の跡が明らかになってまいりました。古代史の各期を通じての数多くの住居跡と、それに随伴するおびただしい土器・石器等の文化遺物はきわめて多種多様であり、得がたい貴重な資料として活用できることになりました。悠久の歴史を刻む大河犀川と、幾重にも連なる山並みに囲まれた山紫水明の自然環境のなかで、ここ生坂の地が、古代文化の盛衰や伝播の流れをどのように捉え関わりを保ち続けたのかなどを考えると、まことに意義深い成果であると確信するところで。

第1次調査は寒さのなかで雪にまみれ、第2次調査は炎天のなかという苛酷な条件下での大変な労苦を強いられました。無事に発掘調査を完了することができました。なお、調査は長野県考古学会の中信地区の諸先生方をお願いしましたが、その外に多くの調査員の方々、また作業に協力していただいた村内外の方々、さらに数々の有益なご助言を賜った諸氏に心から感謝の意を表する次第です。

この度の本報告書の作成、刊行にあたっては調査員、事務局の方々の一方ならぬご尽力をいただきました。重ねて厚くお礼を申し上げます。

平成11年12月

生坂村教育委員会

教育長 藤原 得夫

## 例 言

- 1 本書は第1次調査（昭和62年2月23日～6月28日）、第2次調査（昭和63年7月30日）にわたって行われた東部八幡原遺跡（下生坂）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は生坂村教育委員会が村の圃場整備事業に伴って、事前に調査をしたものである。
- 3 本書の執筆は分担して行い、執筆者名を下記に掲載するものである。
- 4 本書の編集は西沢寿晃、澤谷昌英、三村肇、塩原久和、山越正義、生坂村教育委員会事務局が行った。
- 5 遺跡の調査および整理は、下記の方々によって行われたものである。
- 6 調査・整理期間中、以下の方々からご教示、ご協力を得た。記して感謝申し上げます。

池上 武好	大沢 哲	川崎 保	神沢昌二郎	
北沢伊紘男（美麻村教育委員会）	小林 康男	島田 哲男	新谷 和孝	
樋口 昇一	平林 彰	平林 潤郎	降旗 俊行	宮川 清治
宮下 健司	山下 泰永	山田 真一		

### 7 執筆者および整理者

大久保知巳	澤谷 昌英	塩原 久和	竹原 学	西沢 寿晃
三村 肇	三村 竜一	森 義直	山越 正義	横田 作重

### 整理作業

大沢 真二（土器復元）	川久保清仁（石質鑑定）	堀内 恵（土器写真）	
吉沢 克彦（玉類実測）	飯沼 富夫	清水 理恵	中村千代子
藤原美代子	百瀬 薫	百瀬千鶴江	

- 8 写真撮影は遺構遺物とも事務局が当たった。
- 9 出土遺物および図面類等、調査記録は生坂村教育委員会が保管している。

# 目 次

序

例 言

目 次

## 第1章 発掘調査の経緯と日録

1 調査体制	1
2 第1次調査	2
3 第2次調査	2

## 第2章 遺跡とその環境

1 自然環境	5
2 周辺の遺跡	7

## 第3章 遺 構

1 住居跡	12
2 竪穴状祭祀遺構	19
3 土坑	19

## 第4章 遺物 (付 遺跡一覧表)

1 第1・2号住居跡出土土器	30
2 出土土器の概要	37
3 出土石器の概要 (付 石器一覧表)	42

## 第5章 資 料

1 竪穴状祭祀遺構について	50
2 第16号住居跡出土の小型深鉢について	53
3 逆三角形の石製垂飾りについて	55
4 第12・13号住居跡出土のヒスイ製大珠垂飾りについて	56
5 第12・13号住居跡出土のコハク資料について	59

結 語

参考文献

写真図版

報告書抄録

# 第1章 発掘調査の経緯と日録

昭和62年、下生坂地区で圃場整備事業が実施されることになり、それに伴う遺跡発掘調査が行われることになった。県史地名表には生坂村の遺跡は18ヶ所を数えるが、その中でも最大遺跡と推定されるのは東部八幡原遺跡（下生坂）である。ここではすでに昭和25年（1950）国道19号線工事の際には住居跡などの遺構や遺物が散見され、表面採集されていた遺物もあり、生坂村での最初の発掘調査となつたものである。

## 1. 調査体制

### （第1次）

調査団長	平林 俊彦（生坂村公民館長）
発掘担当	横田 作重 山越 正義
調査員	大久保知巳 澤谷 昌英 西沢 寿晃 三村 肇 三村 竜一 森 義直

### （第2次）

調査団長	平林 昌彦（生坂村教育長）
発掘担当	澤谷 昌英 三村 肇
調査員	塩原 久和 竹原 学 西沢 寿晃 山越 正義
調査補助	百瀬 薫 吉沢 克彦
協力者	伊藤 功一 市川 直子 腰原 仁寿 小山 茂子 小山 義雄 滝沢 繁登 藤沢 孝雄 藤沢 千広 藤沢ふみ子 藤沢 安雄 藤沢由美子 藤沢 義雄 藤沢 美子 宮川 豊成 百瀬 聡 百瀬千鶴江 山田 幸子 吉沢 法子 (1、2次)
事務局（教育委員会）	宮川 陽一 中村 麻恵

第1次発掘調査：昭和62年（1987）2月23日～6月28日

第2次発掘調査：昭和64年（1989）7月30日～8月20日

## 2. 第1次発掘調査

調査区域は国道19号線に沿った西側の水田で、総面積700m<sup>2</sup>である。発掘予定地の北端を東西方向に斜行する農道（幅2m）があり、これを基線として東西方向にA～E、南北方向に1～11の各4m平方のグリットを設けた。この北端の中央部にBM（503.7m）を設定する。なお、発掘の進捗にともない北端道路の両側に遺構・遺物の存在が認められたので、道路を挟んで拡張区を設け、それぞれをA～E、-1～-3とした。さらに予定区域の西側の一部にも同様拡張区が必要となりZ区と称することとする。発掘地域全面での比高差は北端BMに対して、南端でおよそ50cm低くなる程度である。

作業はまず表土の除去から始まった。現状は水田であり、表土は水稻栽培に伴う耕作による作土等からなるいわゆる水田土壌であるため、重機に頼る遺跡面までの掘り下げは慎重を期したが、その厚さは平均10～20cmと見なされた。表土下のかんりの範囲に分布する赤褐色・灰色粘土質の土層は、水田の造成の際に底土として床面に張り付けた跡と地元の人の指摘があり、剥離も比較的容易であった。剥ぎ取った表土下の堆積層である明褐色の砂質層の地山への陥ちこみが住居跡の形状を示唆するものとすれば、水田造成時に既に生活面レベルとしての遺構の上方は部分的に損壊され、現状ではその床面に近い部分が辛うじて取り残された結果となる。各グリットにおける遺物の残存の程度は、この表土直下の層位で最も集中的であった。

昭和30年頃、桑畑を水田化する際に、採集された遺物類が棄てられたと伝聞される位置は、現在北端の道路が敷設された場所であり調査は不可能であった（拡張区を含む）。その道路沿いの地点は地下水やかんがい水の影響とみられる湿地で、土層の攪乱はげしく、土器片など多量に包含していたがローリングに加え器質は脆く崩壊がいちじるしい。

## 3. 第2次発掘調査

調査区域は第1次調査地域に対して国道19号線を挟んだ東側で、2区画の水田地となっている。調査面積300m<sup>2</sup>。傾斜角約7度の緩傾斜の地形であるが、背後はたちまち急峻な山麓となり、かなり上方まで耕作地として経営されている。国道から約30m離れ、第1次調査区域との比高差は約3.2mである。昭和64年4月22日に行われた試掘調査資料（土層図・出土遺物）を参考とした教育委員会と工事担当関係機関の協議と工程計画では、上方一区画の平坦化に要する掘削は最深1mにおよび、土層のうち第1層：黒灰色耕土、第2層：赤褐色グライ層、第3層：黒褐色土層（遺物包含層）までが削平除去の対象となった。

このため第1次調査における発掘結果に照応して、東部八幡原遺跡としての範囲に包括されることを確認し、当該一區画に限定しての本調査を実施するに至った。

調査区域の東側は墓地が造成されており、南側は国道に通ずる東西方向の間道にさえぎられ、下方西側に若干拡張の余地はあったが発掘可能な面積はかなり限定された。しかし、検出された住居跡は重複する部分を含めて計6棟をかぞえ、同一住居跡内での一括される石器の出土など見るべきものがあった。なお、第16号住居跡は縄文中期初頭に比定されるが、壁際に傾斜して掘り込まれたピット（柱穴）に地元の藤沢安雄氏のご協力により杭柱3本を立て、住居の形態の復元を試みたところ、杭柱は高さ4mの高さで一様に交叉した。当該時期の住居のなかでの構造を示唆する一端と推考して、あえて記録にとどめるものである。

## ◆発掘調査日録◆

### ○第1次調査 (1987.02.23～06.28)

- 2月23日(月) 晴れ 発掘予定地の下見をし、調査法・調査器材等の打合せをする。
- 2月24日(火) 晴れ 重機による表土除去作業を始める。
- 2月27日(金) 晴れのち曇り 表土除去作業中、中央東西CE10・F10にわたり帯状に炭化物(1M幅)があり、中央に焼骨片が見られた。
- 3月1日(日) 晴れ 村長、教育長の挨拶があり、検出作業をすすめる。
- 3月2日(月) 晴れのち曇り一時雨 検出作業をすすめる。
- 3月3日(火) 晴れ グリッド設定、検出作業。
- 3月4日(水) 晴れ Fグリッド包含層中より縄文中期の土器片、他に焼骨片など出土する。
- 3月5日(木) 晴れ 1号住居跡・2号住居跡(以下1・2住と略す)を確認し掘り下げる。農道北に調査区域を拡張する。
- 3月6日(金) 晴れ G8を拡張、C8～C10を再検出する。
- 3月7日(土) 曇りのち雨 1・2住の掘り下げ、および土器洗いをする。C11・C12・D11・D12の検出。午後は雨降りのため作業中止とする。
- 3月8日(日) 曇りのち時々晴れ 午前中除雪作業、午後1・2住を床面まで掘り下げる。C10・D10検出。生坂中学校考古グループ8名参加、農道近くH4・H5を設定し掘り下げる。
- 3月10日(火) 晴れ松本より深志高校地歴会生徒9名参加、C8～C10、D9～D10検出。1・2住と3住との切り合い・プランを確認する。
- 3月12日(木) 曇り F12で炭化物、D11・D12で土坑を検出する。
- 3月13日(金) 曇り 3住の精査。D11・E11大型土坑より焼土・炭化物、C11～E11にかけて帯状に炭化物がある。
- 3月14日(土) 晴れ 松本深志高校生2名、松本県ヶ丘高校生5名参加。E7・E11土坑および3住を掘り下げる。
- 3月15日(日) 晴れ 1・2住掘り下げ、H5より祭壇状の遺構が出土する。
- 3月17日(火) 小雨のち晴れ 2・3住掘り下げ。
- 3月18日(水) 晴れ 2・3住掘り下げ、祭壇状遺構周辺より一括土器が2個体出土する。
- 3月19日(木) 晴れ 1住の隣の洗い出しをする。
- 3月20日(金) 小雨 午前中土器洗い。午後作業。
- 3月23日(月) 小雨 午前中土器洗い。午後作業。3住掘り下げ。2住のプラン再検出するも判然とせず。F10・F11・G10・F11を再検出する。
- 3月25日(水) 晴れ 雨水の排水作業後、1・2住を精査する。
- 3月28日(土) 晴れ 2・3住掘り下げ。6住を検出。祭祀遺構に石棒と集石が出土。
- 3月29日(日) 晴れ 8住を掘り下げる。
- 3月30日(月) 晴れ 3住の埋嚢を取り上げ、9住を検出する。
- 3月31日(火) 晴れ 9住プラン確認。村長、教育長より挨拶があった。
- 4月1日(水) 晴れのち曇り 生坂中学校生徒見学。1～3住精査、2住柱穴を検出。
- 4月2日(木) 曇りのち雨 午前中作業。午後土器洗いをする。3・6住土器取り上げ、9・10住プラン確認。

- 4月 3日(金) 曇りのち晴れ 調査区外周セクションを取るため清掃する。6住の遺物を取り上げ。
- 4月 4日(土) 晴れ F15・G15再検出。5住実測。
- 4月 5日(日) 晴れ 4・5住床面検出。
- 4月 6日(月) 晴れのち雨 1・2住再精査。
- 4月 7日(火) 晴れのち雨 6住の土器取り上げ。土器洗い。
- 4月 8日(水) 晴れ 5・11住掘り下げ。4住精査。
- 4月 9日(木) 晴れ 5住床面まで掘り下げる。11住プラン確認する。
- 4月10日(金) 曇りのち雨 8住プラン確認掘り下げ、1・2住焼土確認。
- 4月11日(土) 晴れ 5住実測。4住精査。9住掘り下げ。
- 4月12日(日) 晴れ 1・2・4・8住実測。4・8住遺物を取り上げる。
- 4月13日(月) 晴れ 4・5住掘り下げ、13住拡張、5・8住実測。5・8住遺物取り上げ。
- 4月14日(火) 晴れ 1・5住の床面精査13住掘り下げ、8住実測後遺物取り上げ。
- 6月20日(土) 晴れ 今後の調査について打合せ。
- 6月24日(水) 晴れ 土坑実測、12住実測、8住炉精査。
- 6月28日(土) 晴れ 5住精査、9住埋嚢を取り上げる。8・11・13住の遺物取り上げ、第1次調査終了。

○第2次調査(1989.07.30～08.20)

- 7月30日(日) 晴れ 重機による表土剥ぎ。
- 8月 2日(水) 曇り時々晴れ 検出作業開始。表土剥ぎ継続。
- 8月 3日(木) 晴れ 住居跡および土坑と考えられる遺構を数ヶ所検出。グリット杭を設定する。
- 8月 4日(金) 晴れ 表土剥ぎ完了。4住居跡4軒、土坑15基を確認し、検出済
- 8月 5日(土) 晴れ 全体図作成、各遺構の掘り下げ。
- 8月 7日(月) 晴れ 各住居跡の掘り下げ、16住の土層図実測およびベルト外し。17住を検出。半割土坑の土層実測および完掘り。
- 8月 8日(火) 晴れ 16住の平面図実測。土坑4の遺物出土状態の撮影と遺物取り上げ、17～19住の掘り下げ。
- 8月 9日(水) 晴れ時々曇り 16住ピットの半割、地床炉実測。土坑群調査。18・19住の掘り下げ。
- 8月10日(木) 晴れのち曇り 18・19住の掘り下げ、18住平面図作成。16住ピット・地床炉完掘り。
- 8月11日(金) 晴れ 18住遺物出土状態撮影、19住ベルト外し。
- 8月12日(土) 晴れ 15・17・18住撮影、15・19住の精査。
- 8月13日(日) 晴れ 14・15・18住床面精査。19住の遺物取り上げ。
- 8月14日(月) ～16日(水) 盆休み。
- 8月17日(木) 晴れ一時雨 19住遺物取り上げおよび床面精査。
- 8月18日(金) 晴れ 18・19住のピット検出作業および半割と断面実測。
- 8月19日(土) 雨
- 8月20日(月) 晴れ 18・19住の完掘実測。14・19住および全体写真撮影、全調査終了。

## 第2章 遺跡とその環境

### 1. 自然環境

生坂村は南方上流から北方へ蛇行しながら貫流する犀川を唯一の水域とする。東側の右岸は岩殿山（1007m）を主峰とする山脈と、大城（986m）・京力倉などの連峰からなる生坂山地として坂北村と境される。西側左岸は松本盆地と犀川の間において、大町市東方の鷹狩山、大峰山、大穴山など1000m程度の比較的平坦な山城は中山山地として形成されている。北方下流域は支流である麻績川の北辺の聖山山地からなるが、これらの山城を含めて広く筑摩山地と総称されている。犀川はまさにこの筑摩山地を横切り悠久の大地の歴史に刻まれた大河川であるといえる。

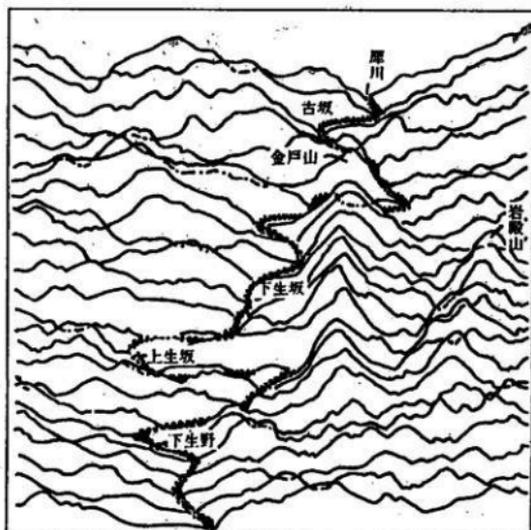
フォッサマグナの海が長野県から北方へ去った第三紀から第四紀初頭には、海底地形がたび重なる海底火山や地殻の変動によって押しあげられ、平坦地形となった地表面をすでに犀川水系が流れていた。奈良井川や梓川、高瀬川が未だ流路とならなかった地質時代である。第四紀には早い新層活動が活発となり、松本盆地などの陥没が進行するのに伴い、筑摩山地は相対的に隆起して河道は狭められてくる。旧犀川水系は下方へ向かって比較的侵食しやすい第三紀の砂岩や岩泥、火山砕屑岩などの岩盤に穿入する下刻作用が生ずる。さらに旺盛な水流による下刻はその流路を変えることができずに深く狭いV字状の峡谷が造成される。現在、生坂地籍内で比高400mをこえる地形を見ることができる。

生坂村を通過した犀川は、八坂村、更級郡大岡村境を経て上水内郡信州新町を出口として長野盆地に至る。この間の犀川は山間地帯を流下する河川としては水流がかなり緩やかな蛇行を繰り返して、流域には差切峡や山清路などの景勝地を出現させている。水域に発電用ダムができるまでは、松本と信州新町を結ぶ犀川通船が経営されていた。

このような大地の間欠的な隆起と水流の下刻の相乗作用によりV字状に抉られた兩岸は一様に急傾斜面を呈するが、蛇行する流路の内側に形成されるという河岸段丘がわずかながら形成されている。上生坂や下生坂地籍では比較的広範な段丘が残されているが、特に上生坂で最も発達が著しく、高位・中位・低位の段丘面が形成され、比高100mを超える面の間に幾段もの細かい段丘が造出されている。しかし、流域全体としてはきわめて微小な段丘としての地形を留める程度である。段丘面には表土の下に基岩に重なってかつての河床礫が堆積している。概ね表土は薄く、河床礫が露出する箇所が目立っている。

遺跡の所在地である下生坂地籍では、東側山腹の数段の小規模な段丘に耕作地が設けられていて、あえて形容すれば「耕して天に至る」の風情を醸している。しかし、西側河岸寄りでは舌端部分でたちまち急峻な懸崖となって河床まで陥ち込んでいる。遺跡はこのような段丘の先端部に位置する。第1次発掘地点は圍場整備の対象となる水田で、いわゆる棚田の形状が保たれているが、第2次発掘地点はこの1段上方の段丘面に当たる狭い耕作地であり、両者の真っ只中を国道18号線（犀川線）が往来しているのが現状である。近くの古老の話では、昭和25年（1950）国道敷設工事の際に、既に住居跡や遺物が散見されていたという。国道は長野盆地まで延々と曲流する犀川と並行する道程を余儀なくされる。当然、現在の集落地はこのような狭小な段丘面上に限定されるもので、古代遺跡の所在地点とその立地環境に於ては時代を越えてさして大きな変容の無いことを窺い知ることができる。

第1図 生坂村地形断面 (水平:垂直=1:2)



## 2. 周辺の遺跡

生坂村内で現在確認されている遺跡は18カ所とされている。しかし、それらはすべて遺跡地名としてのみ記載されているのが実情であり、これまでの遺物の採集調査の結果によるもので、このたびの圃場整備に伴う東部八幡原遺跡の発掘調査はその端緒となるものである。

17カ所の遺跡はすべて犀川の左・右両岸の段丘上に立地している。藤沢宗平氏は東部八幡原について、広範な遺跡とは言いがたいが、河岸段丘上の縄文遺跡として村内で最も古く遺物の多いことから注意すべき遺跡であると指摘している。遺物としては南大原・上原式などの縄文前期土器、石鏃（黒曜石・珪岩製など）、打・磨製石斧、瑛状耳飾り（滑石製）等が挙げられている。縄文中期土器の出土遺跡は東部八幡原をはじめ、中期初頭形式・勝坂式・加曾利E式土器のみられる下生野、田島遺跡などの他に上生坂、関谷芝原などほとんどの遺跡が該当している。その他、石器のみを出土する遺跡、縄文後期土器の存在も認められ、さらに平安期の上師器、灰釉陶器なども単独ではなくわずかながら縄文の遺物に混在して出土している。

村内の遺跡群はすべて犀川流域の台地や低地が立地環境として限定されるが、同水系を全体的に俯瞰すると、奈良井川上流部、塩尻一帯、松本市一帯、大町市一帯（高瀬川流域）と下流域では八坂村、更級郡大岡村、上水内郡信州新町地籍などに区分することができる。これらの各地に分布する遺跡はそれぞれの時代に即した立地条件を選択・占拠した結果として、広く山麓や山沿いの台地の微高地・平地に及んでかなり濃密に散在している。このような展開に対応して、いわゆる山間地域に立地する遺跡（生坂村の諸遺跡は所在としては河川流域となるが）との交渉はどのように意義づけるべきか。ここで筑北地方で犀川水系を沿岸とし、山間地域としての環境が生坂村と相通じる他村での遺跡の内容について警見する。

**八坂村：**村内に14カ所の遺跡が認められている。いずれも台地上、山麓に立地する。うち縄文時代中期に属する遺跡が6カ所を占め、他は弥生・平安の遺物が痕跡的である。双手塚古墳が1号～5号に数えられる。発掘調査された遺跡は土林遺跡のみで、勝坂式・加曾利E式土器と該期特有の各種石器が出土している。

**大岡村：**計17カ所が挙げられていて、山麓・山麓での立地が殆どである。このうち16カ所が縄文前・中期の遺跡とされる。唯一発掘調査された鏡久保遺跡は、細久保式・田戸上・下層式から花積下層・黒浜式など縄文早期から前期にかけての土器・と各種石器が出土している。

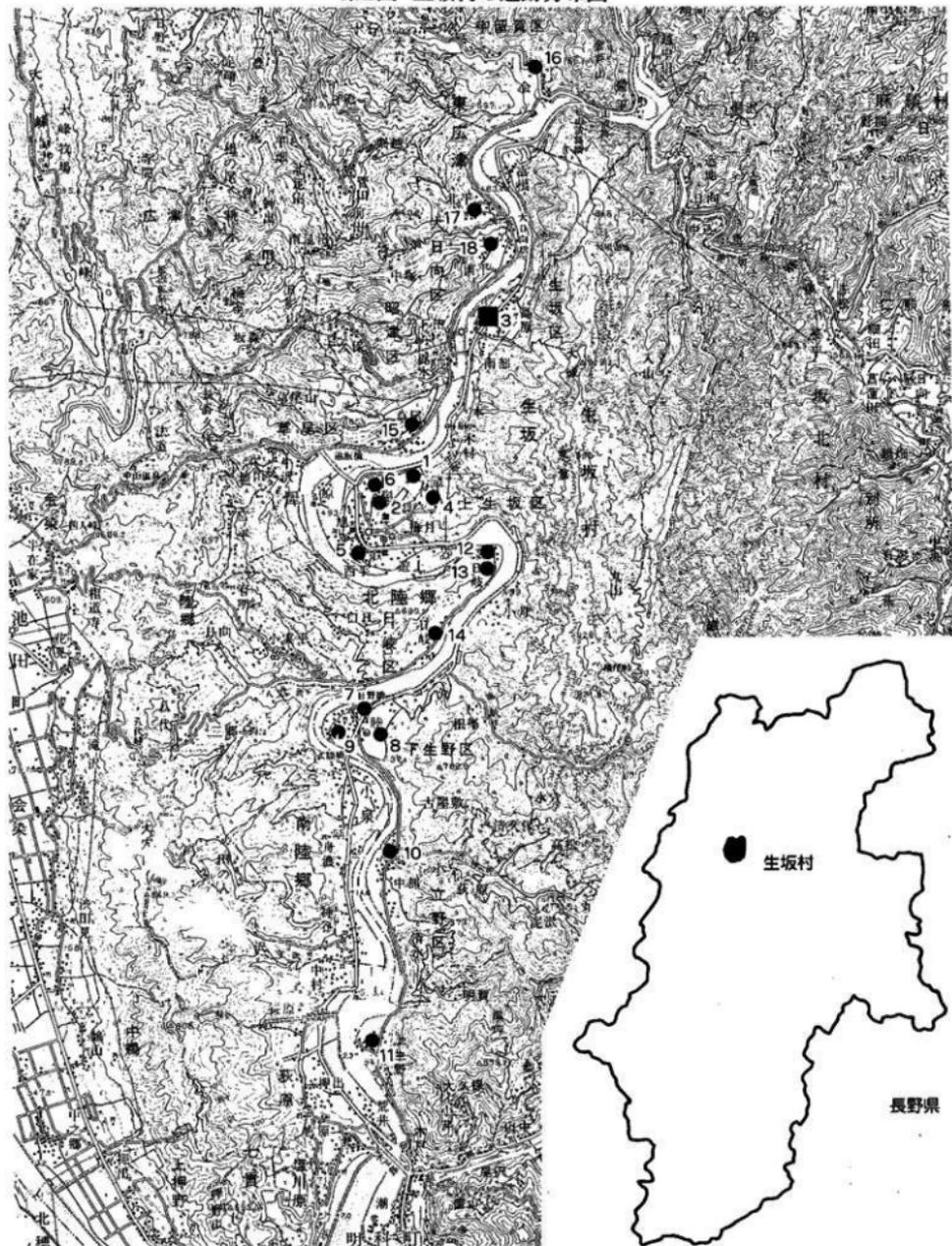
**美麻村：**計9カ所が数えられている。山麓・山麓に位置する縄文遺跡が6カ所を占める。他に古墳1カ所。女犬原遺跡は発掘調査され茅山式・神ノ木式・有尾式・勝坂式・加曾利E式など縄文早期から中期にいたる多様な土器・石器の出土を見ている。

犀川のさらに下流にあたる水内郡信州新町には昭和63年度に発掘調査されたお供平遺跡が在る。犀川の蛇行により形成された台地上に所在する。縄文前期の大規模な遺構群と、それらに関わる土器類は中越式をはじめ関山、神ノ木、有尾、南大原式などに分類され多様かつ大量であるという。石器類では石鏃、石匙、打・磨製石斧、瑛状耳飾り、凹石、磨石、石皿などである。

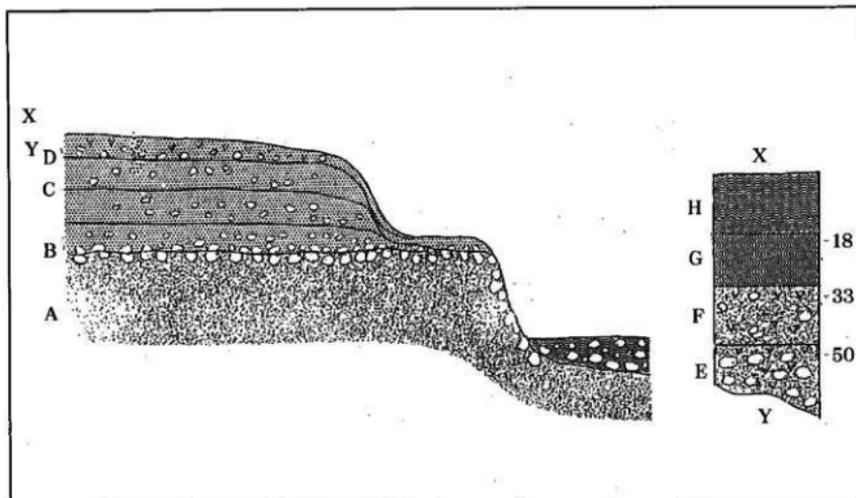
以上概観したように、この地方での遺跡の数は決して多くない。殊に発掘調査された遺跡はきわめて僅かである。しかし、東部八幡原遺跡を含めた数少ない事例からも、これらの遺跡が松本・長野盆地など広域な文化圏を控えて、山間の単なる中継点と認識される問題以上に、文物の交流・伝播のうへの重要な性格が推考されるところである。

付記：古代信濃國の特産品の一つとしてサケの漁撈が行われていた。信濃川水系の千曲川、犀川、姫川などで秋口になると大群で溯上するサケの捕獲は、沿岸で生活する人々にとっての貴重な産物となつたであろう。昭和9年頃、安曇村沢渡の梓川までの溯行が記録されている。

第2図 生坂村の遺跡分布図



第3図 遺構を含む地層図

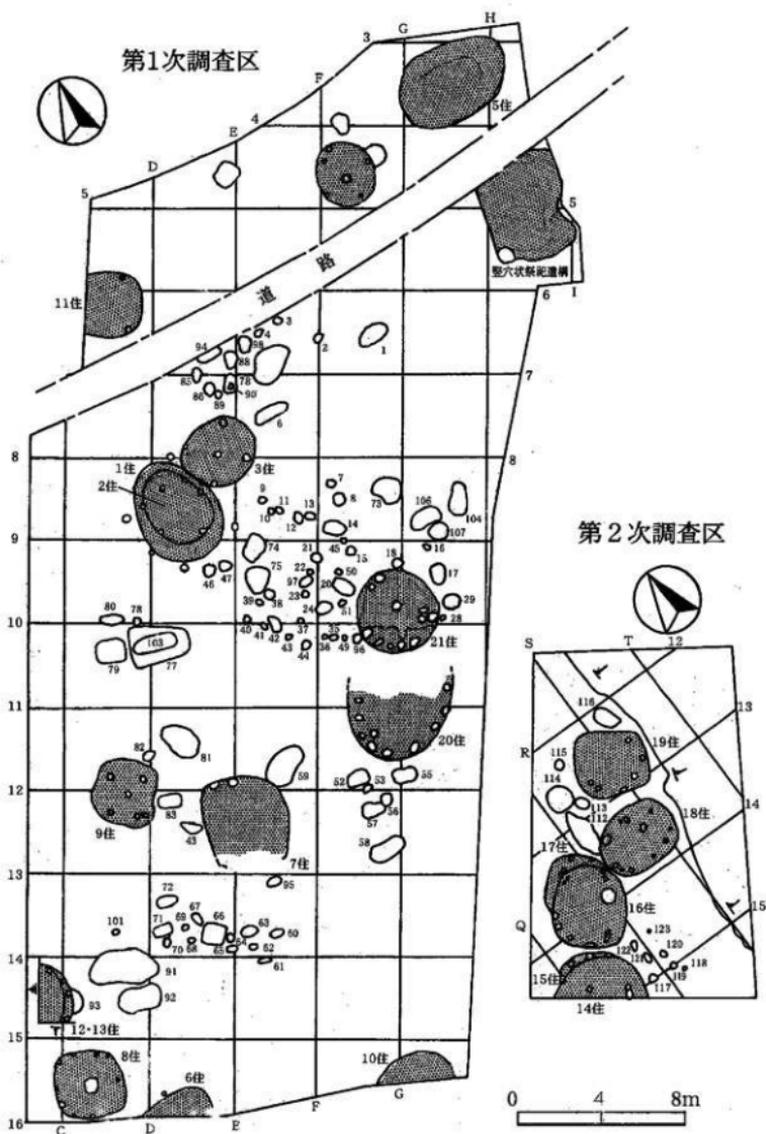


- |  |                       |
|--|-----------------------|
| D: 生坂山地の砂岩・礫岩・泥岩の風化物に<br>ローム層の混入した砂礫土層 | H: 表土 (遺跡面)           |
| C: 砂岩・礫岩・泥岩の風化した砂礫土層                   | G: 有機物を含むローム質砂土 (黒色)  |
| B: C層より粗粒の砂礫層                          | F: 含礫ローム質砂土 (黄色)      |
| A: 岩盤第三紀層の泥岩・砂岩・礫岩の互層                  | E: 礫 (砂岩・ひん岩) とローム質砂土 |

第4図 東部八幡原遺跡調査範囲図



第5図 遺構群分布図 (1:200)



## 第3章 遺構・遺物

### 1. 住居跡

#### (1) 第1号住居跡 (第6図・図版21～23)

位置：C8～C9、D8～D9

重複関係：第2号住居跡を切り、第3号住居跡に切られる。

覆土：黒褐色砂質で砂岩風化小礫が混在している単層。

規模・形態：長径5.3m、単径4.2mを測り、長円形を呈する。

床・壁：壁高は西から南にかけて10～20cm程の浅い遺存で、しかも部分的に観察できる程度に過ぎない。床は第2号住居跡に重複するため不明瞭で、周囲の床面残存部分により確認した。

ピット：床面には明確なピットは認められないが、外縁部に7基の柱穴状の深さ約20cm以内の落ち込みが検出されている。

炉：不明である。ただ西部の外周近くに数個の焼き石がまとめて遺存しているのが検出されている。しかしながら本住居跡との関連は判然としない。

#### (2) 第2号住居跡 (第6図・図版21～23)

位置：C8、D8～D9

重複関係：第1号住居跡に切られる。

覆土：第1号住居跡と酷似する単層。

規模・形：長径3.6m、短径2.6mを測り、長円形を呈する。第1号住居跡と共に長軸は北向きである。

態床・壁：壁高は数cmの深さであり、全体的に明瞭でない。床は黄色の細粒風化砂土を含むローム層である。

ピット：深さ20cm程度の柱穴とおぼしきピットが6基検出された。うち5基は壁柱穴である。

炉：中央部に30×20cm大の焼け石と焼土が遺存していたが掘り込みは認められず不明である。

遺物：古期となる2号住居跡は縄文前期前葉の土器を主体とする。中葉黒沢式は僅か1点のみであった。1号住居跡は同期後葉の諸磯A期に比定される。第2号住居跡の時期は、第1号住居跡床面下約25cmから推定して前期前葉関東山式併行期に帰属の可能性があるものと考えられる。しかし、遺物の出土状態からは一部1・2号住居跡の対比は明瞭でない。土器片はすべて細片化されているが、総数は150片を超える。詳細は後述する。石器は石皿、磨製石斧、数條の溝がある玉砥石写真と台石が相伴出土している。南側床面に黒曜石のチップがまとめて検出された。

(3) 第3号住居跡 (第7図・図版27-1)

位置：D7～D8, E7～E8

重複関係：第1号住居跡を切る。

覆土：黒褐色砂質で砂岩風化小礫が混在する単層。

規模・形態：長径3.8m、短径3.2mの長円形を呈する。

床・壁：壁高は全周にわたり10cm内外の深さで傾斜する。床は黄色の風化砂土が混在する。やや粘質を帯びたローム層である。

ピット：4基の主柱穴が発見された。深さはP1が16cmを測り他3基は32～33cmを測る。

炉：底部を打ち欠いた保存良好な埋燵炉。

遺物：炉として使用された土器は中期前葉の新道式土器である。文様は隆線による区画分を施し、その間は斜行沈線と懸垂文で埋められている。

(4) 第4号住居跡 (第8図・図版26、27、28)

位置：E4, F4

重複関係：土坑110を切る。

覆土：黒褐色砂土で、風化小礫を含む単層

規模・形態：長径3.2m、短径2.8mの規模で長円形である。

床・壁：壁高は検出面から5cm程度の深さで明確さに欠ける。床は黄色風化砂土を混在するローム層である。

炉：緑石4個を用いた方形石囲い炉で頂部より底部までの深さは25cmを測る焼土は認められなかった。炉の大きさは一辺が45cmである。

遺物：土器は一括されて多量に出土している。主体は藤内I式と見なされる。なお、新道式土器1個の混在が注意されるが、経路は不明である。それぞれの土器の保存状態はきわめて良好で、ほぼ原形に復したものの10個を超える。

石器は石鏃が20数点検出され、石匙、石錐の点数も多い。垂れ飾り、耳飾り等の装身具も認められる。

(5) 第5号住居跡 (第8図・図版29、30、31、32)

位置：F3, G2～4, H2～H3

重複関係：なし

覆土：主に4分層に観察された。①黒色性の強い黒褐色砂岩風化礫少量混在。②茶褐色土砂質層(やや灰色を帯びる)。③礫(小、中)角質性混入黄色土、風化小礫多量。④黄色砂質土、均質性ある砂層。

規模・形態：長径5.5m、短径3.7mを測る長円形。

壁高は最深30cmを測ると思われるが、掘り下げおよび、床面精査不十分のまま調査を

床・壁：修了したため不明。

遺物：土器は縄文前期後葉の諸磯A・Bを主体とし、かなり多量である。ただし破砕片はいずれも大形片として残存し、復元できた個体数は9個にのぼる。覆土中に平出3Aの土器片1片が混在していた。石器は各種類とも全住居跡のなかでもっとも多量である。石鏃、右匙の数はかなり多く、打製石斧10点以上、同じく磨製も数点出土している。他にも石錐、スクレーパー、ピエスエスキューユ等も共伴している。さらに装身具として滑石製の瑛状耳飾りが欠損品ではあるが2点出土している。

(6) 第6号住居跡 (第10図・図版38)

位置：C15, D15

重複関係：なし (区域外不明)

規模・形態：全体部分のうち北側1/4が調査対象となる。残存部長3.5m。

床・壁：検出時にすでに床面の一部も表出し、壁は最深5cm残存。

ピット：調査区内では検出されなかった。

かまど：北かまど (石組み)

遺物：羽釜の口縁部のつばより上方の部分が出土している。

平安時代中期 (土器編年 IX~XII) のものと推定される。

(7) 第7号住居跡 (第10図・図版38)

位置：D11~D12, E11~E12

重複関係：土坑59を切る。

規模・形態：南側の一部での検出は不明、一辺4mのほぼ隅丸形状の範囲が住居跡と見なされた。

床・壁：壁の周縁が確認され、その内側の底辺部分が床状に固く締まった土質を保っていた。

ピット：不明

遺物：平安時代前・中期の須恵器片が出土している。6・7号住居跡を通じて、土師・須恵器片が残存しているが、住居跡との明確な関連は不明である。同様に縄文時代の石鏃・石匙なども混在している。

(8) 第8号住居跡 (第11図・図版32、37)

位置：B15, C15

重複関係：なし。

覆土：やや明るい黒褐色砂土で小礫が混じる単層である。

規模・形：一辺3.3mの隅丸方形。

懸床・壁：検出面では僅かに縁辺の形態が認められる程度で、壁高、壁面の状況は不明。床面は粘質を帯びたローム層で固く締まっていた。

ピット：壁柱穴が9基検出され、さらに中央部分に70cmの浅い落ち込みがある。

炉：中央部の落ち込みが炉と考えられるが焼土の遺存はなかった。

遺物：中越式土器が1個体出土した。石器は式鑑、石匙、石錐がわずかに存在している。

(9) 第9号住居跡（第12図・図版33）

位置：C11～C12, D11～D12

重複関係：なし

覆土：上部に大量の（中、小）礫が集石し、覆土はやや粘質を帯びた黒褐色砂質土（小礫を含む）の単層である。

規模・形態：一辺4.5mのやや不整な隅丸方形である。

床・壁：壁高は遺存が余りにも浅く定かではない。床面は中央部に保存状態は余り良好とは言えない埋裏が残存していたため明確となった。

ピット：主柱穴4基がそれぞれ四隅に位置する。他に不明小ピット1基が存在する。

炉：中央部に埋裏がある

遺物：埋裏は中期前葉・貉沢式土器である。日縁部は半欠、胴部の破損もいちじるしいが、文様・器形はおよそ推定できる。その他の遺物は見当たらない。

(10) 第10号住居跡

位置：F15, G15

重複関係：なし（区域外不明）

覆土：黒褐色砂質土で小礫をぶくむ単層

規模・形態：最大弦長4mの北側部分のみが半月状の形で調査区域となった。落ち込みの傾向が確認

遺物されたが詳細は不明。

：前期後葉、諸磯式土器の細片が散布状態で残存するのみである。

(11) 第11号住居跡（第13図・図版34）

位置：C5, C6

重複関係：なし（区域外不明）

覆土：黒褐色砂質土

規模・形態：北西側が区域外で調査不能。だが、一辺3.4mの隅丸方形プランと推定される。

床・壁：壁高は東側で約7cmで垂直の状態を呈していた。床面は黄色ロームで砂岩質の平石が敷

ピット：個まとまって床面に張り付いていた。

炉：壁際に2基検出された。

遺物：不明

：土器は中期初頭の新崎式（梨久保式並行期）から貉沢・新道式までが含まれるが、新道式が主体となろうか。復元可能な大形片が多く、他に細片などはほとんど見当たらない。石鑑が数片検出されている。

(12) 第12、13号住居跡 (第14図・図版24)

位 置 : B14, C14

重複関係 : 第12号住居跡が第13号住居跡を切ると思われる。双方共に全体の1/5~2/5が確認できる程度であり不明。

覆 土 : 黒褐色砂土

規模・形態 : 不明

ピ ッ ト : 範囲内で4基が存在する。

炉 : 第12号住居跡で地床炉が1基。

遺 物 : 土器の出土は少量である。前期前葉の土器片が主なものであるが、早期末葉の茅山式の尖底部分が2、3片検出されている。石器では装身具のヒスイ大珠 (図版、写真) とコハクの詳細片が13号住居跡の覆土下部から黒浜式土器と共伴して出土している。

(13) 第14号住居跡 (第15図・写真)

位 置 : P14, Q14~Q15

重複関係 : 第15号住居跡を切る。

覆 土 : 主に2分層したが、いずれも暗褐色砂質で上層は風化した砂岩の小礫を含む。

規模・形態 : 調査区域内の最大弦長4.4mを測るが、3/5が調査区域外に拡がる長円形プランと考えられる。

床・壁 : 床は風化した細粒砂岩塊を含む黄褐色ローム層で平坦であった。壁は傾斜し検出面から

ピ ッ ト : 約23cmの深さをもつ。

炉 : 深さ10~28cmのピット様のものが、3基検出されたが形状・規模から柱穴とは断じられ

ない。P1、P2は第15号住居跡に帰属する可能性もある。

遺 物 : なし

床・壁 : 前期後葉の土器片が、覆土上より少量流れ込みの状態で検出されたのみで、床面では確認できない。石楾が1点認められる。

(14) 第15号住居跡 (第15図・写真)

位 置 : P14, Q14

重複関係 : 第14号住居跡に切られる。

覆 土 : 砂岩の細礫を少量含有する。暗褐色土が単層で堆積する。

規模・形態 : 残存弦長3.2mである。残部が少なく判然としたない。

床・壁 : 床は第14号住居跡と同じく風化した細粒砂岩塊を含む黄色ローム層と考えられる。壁高は検出面から14~28cmでほぼ垂直であった。

ピ ッ ト : 床面からの深さ12~28cmの壁柱穴が4基ほぼ等間隔で検出された。第14号住居跡のP1、P2は本跡に帰属する可能性もある。

炉 : 第14号住居跡に切られたものと考えられる。

遺 物 : 土器の出土なし。石器は石楾2点のみである。

05 第16号住居跡（第16図・図版35・写真）

位 置：Q13～Q14, R13～R14

重複関係：第17住居跡を切る。

覆 土：風化した砂岩質の小礫を含有する暗褐色を基調としている。

規模・形：長軸3.8m × 短軸3.5mの隅丸方形を呈する。

態床・壁：床は風化した細粒砂岩塊を含む黄色ローム層。壁は最深部で37cmを測り、南東壁がややゆるやかに傾斜する他はほぼ垂直である。

ピ ッ ト：12基のピットが壁際を巡り、その多くは壁柱穴気味で、22～44cmの深さがあり、掘り方は中央に向かって傾斜角を呈した主柱穴と考えられる。P1、P13は第17号住居跡に帰属する可能性が高い。

炉：32×44cmの地床炉で中央より北コーナー寄りに位置する。掘り込みを伴わない。

遺 物：床面より横倒しの状態で一括される土器（北陸系新保式）出土し復元された。その他はすべて覆土からの出土で中期前葉のものである。石器は東南部隅のピットから倒れた格好で砂岩を用いた粗製の石柱（図版）が出土した。他に石鏃、石匙、石錐、石刃などが少数検出された。

06 第17号住居跡（第16図・写真）

位 置：Q13, R13

重複関係：第16号住居跡に切られる。

覆 土：砂岩の小礫を含有する暗褐色の単層。

規模・形：多くの部分を切られ全容は不明であるが、径3.5mの円形と考えられる。

態床・壁：床は暗褐色砂質土層を掘り込んであったが、明確さを欠く。壁高は10cm内外でほぼ垂直である。

ピ ッ ト：柱穴とみられる深さ25cm前後のものが近接して2基、浅い壁柱穴が2基計4基が検出されたが、さらに第16号住居跡のP1、P13は本跡に帰属する可能性が高い。

炉：切られて不明。

遺 物：土器は前期後葉に属する細片が覆土の上部に含まれていた。石槍が1点検出されている。

07 第18号住居跡（第17図・図版25・写真）

位 置：R13, S13

重複関係：土抗112を切る。

覆 土：2分割されるが漸移的でいずれも暗褐色砂質を基調とする。

床・壁：床は暗褐色細粒砂岩塊混じりのやや粘質を帯びたハードロームである。黒曜石の細小片がまとまって検出された。壁高は検出面から約40cmで壁は垂直に近い傾斜を呈する。

ピ ッ ト：壁際を12基が一巡して検出され、中央よりやや東寄りに1基、計13基あるがいずれも10～20cm前後の深さである。P13は規模、形状から貯蔵穴とも考えられる。

- 炉 : 不明。焼土が全く検出されなかったが、位置からP12が該当する可能性もある。
- 遺物 : 土器は前期後葉の破片がかなり多量に出土した。石器は石鏃は認められず、石匙10点程度に磨製石斧、玉等がみられる。黒曜石の細剥片がまとまった状態で検出された。

#### 08) 第19号住居跡 (第18図・図版25・写真)

- 位置 : R12~R13, S12~S13
- 重複関係 : なし
- 覆土 : 2分層されるが、漸移的で褐色砂質土を基調とする。
- 規模・形 : 長軸3.4m × 短軸3.2mの隅丸方形。
- 態床・壁 : 床は第18号住居跡と同様に風化した細粒砂岩塊混じりのやや粘質を帯びたハードロームで、平坦ではあるが東壁から西壁に向かってわずかに地形に沿って傾斜が見られる。壁高は検出面から最深58cmを測り、壁面は急傾斜する。
- ピット : 壁際に径30cm前後、深さ24cm以内の柱穴が7基巡る。p8は北コーナーに位置し、径1mを超すがあまり深くはない。
- 炉 : 不明
- 遺物 : 縄文前期後葉の土器片が覆土中に含まれている。土器片中には諸磯C式が3点ほど混入している。石器は石鏃は見当たらず、石匙が17点と多量である。石錐、打製・磨製石斧も出土している。18号住居跡と同様、黒曜石の剥片の散乱が見られるが、住居跡の特性の一端をしめす現象であろうか。

#### 09) 第20号住居跡

- 位置 : F10~F11, G10~G11
- 重複関係 : 第21号住居跡と重複すると思われるが新旧不明。
- 規模・形 : ピット群の図上復元によりほぼ長円形の様相を呈する住居跡と考えたい。
- 態床・壁 : 削平され壁の周縁は不明であったが、検出面は風化した細粒砂岩塊を含む黄色ローム層でハードであった。
- ピット : 検出されたピット群は約11基で構成され、周順していた。その大部分は径約20×28cmを測り、深さ約10cmと浅いピットの残存であった。しかし、規模、形態の様相から推測しさらに第1号、第2号住居跡等を参考にした住居跡にかかわる柱穴ではないかと思われる。
- 遺物 : 土器片は縄文前期後葉のものであるが、散布状態であり、該期の明確な指徴は不可能である。石器は特定できない。

#### 00) 第21号住居跡

- 位置 : F9~F10, G9~G10
- 重複関係 : 第20号住居跡と重複すると思われるが新旧不明。

規模・形態：径3.2mのほぼ円形。

床・壁：削平され、柱穴のみが残存するため、不明。

炉：中央に凹みが検出されたが、焼土を伴わず不明。

ピット：10基のピットが周巡する。長径は30～48cm、深さは8～20cmである。

遺物：出土状態は20号住居跡と同様な傾向である。

## 2. 竪穴状祭祀遺構（第19図・写真）

位置：G4～G5, H4～H5, I5

規模・形態：農道下にかかる未調査部分もあるが、5.2m×3.7mの規模をもつ不整形長方形のプランである。

底面・壁：精査不十分のため、不明。

遺構：長軸方向の北東側に1.4～2.5mの敷石部、南西側に87cm×96cmの祭壇を構築する。祭壇は底面上最大65cmの高さをもって構築され、平石を2枚平行垂直に地中に埋め、石棒と石柱を向かって左側に配する。

ピット：西コーナーに73cm×84cm、深さ15cmの落ち込みがあり、黒色砂土が堆積する。

遺物：縄文中期中葉（井戸尻I式）の土器が4点出土している。完全復元1個の他は胴部などの部分的な形状復元にとどまる。文様は半人・獣合体様のモチーフといえる。

## 3. 土坑群（第20図・図版35）

今回の調査により大小併せて105基におよぶ多数の土坑が検出された。多様性の性格を持つと考えられる土坑91は、多数の土坑群の中でも格別に大形の土坑として検出されている。長径162cm短径90cmの不整形を呈し、深さは最深部で82cmである。壁面は一様ではなく、長軸の一端から部分的に下方への段状をなしていて、底辺は凹湾状となる。なお、この形状は貯蔵穴、落し穴に類似する。周壁の下方から底部にわたり焼土が薄層ながらも明瞭に残存している。底辺に近い焼土直上の壁面に嵌入する位置で土器1点（写真）（縄文早期未茅山式土器の尖底部）が出土している。壁面から観察される土層の堆積状態は上部から約20cm毎に黄褐色Ⅰ（均一な細粒子を含む砂質性）、黄褐色土Ⅱ（風化した砂礫混じり）、黄褐色土Ⅲ（粘性ある細粒土、黒色の腐食土が点状に混入）などに見分けられる。このような土坑は規模・形状から縄文早期末に出現する炉穴（ファイアーピット）に類似するが、炉穴の一般的な形態とされる径1.5m、深さ30cm前後の大きさに比べかなり大形であり、にわかに炉穴と即断できる論拠に乏しい。しかし、一方、大町市上原遺跡の場合などでは、このような不整形な大形土坑例を挙げ、これを一基の竪穴跡として捉え、簡単な上屋を架けて冬の採暖などを目的に構築された特殊な住居跡とみる考察もされている。なおこの土坑から別項の逆三角形状の石製垂飾りが発見されている。

土坑106は、長径152cm、短径97cmを計る長円形を呈し深さは56cm、その形状から当初から墓坑ではないかと考えられていたものである。前期中葉黒浜式（有尾式）深鉢（写真）が口縁部を下にしたように横転して出土した。上部口縁部に半さい竹管による間隔の長い押し引き結節状浮線文が巡らされ、胸部から下部は器面全体に羽状縄文が施文されている。この土器は大型深鉢で、下部分が意識的に切られている。あるいは

は、お産で死亡した女性の頭部を覆う風習が前期では既に行われていた例が報告されているので、成人女性の埋葬土坑墓として間違いないものと推定した。なお、この土坑墓からは珧状耳飾り等玉類の副葬品は発見されていない。

(第1表)

## 土坑一覽表

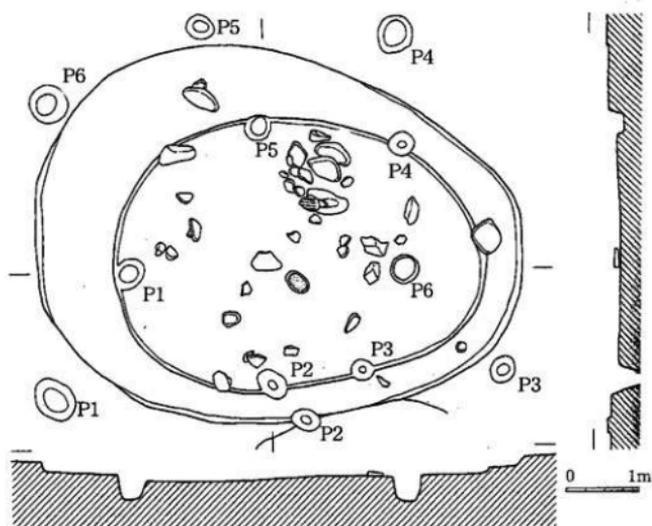
空き番号は欠番、空欄は未計測または計測値不明、( )は調査区域内値

番号	グリッド	長軸×短軸(cm×cm)	深さ(cm)	平面形状	備考
1	F6	170 × 87	46	長円形	
2	E6、F6	50 × 34	30	長円形	
3	E6	40 × 35	35	長円形	
4	E6	53 × 35	40	長円形	
5	E6~E7	220 × 150	40	長円形	
6	E7	188 × 68	43	長円形	
7	F8	47 × 43		長円形	
8	F8	67 × 64	46	円形	
9	E8	41 × 35		円形	
10	E8	44 × 30	45	長円形	
11	E8	46 × 32	36	円形	
12	E8	54 × 45	27	円形	
13	E8	54 × 37	30	円形	
14	F8	135 × 88	54	不整形	
15	F9	42 × 39	32	円形	
16	G9	10 × 30	34	長円形	
17	G9	115 × 98	25	長円形	
18	F9、G10	56 × 48	16		
20	F9	129 × 72	33	隅丸長方形	
21	E9、F9	58 × 50	26	円形	
22	E9	32 × 26	44	円形	
23	E9	36 × 28	24	長円形	
24	E9、F9	85 × 69	20	長円形	
28	G9	28 × 24	28	長円形	
29	G9	95 × 77		長円形	
35	F10	46 × 28	40	長円形	
36	F10	26 × 26	26	円形	
37	E9~E10	26 × 26	36	円形	
38	E9	50 × 48	42	円形	
39	E9	30 × 28	18	円形	
40	E9	44 × 36	48	不整形	
41	E9~E10	41 × 32	20	長円形	
42	E9~E10	78 × 52	38	長円形	
43	E10	32 × 22	20	長円形	

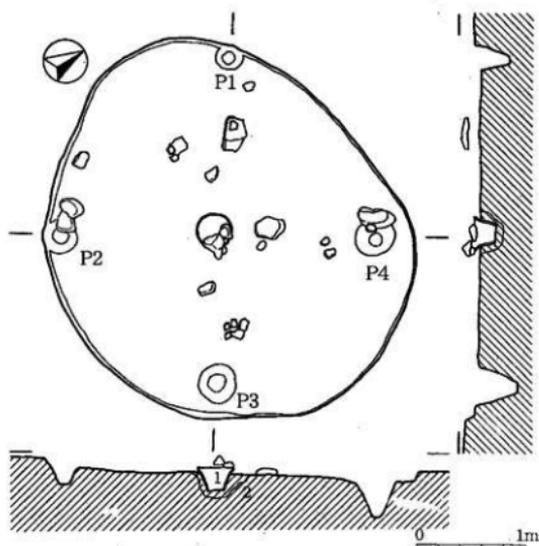
44	E10	55 × 45	20		
45	F8~F9	30 × 24	15	長円形	
46	D9	81 × 47	30	長円形	
47	D9	85 × 75	30	長円形	
49	F10	24 × 22	16	円形	
50	F9	28 × 27	21	円形	
51	F9	44 × 27	18	長円形	
52	F11	116 × 78	12	長円形	
53	F11~F12	50 × 36	10	隅丸三角形	
55	F11、G11	120 × 74	36	不整形	
56	F12	70 × 54	8	隅丸方形	
57	F12	130 × 78	54	不整形	
58	F12、G12	170 × 88	20	長円形	
59	E11	222 × 141	82	不整形	7住に切られる
60	E13	41 × 32	34	長円形	
61	E14	66 × 34	32	長円形	
62	E13	36 × 22	12	円形	
63	E13	66 × 40	8	長円形	中央配礎
64	D13、E13	44 × 22	22	長円形	
65	D13、E13	60 × 30	12	長円形	
66	D13	108 × 94	14	長方形	
67	D13	56 × 34	14	長円形	
68	D13	26 × 24	10	円形	
69	D13	26 × 24	12	円形	
70	D13	32 × 28	12	円形	
71	D13	100 × 60	16	隅丸長方形	
72	D13	92 × 50	22	長円形	
73	F8	×		不整形	
74	E8~E9	×		隅丸長方形	
75	E9	126 × 95	18	長円形	
77	C10、D10	240 × 156	24	隅丸台形	103を切る
78	C9~C10	28 × 26	12	円形	
79	C10	120 × 100	16	隅丸長方形	
80	C9~C10	102 × 44	10	長円形	
81	D11	168 × 128	48	長円形	
82	C11、D11	50 × 42	12	長円形	
83	D12	116 × 76	36	隅丸長方形	
84	D12	92 × 46	14	半円形	
85	D6~D7	68 × 44	26	長円形	
86	D7	52 × 50	56	円形	
87	D6~D7、E7	130 × 60	22	不整形	90と重複、新旧不明
88	D6、E7	90 × 58	42	長円形	

89	D7	36 × 34		円形	
90	D7	34 × 26		長円形	87ち重複、新旧不明
91	C13~C14, D13~D14	162 × 90	82	不整形	焼土多含
92	C14, D14	118 × 66		不整形	
93	C14	150 × (82)		不明	12・13号住に切られる
94	D6	×		長円形	
95	F13	74 × 45		長円形	
96	F10	53 × 50	22	長円形	
97	E9	67 × 48	21	長円形	
98	E6	74 × 53		隅丸長方形	77に切られる
101	C13	32 × 28		円形	
103	C10, D10	168 × 70	26	長円形	土坑墓
104	G8	154 × 85	25	隅丸長方形	
106	G8	152 × 97	56	長円形	
107	G8	89 × 82	20	円形	
108	D4, E4	130 × 120		長円形	4住に切られる
109	F3~F4	100 × 83		長円形	
110	F4	107 × (45)		不明	
112	R12~R13	270 × 112	32	不整形	
113	R12	68 × 50	26	長円形	
114	R12	122 × 111	38	隅丸長方形	
115	R12	49 × 48	25	円形	
116	S12	123 × 77	49	不整形	
117	Q14~Q15	45 × 38	13	長円形	
118	R15	23 × 20	12	円形	
119	R14~R15	36 × 32	30	円形	
120	R14	30 × 28	16	円形	
121	Q14	50 × 27	12	長円形	
122	Q14	48 × 30	7	不整形	
123	R14	15 × 15	6	円形	

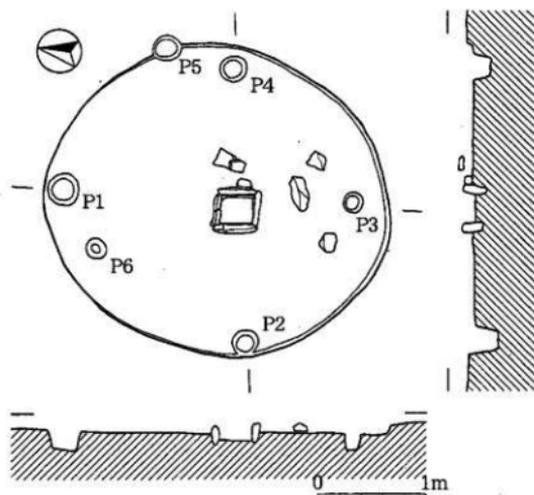
第6図 第1.2号住居跡



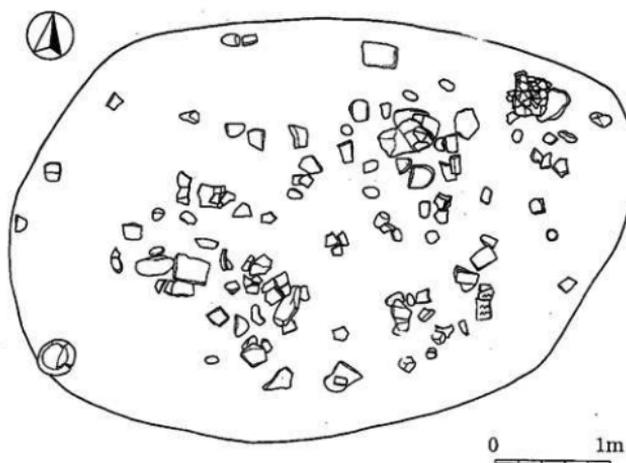
第7図 第3号住居跡



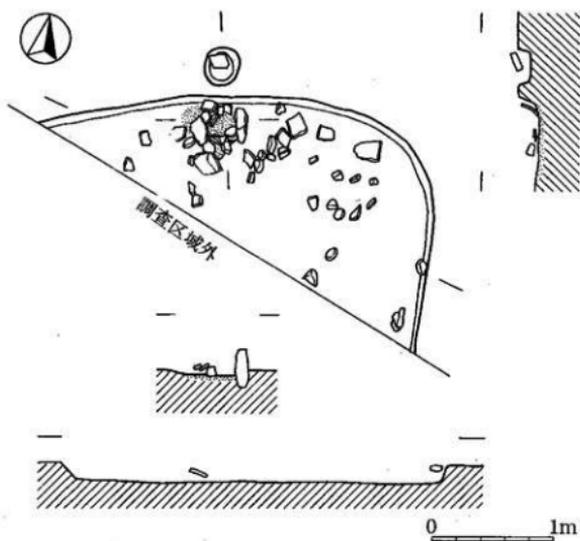
第8図 第4号住居跡



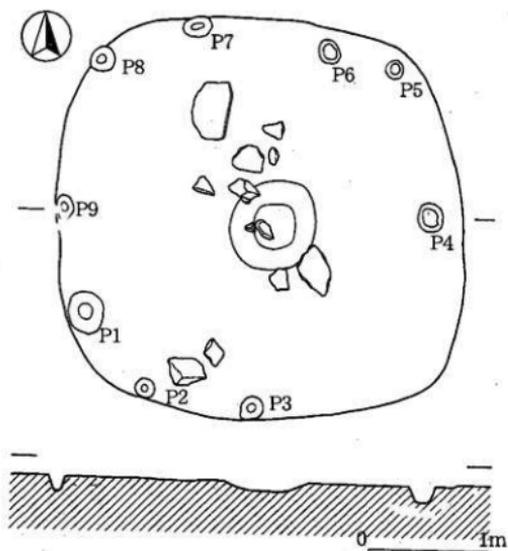
第9図 第5号住居跡



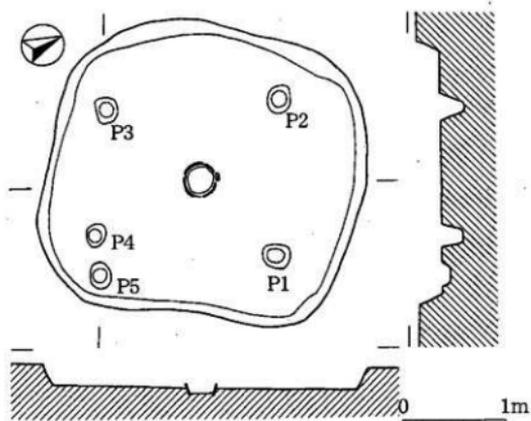
第10图 第6号住居跡



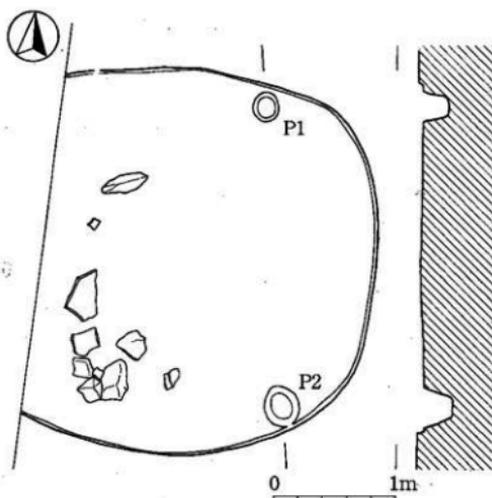
第11图 第8号住居跡



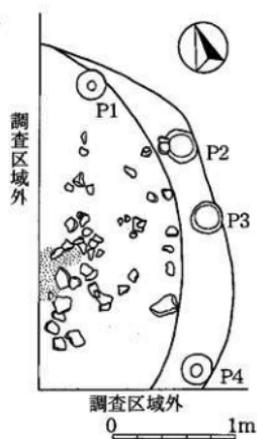
第12図 第9号住居跡



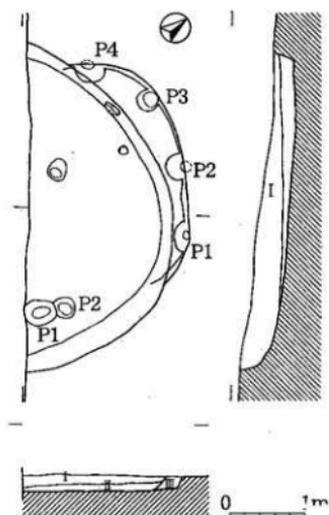
第13図 第11号住居跡



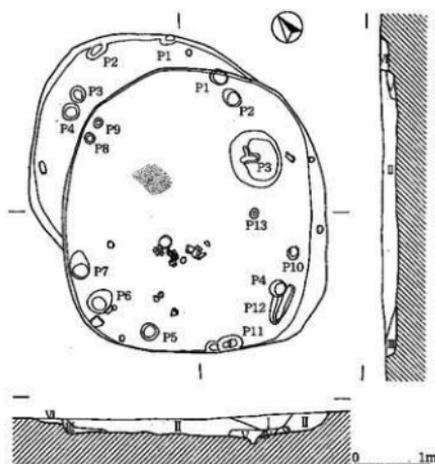
第14図 第12.13号住居跡



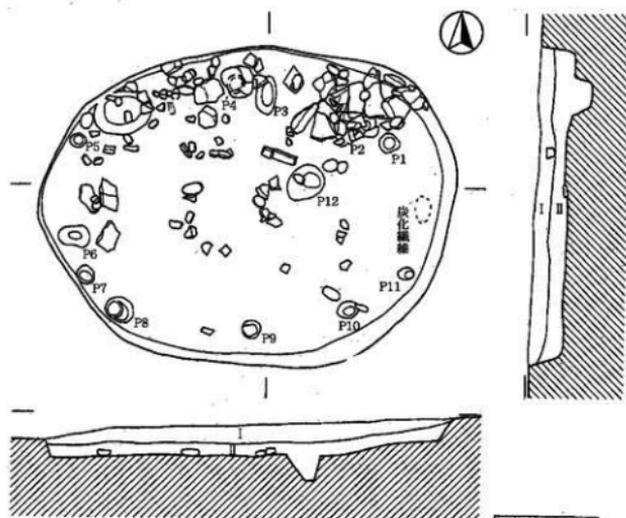
第15図 第14.15号住居跡



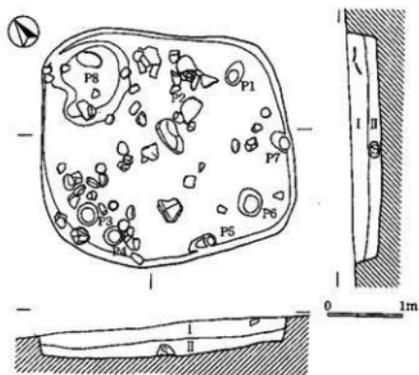
第16图 第16.17号住居跡



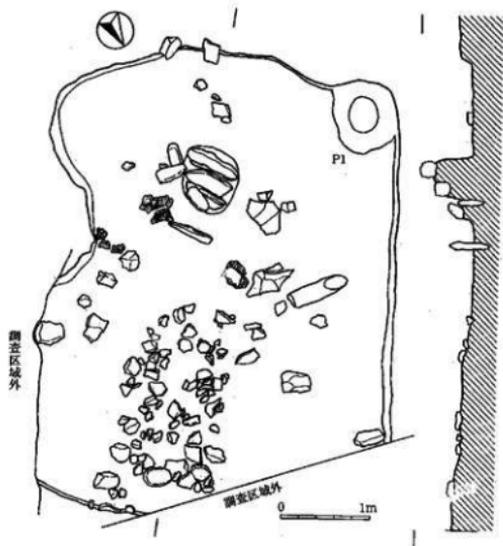
第17图 第18号住居跡



第18図 第19号住居跡



第19図 竪穴式祭祀遺構



## 第4章 遺物

### 1. 第1号住居跡出土土器（第21図1～68、第23図150）

1号住居跡の出土遺物は、同跡の検出面により床面までのほぼ18cm前後の層間に含まれたものである。この中、土器片は必ずしも多くはなく、しかも資料として活用できるものは更に少なく、都合69片に過ぎなかった。しかし、本遺跡出土の内容を殆ど包括する傾向が見られるのでここに詳細を記載する。完形を示すもの皆無でいずれも破片であり眼で見て確認できる特徴ある施文を示すものはことごとく採用する。従って拓本面では明確に施文をうつし出さない痕跡的なものもあるのでその点留意されたい。

土器はその特徴に従い、12分類したが、内訳は縄文前期所属土器がほとんどをしめ、これに微量の縄文中期土器片と年代下降して土師器片が1点含まれる。以下、土器説明を便ならしめるため、第1号住居跡、第2号住居跡出土の採用土器片に対し、拓本面に一連番号を付し整理した。

#### ①第1類土器（第21図1、60、61）

本類は1、60、61が含まれる。共に無文であり、胎土に砂粒を含み、器厚は0.5～0.6cmとややうすい。1はゆるやかな丸い突起をもつ波状口縁部片で色調は暗褐色となる。60は61と共に平縁口縁となる。内壁に横位の調整痕が僅かにあり、61と共に内が暗黒色、外壁が黄褐色となる。縄文前期初頭の中越式土器に対比されるものであろうか。

#### ②第2類土器（第21図2、3、4）

2、3、4、の僅か3片である。2は平縁の複合口縁部であり、砂粒を含み茶褐色となる。口縁上に八の字が連続し、複合上およびその下部に斜縄文が施される。3と4は共に燃糸文が施される胴部片である。暗褐色系となるが、3は微量の繊維が含まれ器厚0.8cm、4は0.7cmである。花積下層式相当の土器かと思われる。

#### ③第3類土器（第21図5～10、62～64）

本類に5～10、62～64をまとめる。暗褐色ないし明るい茶褐色の色調をとり、器厚0.7cm前後の中厚手となるものが多い。胎土に砂粒を含むが、この内、10と63には微量の繊維が認められる。また、施文面では複雑な手法による縄文が施されるものが多い。拓本面では明瞭に描描できない痕跡的な肉眼で確認し得るものまで採用してあるのでそれらは記述面で明らかにしたい。

5は平縁で複雑な縄文、6は平縁の複合上に刻目をつけ斜縄文を、7は平縁の複合上およびその下部に平行する燃糸文が施される。8は隆帯が2本横走り、その下部は縄文となるらしいものである。10および63は施文を同じくさせるものである。以上縄文の特殊な構図をとる。共に調整のよい茶褐色の明るい色調をなす胴部片である。62は平縁の外唇直下に隆帯をめぐらし複合上とし、その上面に刺突文あるいは×細沈線文などみえるが全体の構図は不明である。茶褐色で、0.5cmと器厚はうすい。64は平縁口縁部片で口唇にそい縦形に4個単位の櫛歯状刺突文を規則的に施しており、口唇上にも同様施文工具による細かな刺突文をのこす。器厚0.4cmとうすく焼成はよい。縄文前期初頭の神ノ木式期に相当すると考えられる類似土器をまとめた。

④第4類土器（第21図11、18～28）

本類に11、18～28を所属させる。縄文前期前半に位置する黒浜式期に相当すると考えられる土器をまとめた。特徴的な点をあげれば、胎土に微砂粒と繊維を含み、その故か色調がいずれも暗黄色をとり、器厚は0.8cm前後とやや厚手となる。また施文は斜縄文、羽状縄文、コンパス文様等残される1群の土器である。11はコンパス文様と縄文が残される胴部破片であり、18、19、20は共に平緑口縁部片で18、19は斜縄文がうすく、20は口縁部下を幅広くして、黄位の帯状面を巡らせ、頸部以下とに羽状縄文をのこす。21～28は斜縄文ないしは羽状縄文をのこす類である。破片が小さいため、斜縄文の中には本来羽状をなしていたものも考えられる。22、23には縄の結束部のあとがのこる。

⑤第5類土器（第21図12～17、29～43）

12～17、29～43が含まれる。小破片のため全体をうかがい得る資料はないが施文のあり方から器の頸以上部に櫛歯状連続刺突文、あるいは平行沈線文をもって三角状ないしは菱形の施文をのこす類と頸以下を羽状縄文で飾る類との破片をまとめる。

本類の特徴としてあげられることは器の胎土が微砂粒を含むものの無繊維となること。黄褐色ないし暗褐色を呈すること。器厚が縄文前期前半の有尾式期に対比されるものである。12、14～16は、沈線と櫛歯状連続刺突文の併用によって構図がとられ13は連続刺突文、17は平行沈線文のみが残される。29～43は共に羽状縄文がのこされる類である。この中32、43は平緑口縁部破片で他はすべて胴部破片となる。31、40は内壁に調整痕あり仕上がりを良くし、43は粗雑である。

⑥第6類土器（第21図44、46～51）

本類は44、46～51が所属する。比較的細かく整った粒子の縄文が施される。1群の土器と平行沈線による施文を残す。器厚は0.6cm前後とややうすく、総じて暗褐色系の色調をとる。胎土に微砂粒を含み繊維の混入はない。44は口唇外側を挟り取るような凹帯がめぐる平緑であり、47は逆に口唇の内側を挟りとり口唇を細く立ち上げらせる平緑である。また、51は平緑の口縁部をやや肥厚させその部分に半載竹管による平行沈線文により横位の三角区画文を連続させている。他はいずれも胴部破片であるが49は無節縄文が施されている。以上は、縄文前期後半初頭の諸磯A式に比定される土器であろう。

⑦第7類土器（第21図52）

52が唯一の資料である。器厚1cmの暗黄色となる胴部破片で、平行沈線を横走させたり斜走させ沈線による文様の変化を表出する。小破片で全体をうかがえないが、三角状の無文部など残す。前期末の諸磯C式期類似土器とみてよいだろう。

⑧第8類土器（第21図45、53、54）

本類は関西系文化の影響を受けたとみられるものをまとめた。45、53、54が含まれる。それぞれ施文のあり方を異にしており、45は器厚0.3cmのうす手となる平緑口縁部破片で底部に向かい直行する器形を示す。胎土に微砂粒を含み、黒褐色を呈し、整った斜縄文を残す。53は器厚0.6cmの波状口縁部である。54と共に砂粒を含み茶褐色となり平行沈線内に細かな爪形文を連続させている。54は器厚0.6cm胴部片で細かい爪形文を整然とまばらに施す。いずれも破片は小さいが、特徴ある施文を認めたので資料として採用する。

⑨第9類土器（第21図55～59、65）

縄文前期所屬とみられるもので、その形式や位置づけのわからないものを一括する。55～59、65が含まれる。55、56は共に器厚0.5cm茶褐色となる平縁口縁部片である。施文も異条斜縄文を共にのこし、55は尖る口唇の外側に斜めの細かい刻目を付し、56は口唇に面をとり、その上部に太い規則的な刻目をつけている。57はやや肥厚する口縁部に細かな浅い円形刺突文を横位に3条平行させ、以下に斜縄文を施す。口唇上にも規則的な刻目を入れている。58は斜縄文を、59は無節斜縄文をのこしその結末部の跡をのこす。以上は施文のあり方から第3類土器に含まれるものかも知れない。65は器厚0.7cm黒色を呈する無文の平縁口縁部片である。

⑩第10類土器（第21図68）

本類は68の一例である。覆土上層部からの出土である。縄文中期でも初頭に近い落沢式類似土器の小片で平縁口縁部を示す。やや暗い色調で器厚は0.7cm口唇内側に丸みのある肥厚をもたせている。整った平行沈線による横位区画帯をつくり、その内部に粒子のそろった縄文を転載している。壁調整の仕上げをよくしている。

⑪第11類土器（第21図66、67）

66、67の2例で縄文中期後半土器片をまとめた。共に覆土の上層部より検出されたものである。66は茶褐色の焼成のよい土器で胎土に微粒砂を含む。波状口縁部で曲直の細粘土細貼付により自在な区画をつくり、その内部に縄文を施す。67は縄文中期末の土器に特徴的な幅広い蕨手の沈線文が充填される。内湾する平縁口縁の内外壁面調整のよい土器で暗褐色となり焼成はよい。

⑫第12類土器（第23図150）

150の一例である。覆土上層部から出土した土師器の銚釜であり、器厚0.7cm黄褐色となり焼成はよい。口縁部をかるうじてのこしており、図上復元できたがその立ち上がりは直立し口径2.1cmを記録している。内外の壁面調整は良好で外器厚に整ったか轄整形痕が残されている。以上の特徴等から10世紀末～11世紀初の位置づけが可能かと思われる。

## 2. 第2住居跡出土土器（第22図69～111、第23図112～156）

2号住居跡の出土遺物は、1号住居跡の床面下約25cmの層間より出土する。遺物は石器の面では大形のものゝ姿を消し、石鏃、石匙等小型なものとなった。しかし、土器の面では破片が大形となり、文様なども摩耗度が少なく、第2図、第3図の如く良好な資料が得られた。完形を示すものはいずれも破片のみである。

出土土器はその特徴に従い、10分類して説明を加えたが、その主体は縄文前期全般初頭のものでしめられていた。その池縄文前期後半土器、中期前半土器が僅かばかり含まれる。また各土器片には1号住居跡出土土器よりつらなる一連番号を、2号住居跡出土土器にも連続させ説明に便ならしめた。

①第1類土器（第22図72、84）

本類は72、84の僅か2例である。尖底と口縁部破片である。資料に乏しいが72は無文となる尖底部である。この土器の胎土のあり方、色調、器厚、器壁等を総合的に観察するとき、第2類に位置づけの中越式類似土器との結びつきが全く考えられず本類に含めた。外面黄褐色、内面黒色で胎土に砂粒と微量の繊維が認められる。重量感のある丸みのある尖底となる。84は器厚0.8cmの平縁口縁部破片である。口唇を若干肥厚させ僅かに外反して器を開口させている。胎土に微量の砂粒と繊維を含み暗褐色となる。整った斜縄文が縦方向に帯状に施され、また、口縁内側にも横位の縄文帯が認められる。破片が小さく器の全体を知り得ないが、これらの土器は縄文早期の押形文系の土器に伴出がみられる。縄文施文の土器に諸様相がよく似ており、72と共にいずれも該期所屬とみてあやまりがないであろう。

②第2類土器（第22図69～71、73～75）

本類は69～71、73～75が含まれる。無文に近い土器群であり、器厚は0.4cm前後とうすく、黄褐色ないしは暗褐色となる。また、胎土には微量の砂粒が含まれる。69は丸いゆるやかな小突起をもつ波状口縁部で、外反して開口する器形である。器の内外壁に凹凸をもつ調整痕を残している。70は口唇に小突起をもつ波状口縁部でその部分に隆帯を6cm垂下させ加飾しており、隆帯上には更に日立たぬ刻目を付している。71は凹凸のある壁調整の悪い胴部片である。73は70、75とは固体を別にする。頸部に凹凸をもつ胴部片でまばらな細沈線がわずかにうかがえる。75は隆帯加飾の頸部片で73、74と共に焼成は良い。

本類は縄文前期初頭の中越式類似土器片であり、特に69、70などは床面に密着して検出されている点注意される。

③第3類土器（第22図76、77）

76、77の僅か2例である。76は器厚0.4cmとうすく、無文の平縁口縁部片で壁面に凹凸を残す。77は器厚0.5cm、暗褐色であるが焼成よく固い。やはり無文の平縁口縁部片で壁面に顕著な凹凸を残す。縄文前期初頭のいわゆるオセンベ土器に通ずるものであろうか。

④第4類土器（第22図78～80、82、85～98、第23図134～147）

本類は第22図78～80、82、85～98、第23図134～147が含まれる。

これらは2号住居跡出土土器の主体をしめる一群の土器ともいえるものであり、ここに一括したいが、施文面を中心に多様性がうかがわれるので、更にa～d分類し、それぞれの特徴等について記述する。

a類／ 第22図の78、79、85～89、94～98、第23図134～138、140、144、146が含まれ、第4類土器のなかでは数量的に最も多い。いずれも縄文の施されたもので、羽状となるもの多く整然としている。また、多くが口唇上に刻目等加飾している点も共通している。器厚は0.6～0.7cmとややうす手づくりとなるが、総じて黄褐色、暗褐色系をとり焼成はよい。胎土には微量の砂粒を含むものの繊維の混入はなくなる。78、79は平縁口縁部の大形破片で87と共にあるいは同一固体かとも思われる。口縁がゆるやかに外反し開口する鉢形土器とみられ、いずれも横位に羽状の方向を同じくする縄文が器全面に幾段も整然と施される。口唇に面があり、そこに細かな燃糸の圧痕を刻目風に密に連続させている。壁調整の指頭圧痕による凹凸が顕著に残されるが、焼成はよく固い。85は羽状の縄文が菱形をとるらしい胴部破片。86、88は共に整った粒子の複雑な羽状縄文を器全体に施す。壁調整のよい固い土器である。両者はあるいは同一固体とも思われる。89

は部分的に具節羽状縄文ともとれる施文を残し、1cm幅内に5本が一単位となる細かな櫛歯状工具を使用して一見波状を呈する。上下交互の組み合わせによるコンパス文を横位に連続させ複雑な加飾をしている胴部片である。外面黄褐色、内面黒色で壁調整はよく固い。94~97は共に平緑の口縁部破片である。器厚は0.6cm前後となり、95を除き黄褐色系をとる。94には微量の砂粒が混入され、95、96、98には微量の繊維が含まれる。94は平緑の口唇上に刻目を付し、縄文による菱形を器に残すらしい。95は口唇上に刺突列点文があり、96、97と共に器に斜縄文を残す。色調暗く暗黄色となる。96は口唇上に縄の圧痕が、97には部分的な刺突がそれぞれ施される。98はゆるやかな僅かな波をもつ口縁部で、その波頂部の内外面に小さな刺突が一個づつつけられる。器には羽状縄文が残るが菱形をとるらしく思われる。

第23図の134~138、140、144、146は共に微量の砂粒を含み、黄褐色ないしは黒褐色系色調をとり、器厚0.6cm前後となるものが多い。やはり縄文施文が主体となる土器である。134は平緑の口唇上に刻目を付し、器に斜縄文を施す。134、135、137、138、140と共に底部より直行して開口し、鉢形の器形を示している。136は頸部から胴部への屈折する部分で縄文がのこり、137は平緑の口唇上に燃糸の圧痕を斜めにつけながら連続させ器には羽状縄文をのこす。138は平緑、140は波状の口縁部破片で共に口唇上に刻目、器には縄文をのこす。144は胎土に繊維を含む平緑の口縁部破片平緑口縁部の口唇上に刻目を連続させ、器には斜縄文を地文として施し、細かな円形刺突文を2~3条口縁に平行して横走させたり、一定の間隔をおいて同様の円形刺突文を横に何段も重ねている。類例を知らない土器で開口に内湾の器形を示している。

b類／ 第22図80、82、第3図147の3例が含まれる。単純な施文をのこす他、無文となる類である。

80は器厚0.6cm黄褐色となり砂粒を含む。僅かな波頂部をもつ口縁の破片であり、波頂部に垂下する隆帯の加飾をもち、くの字形に内湾する口縁屈曲部の外面に縦方向の刻目を横に連続させ巡らしている。82は素直にたちあがる器形を示す。器厚0.5cmの平緑の口縁部破片で黒褐色となり、口唇直下の外壁をやや肥厚させそこに平行する刻目を一条連続させる。147は口縁部を僅かに肥厚させた平緑の無文土器で、壁調整はあまりよくない。器厚0.5cm、黄褐色となり口唇上に部分的な刻目入れている。

c類／ 第22図90、91、92、第23図139が含まれる。90~92は共に器厚が0.6cm、黄褐色となる胴部破片である。90、91は八の字状の燃糸文が一定間隔に平行し、91の場合はそれが斜格子状ないし網目状となる。92は複雑な異条異節斜縄文が施され壁面調整をよくしている。139は前述の土器とは異質のものであるが、構図のとり方に相似のものがあここで扱った。器厚0.8cm茶褐色の平緑口縁部片で底部に向かい直行する鉢形器形を示す。器に平行する沈線が引かれその内部に刺突状の施文をのこすが、施文具が竹管か縄文かは明確ではなく不詳である。

d類／ 第22図93、第23図141~143、145が含まれる。共に器に隆帯を伴う一群の土器をまとめた。いずれも黒褐色となり、胎土に砂粒をもつ。また、底部に向かい直行する器形をとる。しかしそれぞれが一様でないので、個々について特徴などあげ記述する。93は小さな山形突起状をもつ口縁となるらしく、その下部に一条の隆帯上および口唇上に刺突文をのこす。隆帯上は器を急に細めて立ち上がらせる。141は器厚0.7cmの平緑口縁部で口縁平行の隆帯が一条横走り隆帯下に沈

線文を残す。142は胎土に繊維を含む平縁口縁部でこれに平行する隆帯が一条横走し、隆帯上に断続する縄文を転載している。口唇と隆帯間に丸い刺突文が1個あり、器を細めて立ち上がらせ、隆帯下に縄文を施す。143は器厚1cmの波状口縁部で胎土に繊維を含む。波状口縁の頂部より微隆帯一本を垂下させ、口縁に平行して微隆帯を巡らしている。器には縄文の痕跡が僅かにうかがえる。145は器厚1cmの頸部破片で隆帯を一条横走させている。その隆帯上に縄文が僅かに残る。

⑤第5類土器（第22図99）

99の僅か一例である。縄文前期前半の有尾式に対比される。特徴的な施文を残しており、口縁に平行する幾条もの平行沈線内に連続刺突文を施している。

⑥第6類土器（第2図100～111、第3図112～133）

第22図100～111、第3図112～133が含まれ数量的には本類が一番多い。縄文前期前半に所属すると考えられる縄文施文土器を一括した。しかし、胎土に繊維の含有の有無により大別a、bの2分類が可能でありそれにもとづく整理により記述する。

a類／ 第22図100～111が所属する。胎土にいずれも繊維を含む1群の土器である。総じて器厚は0.7cm前後の中厚手となり微量の砂粒を混入し、暗褐色系の色調をとるものが多い。また、11を除きすべて胴部の破片である。このうち整然とした羽状縄文を残すものとして108、109があげられ、100、102、105、106、107は縄文もの施文を右傾左傾して施文面で交差させ変化をもたせている。101、103、104、110は単方向の斜縄文を残す。101、104の密な施文に対し103、110は粗となり原体が細くまとまりがなく崩れた跡を残している。103の内壁は凸凹痕が残り調整はよくない。111は変化のない平縁口縁部で微細な縄文がわずかに残る。

b類／ 第23図112から133が該当する。いずれも繊維の混入はなく微量の砂粒を含み黄褐色ないし黒褐色系の色調をとる。器厚は0.7cm前後を示すものが多い。

112、113、121、126、130～132は単方向の斜縄文を横位に何段も密着して重ねており、114、120、122～125、127～129、133は羽状縄文を残している。このうち113、121は壁面に凸凹があり、施文面に変化をもたせており、124は縄文原体が無節となっている。胴部破片が多い中で126、128は平縁の口部であり、器形に変化のない素直な開口を示し、いずれも器全体に縄文が施されている。

以上、a・b所属土器の中には年代的に同じ前期前半所属の中でも上下さるべき時間差のあるものもあろうが、他に位置づけるべき特徴文もみあたらずにここに処理する。

⑦第7類土器（23図148、149）

第23図148、149の2例である。ともに0.6cmと薄く、微砂粒を含み黒褐色となる胴部破片である。細沈線による山形文の施文を横位にのこすがそれが肋骨状を形成するのかどうかは細片のため不明である。縄文前期後半初頭の諸磯A式期に相当するものであろうか、明確な位置づけが難しい。

⑧第8類土器（23図151）

第23図151の一例である。口縁がくの字に屈折し、張り出した肩部から更に器がくの字に折れて低部に直行する浅鉢形土器の口縁部破片である。口縁部はゆるやかな波状線を示し、屈折部に直系0.8cm円形の穿孔がある。胎土に砂粒を含むも内外の壁面調整や焼成等はよく、茶褐色の明るい無文土器である。

縄文前期後半の諸磯B式土器に対比されるものである。

⑨第9類土器（第22図81、83、第23図152、153）

第22図81、83、第23図152、153の4例である。関西系文化の影響を強く受けたと思われる土器を一括したもので、器厚が0.3～0.4と極めて薄い。施文のあり方を異にするので個々について語ると81は平縁の口縁部破片で変化なく開口し、黒色となり微細な斜縄文が痕跡的に残される。83はゆるやかに僅かに外反する平縁口縁部破片で口唇外側に刻目をつけ、斜格子状沈線文が大まかに引かれる。壁に凹凸あり胎土にき輝雲母が含まれ、黒褐色となるが焼成よく固い。152、153共に胎土に砂粒を含み暗黒色となる。152は平縁口縁部で整った斜縄文が施され、153はまばらな爪形文が施された胴部細片である。

⑩第10類土器（第23図154～156）

第23図154～156の3例が含まれる。縄文中期前半土器を一括した。154は器厚0.6cm外面茶褐色内面胴部片で縄文地文の上に曲直の平行沈線文を引いている。155は器厚0.7cm暗い褐色となる胴部片で平行沈線垂下と千鳥状刺突による梨久保式に特徴的な施文を残す。156は外面茶褐色内面黒色の底部破片である。無文で底径は7cmを測る。

本類は本跡の北東部に密接する第3号住居跡の遺物が何らかの事由により混入されたものであろう。

## 1. 土器の概要

本遺跡から出土した土器類は、縄文早期末の茅山式から前期～中期中葉井戸尻Ⅰ式までの各期のものが含まれている。中部高地西北部および犀川沿いに立地する本遺跡の環境から、縄文各期における土器文化の伝播、物資の交易など南北異文化の影響を、いち早く受けやすい交通経路の中継点に位置している。本遺跡からの経路は次の5コースと考えられる。①塩尻～諏訪湖～八ヶ岳山麓を経て甲府～関東地方。②塩尻から天竜川水系、伊那谷を経て東海地方。③塩尻から木曾川水系を経て関西地方。④八坂村、美麻村～大町、木崎湖から姫川流域を下り、糸魚川を経て北陸地方。⑤犀川から信濃川流域～新潟を経て東北地方という多様な地理的環境の中にあつて、それぞれの土器文化の成立と衰退という悠久の時間の経過の中で、受容・同化・変容・輸出という様相を読み取ることでできる一つの拠点であり、その証左を出土した土器様相から窺い知ることができる。

本遺跡の出土土器は時間(時期)的にみて、およそⅠ～Ⅴ期に類別することができる。これに加えて上記の各経路①～⑤を想定する。第Ⅰ期：①縄文早期末茅山式。第Ⅱ期：②前期初頭中越式。①花積下層式、①前期の古い時期神ノ木式(関山式併行期)。第Ⅲ期：①前期中葉黒浜式(⑥有尾式併行期)、前期後葉諸磯式、③関西北白川下層式。第Ⅳ期：④初期初頭北陸新保式、前葉新崎式(梨久保式併行期)、①貉沢式、新道式。第Ⅴ期：①、④、⑤中期中葉藤内式、焼町式、北陸(中越)岩野原様式(馬高式)、井戸尻式、という総括が全体として可能であると考えられる。

以下、各類別による内容についての分析を試みる。

### ■第Ⅰ期①(写真)

早期末。関東一円を中心に分布し、東海、中部高地、東北地方にも、伝播している関東系早期末の茅山式上層様式の土器群で、尖底部の破片(繊維混入)が大型土坑No.91から出土している。伴出遺物として④逆三角形の垂飾り状石器(別項にて記述)がみられる。

### ■第Ⅱ期①(写真)

前期初頭から前葉。中部高地の一部のみに分布し、南は諏訪湖周辺および天竜川水系(上下伊那地方)、北は塩尻、松本盆地、大町木崎湖周辺と、現時点では中中信地方に限られて出土がみられる中部高地の中中信系中越式土器。第8号住居跡から、薄手の尖底浅鉢ほか土器片が単一時期遺物として出土し、第2号住居跡からも床面に貼りついた状態<sup>3)</sup>で出土している。その他本遺跡からは土器片として、前期初頭の関東西部系、員般桑痕文、羽状縄文土器群、胴部中央部から外反もしくは立ち上がる器形。平底までも施文されているものが多い花積下層式や、中越式系と同一分布をなす前期前葉の古い時期の神ノ木式(無繊維)が、茅山式底部、中越式土器片を伴って、第1・2・12、13号住居跡から出土し、先行する中越式との関連が窺える。

### ■第Ⅲ期①、③(第 四写真)

前期中葉から後葉。関東全域にわたって広範囲に分布し、中部高地にまでもおよんでいる黒浜式(中部高地系有尾式)、先行する関山式の系統をひき繊維を含むものと無繊維のものが共存している。本遺跡でもNo.106土坑墓から逆位の深鉢、および第12・13号住居跡床面に大形片が貼りついた状態で出土している。繊維、無繊維両者とも羽状縄文の施文は荒く粗雑で、器体の内外面は鍛<sup>4)</sup>々に欠けている。天竜川水系の伊那谷を除き全県下、さらに隣接する岐阜、群馬西半部にも分布出土している。その範囲も先行する黒浜式圏を継承し、文様も黒浜式の延長線上にあり沈線、列刺突文、波状文、爪型文、浮線文、縄文等を施した関東

系前期後葉の諸磯A（南大原式）が第1・2・5・12・18・19号住居跡から出土し、諸磯B（上原式）口唇が「く」の字形に内湾、キャリパー形深鉢等が出現する様式土器が、第1・5・19号住居跡から出土している。さらに少量ではあったが関西系北白川下層式の影響をうけたと思われる薄い黒い土器、また諸磯A、Bに特有の赤彩土器、漆塗土器片も第5号住居跡で発見されている。なお3点のみであったが、渦巻状の条線等が施文された諸磯C式（日向Ⅱ式）が第19号住居跡から発見された。④、①12号・13号住居跡からヒスイ製大珠、コハク微片が出土している。

#### ■第Ⅳ期④、①、②（第 図写真）

中期初頭から前葉。能登半島、富山県を中心に北陸一円に分布し、半隆起線文、爪形文、格子文、細線文、および貼付け突起を持つ北陸系の中期初頭新保式第Ⅲ段階様式の小型深鉢が第16号住居跡から出土している。なお、この住居跡からは東南隅部に屋内祭祀石柱施設が遺存していた。またその分布は新保式圏を踏襲し、さらに中部高地の長野県、東北秋田県に波及を広げ、新保式の系譜を曳きながらも縦横に割りつけを行い、B字椀区画内に格子文を多用する北陸系中期前葉の新崎Ⅱ式（梨久保式併行）の深鉢が第11号住居跡から発見されているが、鮮やかな赤褐色を呈する胎土から見ておそらく在地模倣土器の可能性が高い。ハッ岳南麓・西麓、諏訪湖周辺、蓼科山北麓、犀川水系の信州新町などに分布し、隆帯による、連続横帯椀区画文、押し引き、懸垂文、動物形象施文など関東地方の阿玉台式に極めて類似相関する中期前葉猪沢式の土器は、第9号住居跡の急激につままる胴より下部を欠く高さ15cmの極めて浅い埋壺炉として出土した。さらにその分布圏に後続し、猪沢式の椀区画文を僅かに曳きながらも新たに三角形および斜行沈線を採用した新道式（勝坂式の古い段階併行）の土器は第9号住居跡を踏襲し、第3号住居跡の時期決定埋壺炉として出土している。さらに、第4号・第11号住居跡からも復元深鉢として出土した。第3号・第11号住居跡の標識土器である。

#### ■第Ⅴ期①、④（第 図写真）

中期中葉。関東全域に分布する勝坂式併行期で中部高地に深く浸透しているが今のところ千曲川下流域からは出土を見ない土器群で、南信を中心に中南信に分布圏が広がり、先行した猪沢・新道式系譜を踏襲しながらも、抽象文、縦位区画文に移行する古い段階の藤内Ⅰ式など第4号住居跡の主体土器として出土し、さらに隣接する第11号住居跡上部覆土からも出土を見た。また第4号住居跡の上面覆土からは、明らかに北陸から搬入されたと考えられる胎土が灰褐色を呈する半隆帯加飾土器岩野原式（広義の馬高式）と在地系の焼町式深鉢が、横倒しの状態で並んで発見された。遺構外出土として丸みのある底部から屈折底が多くなり、横帯区画文に変化し、抽象文が消え、蛇体文、一对の耳飾り状把手、顔面把手が裝飾される藤内Ⅱ式の土器片も多量に見つかっている。さらに藤内式分布圏に後続して、横帯区画文が胴部中央部に移行、いわゆる帯文と変化し、耳飾り状把手も衰退していく井戸尻Ⅰ式土器も壑穴状祭祀遺構から出土している。

信濃川流域中越地方を中心に東北、北陸、中部高地と広く分布する、中期中葉岩野原式。前述した器全体を粘土紐の隆帯で、余す処なく裝飾が施された（広義の火焰型・王冠型土器）器形不明（焼町式第Ⅱ段階並行）が、石柱・石棒合祭祀施設を備えた壑穴状祭祀遺構から祭祀用具として、半人半獣の奇怪な文様の浅鉢、井戸尻Ⅰ式（勝坂Ⅳ）が共に供獻の状況を示唆する状態で出土している。

縄文期においてももっとも豪華絢爛たる信濃川流域、狭義の馬高式（火焰型・王冠型土器）に先行するないし並行する岩野原式と井戸尻Ⅰ式の融合を最後に、前期から長期にわたり一貫して集落を継承し、変遷と搬入・搬出を繰り返してきた東部八幡原縄文土器文化も一つの時代の終焉を迎える。これらの起因とも考えら

れるこの頃から始まる気候の寒冷化と火焔への願望と依存、植生の変化による食べ物への欠乏、および交通路の移動など諸々の要因などから拠点としての意義を失った東部八幡原遺跡から、新たなる土地への移住を余儀なくされたものと考えられる。

破壊された形跡が認められない祭祀遺構など、祖霊を遺して、いくたびかの、南北からもたらされる異質な縄文土器、さらには土器のもつ属性にも同化、対処しえた東部八幡原縄文人も、早期末から中期中葉までの既存土器と共に、新たに打ち寄せる中期後葉のニュー・ウェーブにあえなく包含されていった。

以上、東部八幡原遺跡出土の縄文土器を、多少角度を変えた視点から概観し、考察した。出土した本遺跡の土器は、北陸産の搬入土器および北陸系土器様式の影響が色濃く残され、遠距離交易ルートの要衝として、日本海縄文人との接触交流を示唆していた。

この項の執筆にあたり、資料等のご協力を頂いた新谷和孝氏をはじめ、ご指導を賜った多くの方々に深く感謝いたします。

## 2. 出土石器の概要

東部八幡原遺跡から発見された石器は、遺跡の性格上その主体は縄文前期後葉諸磯A、B期に属するものであつたが、他に早期未茅山式期から中期中葉期までの、遺跡全域にわたって多種多様の石器が出土している。

特に前期後葉の石匙・石錐などは、住居跡から多量の出土があり、共伴して滑石・鯨石製装身具(狹状耳飾り・半欠け転用の垂飾り、勾玉様未製品、異形玉、管玉・円柱状玉)などが発見された。このことは隣接する周辺の前期遺跡・有明神社および後述する数遺跡と共通する遺物出土パターンであつた。

藤沢宗平氏は東部八幡原遺跡等で発見される装身具の石材は、その原産地を白馬岳、および駆川流域にもとめ、その伝播交易ロードを土尻川、金熊川沿いと推測した。北城村・舟山遺跡→美麻村・女犬原遺跡→八坂村・土林遺跡周辺→生坂村・東部八幡原遺跡→信州新町・お供平遺跡と南北に分岐し、南は東山麓を経由して交易伝播の拠点要地塩尻に至る。はからずも今回の発掘調査によって、本遺跡出土石器および出土石器が、舟山、女犬原、お供平の各遺跡出土の土器・石器とほぼ一致することから点と線がつながり藤沢宗平氏の推測の間違いないことを検証し、犀川水系北西地域の中継拠点集落としての東部八幡原遺跡の性格が明確となった。

出土した狹状耳飾りは対か、単独か？については東部八幡原遺跡では、住居跡および数基の土坑出土共に単独の出土であつた。藤田富士夫氏によれば狹状耳飾りについて着装は両耳に垂下を基本としているが、対で出土した遺構は非常に稀で、次の6遺跡に過ぎないとしている。大阪府藤井寺市・国府遺跡、神奈川県海老名市・上浜田遺跡、山形県長井市・長者屋敷遺跡、栃木県宇都宮市・根古台遺跡、新潟県塩沢町・吉峰遺跡、神奈川県川崎市・金程向原第2地点遺跡などである。時期は縄文早期中葉から中期初頭にかけてであり、数個の特殊例を除いてはその大半は単独出土で、しかも出土例はその土坑の数に比して狹状耳飾りを内蔵する土坑は極端に少ない。藤田氏は更に比較的大型の土坑(墓)は成人女性、小型で1点のみのものは小児の墓と考え、狹状耳飾りは女性専用の着装と想定し、その証左として玉類等垂れ飾りとの共伴は現在のところ出土例がないとしている。

本遺跡においても黒浜期と思える土坑墓No.106での精査で、逆位の深鉢を発見したが、狹状耳飾りの出土を見なかった。なお、数の少ない出土例として、川崎保氏も本遺跡と関連、隣接するお供平遺跡での調査で、狹状耳飾りを内蔵していた土坑は、114基中1基だけであつたと引用している。中期前半以降石器から土製耳飾りへと移行した要因と社会背景については、不明であるけれども、別項で引用した松本市・エリ穴遺跡出土の膨大な数の土製耳飾りの整理と研究によって、謎の、解明の糸口となるべき示唆と回答が得られるのではないかと期待される。

本遺跡の立地条件から、犀川にて多種の石材を採集出来るにもかかわらず、出土した丸石(磨石)はそのほとんどが、花崗岩質の川原石であつた。特記現象としては凹石の出土を見なかつたことである。ただし、前期住居跡から凹石？と考えられる刺突痕・研磨痕がある楕円形砂岩が1個、見つかつてはいる。石棒は2本、石柱2本が発見された。中期初頭期の第16号住居跡からは東南側壁際に埋込み土坑を持った粗雑な砂岩製の石柱(長さ51.5cm、厚さ9×6cm)が基部をピット内に残し、上部は3片に割れ、横倒しの状態で発見されている。(写真) 中部高地での定説となっている屋外から屋内へとり込まれる時期、中期中葉期を再考せざるを得ない屋内石柱の出土で、遺構と相關する確実なる時期決定の好資料であつた。今後さらに松本盆地周辺に類似資料の出土が待たれるものである。

中期中葉井戸尻Ⅰ期、竪穴状祭祀遺構からは石壇上に石柱（砂岩製）、石棒（花崗岩製）が並立し、いわゆる供獻土器に使用されたと考えられる信濃川中流土器（岩野原式・広義の馬高式）が在地系の井戸尻Ⅰ式土器を両側に相伴して出土し、またその近くには硬砂岩製の石棒が横たわって発見されている。なお祭祀配石施設の構築石材には割れた石皿が使われていた。第1・2号住居跡からは玉（筋）砥石（粗い砂岩）（写真）が発見され、袂状耳飾りなどの製作ないしは硬玉研磨文化圏内であったことを明確にした。また前後期後葉期第18号、19号住居跡からは石鐮の出土を見ることは出来なかったが、未製品・欠損品を含めて数多くの石匙と石錘が発見された。しかし床面に貼りついていた黒曜石のチップに比して、遺存した黒曜石製石匙の比率は他の石材より低く、このことは第18・19号住居跡の性格と石質への価値観相違を示唆しているものと考えたい。磨製石斧の右材は泥岩等多種にわたって出土しているが、北陸その他原産地より搬入された蛇文岩製磨製石斧の完成品は発見されていない。また、石錘など漁撈具の出土も見なかった。温暖な時期と大河犀川では、漁撈は適さなかったと推考される。

石製三角形垂飾り、ヒスイ製大珠、コハク片については別項に記載し、他の石器の詳細については、石器一覧表にまとめて記載した。

以上今回の調査で出土した東部八幡原遺跡における石器の在り方についての概略であるが、第18・19号住居跡出土の石器の未整理など、不備な点の多いことは否めない。および本遺跡全域にわたって発見された多数の石匙、膨大な数の花崗岩製の丸石、中期中葉第4号住居跡から吊り下げ貫通孔を頭部に持つ滑石製の勾玉が出土した事象など、東部八幡原遺跡における石器の在り方に、さらなる検証を試みたく進行中なので、続報として後日改めて報告したい。

(第2表)

## 出土石器一覧表

(未成品・欠損品の計測は各残存部位の値)

## 第3号住居跡

番号	図版番号	器種	残存状態	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備 考
1		不明	刃部の一部	3.3	2.5	0.8	5.8	頁岩	斜型石匙の一部か

## 第4号住居跡

1	39-1	石鏃	脚部的一端欠	2.4	1.7	0.3	0.9	黒曜石	鏃型鏃
2	39-2	"	一端欠	2.9	1.7	0.4	1.4	"	長脚鏃に近似
3	39-3	"	完存	1.6	1.6	0.3	0.5	"	"
4	39-4	"	半身欠	2.3	1.2	0.4	0.8	"	平基
5	39-5	"	一端欠	3.2	2.9	0.4	2.2	"	長身の鏃形鏃、刃部鋸歯状
6	39-6	"	完存	1.8	1.5	0.3	0.7	"	"
7		"	欠損	2.3	0.7	0.2	0.4	"	一側縁のみ残存
8		"	完存	1.6	1.2	0.2	0.5	"	凹基、剥片鏃
9	39-8	"	"	1.8	1.4	0.2	0.5	"	扱りの深い剥片鏃
10	39-9	"	一端欠	2.1	1.4	0.4	1.0	"	鏃形鏃
11	39-11	"	完存	1.9	1.4	0.2	0.6	"	"
12		"	先端欠	1.3	1.6	0.4		"	平基
13	39-12	"	両端欠	2.5	2.0	0.3	1.9	チャート	円脚鏃
14		"	完存	1.8	1.4	0.4	0.8	"	凹基
15	39-14	"	両端欠	2.4	1.8	0.3	1.7	"	平基
16	39-15	"	完存	2.0	1.4	0.3	0.9	"	鏃形鏃
17	39-16	"	未成品	2.9	2.2	0.4	2.9	"	平基
18	39-17	"	両端欠	1.7	1.4	0.3	0.8	"	鏃形鏃
19	39-18	"	未製品	2.9	2.1	0.6	4.3	"	円脚鏃
20		"	基部欠	2.3	1.3	0.5	1.6	"	平基
21	39-19	"	未成品	2.9	1.8	0.5	3.3	"	"
22		"	完存	2.6	1.7	0.3	1.1	"	鏃形鏃
23	39-21	"	未成品	3.4	2.2	0.5	3.1	頁岩	凹基、大形、一端欠
24	39-22	"	"	2.0	1.6	0.4	1.2	"	側縁鋸歯状
25	39-23	"	先端・基部欠	2.0	1.9	0.5	1.4	"	
26	39-13	"	一端欠	3.4	1.6	0.4	1.2	"	細身・長身、両側鋸歯状
27	40-1	石匙	先端刃部欠	5.5	3.2	1.2	11.1	"	縦形で大形
28	10-2	"	完存	3.1	3.2	0.4	4.6	"	横形・刃部外湾
29	40-3	"	"	2.6	4.8	1.0	8.1	"	大きなつまみ
30		"	"	3.6	3.2	0.5	5.4	チャート	斜形、セビアの色調
31		"	未成品	3.9	3.5	0.5	8.1	"	"
32		"	完存	3.1	3.8	0.5	7.1	頁岩	"
33		石錐	先端欠	3.1	1.9	0.6	3.4	"	
34	41-21	"	完存	4.5	0.8	0.4	2.0	"	柳葉状
35		装身具	欠損品	2.6	1.2	0.4	2.0	滑石	垂れ飾り、先端欠
36		"	"	3.5	1.8	0.7		"	珠状耳飾りの半欠
37	43-1	打斧		10.3	3.3	1.5		砂岩	刃部欠損

### 第5号住居跡

1	39-24	石礎	片脚欠	2.5	1.4	0.4	0.8	黒耀石	長脚礎に近似
2		"	両脚端欠	2.2	1.4	0.3	0.7	"	"
3		"	完存	1.8	1.3	0.3	0.4	"	"
4		"	"	1.9	1.7	0.4	1.0	"	平基
5		"	"	2.3	1.7	0.5	1.5	"	"
6	39-25	"	"	2.1	1.9	0.7			"
7		"	ほぼ完存	1.6	1.3	0.3	0.5	"	円脚礎に近似
8	39-26	"	完存	2.6	1.7	0.5	1.6	"	円基
9	39-27	"	ほぼ完存	2.0	1.7	0.5	1.3	"	凹基
10	39-28	"	完存	1.9	1.7	0.4	1.0	"	平基
11	39-29	"	"	1.8	1.9	0.4	1.3	チャート	凹基
12	39-30	"	"	1.8	1.7	0.3	0.7	"	長脚礎に近似
13		"	"	1.7	1.5	0.3	0.5	頁岩	"
14		"	両端欠	2.2	1.5	0.3	0.8	"	凹基
15	39-32	"	先・側端欠	2.0	2.0	0.5	1.0	"	長脚礎に近似
16		"	未成品	3.0	1.9	0.5	3.0	"	円基
17		"	先端欠	1.7	1.4	0.3	0.6	"	凹基
18		"	側縁部欠	3.1	1.5	0.5	2.0	"	"
19	39-34	"	一端欠	2.2	1.9	0.3	0.9	"	円脚礎
20		"	未成品	2.6	1.4	0.6	2.1	"	基部欠
21	39-36	"	両端欠	1.9	1.6	0.3	0.6		長脚礎に近似
22		"	未成品	1.6	2.3	0.5	1.2	黒耀石	不明確
23		"	半欠品	1.0	1.6	0.3	0.4	"	"
24		"	"	2.1	2.9	0.3	0.8	"	異形石礎
25		石匙	先端・刃部欠	5.9	1.9	0.8	11.1	頁岩	縦型
26		"	一側縁欠	4.5	1.8	0.6	5.1	"	"
27		"	完存	2.4	4.2	0.6	4.2	黒耀石	横型
28		"	両端欠	3.0	3.9	0.9	9.6	頁岩	"
29		"	一部のみ	2.6	1.9	0.7	2.9	"	つまみ部分
30		"	両端縁欠	3.8	3.6	0.8	11.0	"	"
31		"	片側縁欠	3.7	3.0	0.9	9.7	"	"
32		"	完存	2.5	3.9	0.5	3.8	"	"
33	40-7	"	一側面欠	3.0	3.2	0.6	4.2	"	横型
34	40-8	"	完存	3.2	4.6	0.8	9.7	"	"
35	40-9	"	未成品	3.5	5.9	0.8	12.4	"	" 大きなつまみ
36		"	一側面欠	3.9	4.0	1.0		"	"
37	40-10	"	ほぼ完存	3.2	4.8	0.9	11.1	"	"
38	40-11	"	完存	3.5	4.7	0.7	10.0	"	"
39	40-12	"	"	3.1	3.3	0.7	6.4	"	"
40	40-13	"	"	2.9	4.3	0.5	5.9	"	"
41		"	ほぼ完存	1.8	2.5	0.6	1.7	黒耀石	斜型

42	41-14	石匙	一側面欠	3.9	4.4	1.0	10.0	チャート	斜型
43		"	ほぼ完存	4.1	3.2	0.5	6.0	"	"
44	41-16	"	未成品	3.3	4.8	0.8	10.7	頁岩	"
45	41-17	"	"	3.9	4.0	1.0	14.3	"	"
46	41-18	"	完存	2.8	4.5	1.0	14.5	"	"
47	41-19	"	"	3.7	4.8	0.7	15.3	"	"
48	41-20	"	"	2.2	2.5	0.4	2.5	石英	両側端わずかに欠
49	41-22	石錐	刃部先端欠	3.8	2.1	0.9	5.3	チャート	
50		"	"	2.6	1.6	0.5	2.1	"	
51	41-24	"	"	2.2	0.9	0.6	0.9	"	
52		"	基部上方欠	3.5	1.9	0.8	4.4	"	
53		スクレーパー	ほぼ完存	2.1	3.0	0.9		"	石匙
54		"	底辺刃部	5.5	5.1	0.7		頁岩	三角形状
55		"	"	7.9	7.2	1.9	118.6	"	円三角形状
56		"	未成品	4.4	5.8	1.2		"	
57		"	未成品	5.3	9.7	0.8		"	
58		ピクリキ-1	ほぼ完存	3.5	2.1	0.8		チャート	
59		"	"	2.0	1.9	0.8	3.4	"	
60		装身具	未成品	2.7	1.2	0.7	3.6	滑石	垂れ飾り、穿孔なし
61		"	欠損			3.7		"	袂状耳飾り
62		"	"	1.5	1.0	1.1		"	"
63	44-12	磨製石斧	先端・基部欠	5.9	4.0	1.1		蛇文岩	
64	44-4	"	"	7.3	4.9	1.3		"	
65		"	先端部残	8.6	5.9	2.6		粘板岩	自然面多い
66	44-3	打製石斧	基部欠	10.3	2.5	1.2		珪岩	
67	44-9	"	完存	8.1	5.8	1.0		"	外湾
68	44-2	"	"	7.9	4.9	0.9		砂岩	
69	44-5	"	"	10.0	4.7	1.7		"	
70		"	基部欠	7.3	4.9	1.3		珪岩	
71		"	先端部残	7.9	6.7	1.3		"	
72	44-10	"	完存	11.8	4.7	1.6		"	内湾
73		"	基部残	4.4	4.9	1.0		"	
74		"	完存	6.1	3.4	1.0		"	
75	44-7	"	"	9.8	4.6	1.1		粘板岩	
76		"	"	10.8	6.4	3.0		"	
77	44-6	"	"	10.4	4.3	1.6		砂岩	
78	44-11	打斧		9.7	5.3	0.8		頁岩	

#### 第6号住居跡

1		石鏃	未成品	1.8	1.9	1.5	1.4	チャート	凹基
---	--	----	-----	-----	-----	-----	-----	------	----

### 第7号住居跡

1	石鏃	未成品	2.5	1.7	0.6	2.6	黒耀石	平基・片面研磨
2	"	"	1.8	2.1	0.6	1.5	チャート	"
3	"	一端欠	3.2	1.6	0.4	1.5	頁岩	細身・長身・平基
4	"	"	2.2	1.4	0.5	0.8	"	凹基
5	石匙	上部・つまみ部欠	3.4	1.8	0.6	4.4	"	縦型

### 第8号住居跡

1	石鏃	完存	1.7	1.4	0.3	0.5	チャート	凹基
2	"	"	2.3	1.6	0.5	1.4	頁岩	"
3	石匙	未成品	4.2	2.6	0.6	8.6	"	縦型・先端刃部欠
4	石鏃	完存	3.2	0.7	0.5	1.3	チャート	柳葉形

### 第11号住居跡

1	石鏃	両脚端欠	2.3	1.3	0.3		黒耀石	長脚鏃に近似
2	"	完存	1.4	0.9	0.3		"	円脚鏃
3	"	両端一部欠	2.4	1.8	0.5		"	剥離面残
4	"	完存	1.7	1.6	0.4		"	円脚鏃
5	石匙	未成品	3.8	5.6	0.4		頁岩	横形

### 第14号住居跡

1	石鏃	完存	1.3	1.5	0.2	0.2	頁岩	長脚鏃に近似
---	----	----	-----	-----	-----	-----	----	--------

### 第15号住居跡

1	石匙	下部欠	2.8	1.9	0.6	3.5	頁岩	縦型
2	"	完存	2.0	2.8	0.4	1.4	黒耀石	横形、小形

### 第16号住居跡

1	石鏃	未成品	2.0	1.9	0.5	1.6	黒耀石	円基
2	石匙	完存	7.0	4.0	1.4	34.7	頁岩	縦型
3	"	未成品	3.9	2.0	0.5	3.6	"	縦型・刃部下方欠く
4	"	完存	3.1	4.7	0.5	11.1	"	横型、刃部外湾
5	石鏃	先端欠	2.3	1.0	0.6	1.1	黒耀石	
6	石刃	"	5.4	1.5	0.6	5.9	"	

### 第17号住居跡

1	石槍	先端のみ残	5.0	2.7	0.8	13.9	安山岩	基部不明
---	----	-------	-----	-----	-----	------	-----	------

### 第18号住居跡

1	石匙	欠損品	3.4	3.8	0.5	5.9	チャート	縦型、下方欠く
2	"	完存	5.7	2.6	0.7	13.1	頁岩	横型
3	"	"	3.3	4.7	0.6	8.1	"	
4	"	"	3.1	4.9	0.5	9.4	"	"
5	"	"	2.9	5.3	0.5	7.9	"	"
6	"	"	2.7	4.6	0.6	5.6	"	"
7	"	未成品	5.0	4.9	0.5	23.7	"	"
8	"	"	5.1	5.4	0.4	9.8	"	"
9	"	完存	4.8	6.6	0.9	21.0	"	斜型、片面剥離
10	"	"	4.9	7.7	0.7	18.9	"	

11		石匙	完存	2.7	3.3	0.4	4.0	チャート	
12		石錐	下部欠損	2.6	2.1	0.4	1.3	黒曜石	
13		"	"	3.0	1.4	0.4	2.0	"	
14		"	一側方欠	3.9	1.6	0.5	3.9	"	
15		スクレーパー	完存	3.2	7.0	0.7	25.3	チャート	中央辺内湾
16		びんがしゅー	"	3.4	3.0	0.5	7.0	"	
17		玉	未成品	3.8	3.1	1.0	13.4	滑石	原石の一部研磨
18		磨製石斧	"	6.7	3.0	1.1		蛇文岩	
19		"	欠損品	3.7	3.8	2.1		"	

### 第19号住居跡

1		石匙	完存	5.5	2.6	0.7	8.7	チャート	縦型
2		"	未成品	3.6	2.4	0.9	5.7	"	"
3		"	下部欠	4.8	2.7	0.5	9.7	頁岩	"
4		"	"	4.8	2.6	0.4	5.6	"	"
5		"	"	6.2	3.2	0.7	14.4	砂岩	"
6		"	完存	3.0	4.0	0.6	5.9	チャート	"
7		"	"	3.1	4.7	0.8	9.3	"	"
8		"	"	3.2	3.2	0.6	5.6	"	"
9		"	未成品	3.1	3.6	1.0	10.6	"	挟りあり
10		"	つまみのみ残存	1.4	1.8	0.4	1.1	"	"
11		"	完存	3.5	3.2	0.5	5.4	頁岩	"
12		"	"	4.7	5.1	0.9	15.6	チャート	斜型
13		"	完存	2.3	6.9	0.5	7.2	頁岩	"
14		"	"	4.1	8.9	1.1	37.4	"	"
15		"	一側縁欠	4.4	5.2	0.7	15.5	"	"
16		"	未成品	4.2	7.0	1.1	31.5	"	"
17		"	完存	3.7	4.7	0.4	5.3	"	"
18		石錐	ほぼ完存	4.8	1.1	0.4	1.8	チャート	先端をわずかに欠く
19		"	上部欠く	4.1	0.7	0.4	1.3	"	外湾
20		"	完存	6.0	2.7	0.9	9.0	頁岩	
21		"	ほぼ完存	4.6	3.1	0.5	7.3	"	先端をわずかに欠く
22		"	"	2.3	1.6	0.4	1.2	"	"
23		"	"	4.9	4.0	0.6	16.1	"	"
24		"	完存	4.4	1.0	0.4	1.2	"	
25		スクレーパー	欠損品	5.3	7.9	1.3		"	
26		"	"	4.6	7.6	1.0		"	
27		磨製石斧	"	4.1	5.5	2.0		"	先端部分のみ残存
28		"	"	5.1	3.8	1.2		"	基部のみ残存
29		打製石斧	"	7.6	5.7	1.5		"	基部を欠く
30		"	"	7.0	4.4	1.2		砂岩	"
31		"	"	5.6	4.6	1.8		"	先端部分を欠く
32		"	"	7.1	4.1	1.3		"	"
33		"	"	9.9	6.4	2.3		"	基部を欠く

## 土 坑

番号	図版番号	出土地点	器 種	残存状態	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	備 考
1		土坑 13	石鏃	完存	1.8	1.5	0.3	0.5	黒耀石	凹基
2		" 3	"	"	1.9	1.2	0.5	0.6	"	円脚様
3		" 1		片脚欠	3.9	1.6	0.4	1.2	"	長脚様
4		" 1		"	2.8	1.3	0.4	1.0		細集長身
5		" 1		"	2.3	1.4	0.3	0.6		鉾形鏃
6		" 8		両脚欠	2.0	1.2	0.3	0.5		凹基
7		" 4		完	2.5	1.7	0.5	2.0		円脚様
8				"	2.1	1.6	0.2	0.7		長脚様、深いえずり
9		土坑 1		"	1.4	1.3	0.3	0.3		鉾型 (小形)
10				"	1.3	1.2	0.2	0.3		小形
11		土坑 1		"	1.7	1.0	0.4	0.4		凹基
12		" 5		"	1.5	1.3	0.3	0.3		深い抉り
13		" 5		"	1.7	1.2	0.4	0.4		凹基
14		" 54		半身欠	3.9	1.4	0.6	2.9		長身大形の剥片鏃
15		" 54		片脚欠	1.6	1.2	0.3	0.5		薄い剥片鏃
16				完	1.7	1.4	0.3	0.4		鉾形鏃
17			石鏃	基部欠	1.8	1.3	0.3	0.5	黒耀石	凹基
18		土坑 1	"	半身欠	2.3	1.1	0.4	0.8	"	凹基
19		" 8	"	先端・基部欠	1.8	1.1	0.3	0.4	"	不明
20		C2	"	基部欠	2.2	1.6	0.5	1.1	"	"
21			"	ほぼ完存	2.4	1.6	0.5	1.8	"	"
22		E-3	"	完存	2.1	2.0	0.4	1.0	チャート	鉾形鏃
23		土坑 5	"	"	1.5	1.2	0.3	0.4	"	円脚鏃
24		E-3	"	"	2.8	1.8	0.3	1.3	"	"
25			"	ほぼ完存	3.0	1.5	0.5	2.5	"	平基
26		A5	"	完存	2.1	1.3	0.5	0.9	"	"
27		B4・5	"	"	2.7	2.0	0.6	2.5	"	"
28		土坑 8	"	"	2.1	1.5	0.4	0.8	"	鉾形鏃
29			"	一端欠	3.1	1.6	0.4	1.9	"	凹基
30			"	完存	1.5	1.4	0.4	0.7	"	三角鏃
31			"	両端欠	2.1	1.4	0.5	1.1	頁岩	凹基
32			"	未成品	3.4	1.8	0.8	3.9	"	五角形
33			"	一端欠	3.5	1.5	0.5	1.8	"	凹基・細身・長身
34		土坑 67	"	完存	3.4	2.5	0.6	1.0	"	平基、大形
35			"	"	1.3	1.2	0.2	0.3	黒耀石	円脚鏃
36		土坑 8	"	上部欠	2.7	1.3	0.5	1.9	チャート	縦型 つまみを欠く
37		A5	石匙	半分欠	6.6	3.3	1.2	22.8	"	"
38			"	上部欠	2.2	2.8	0.8	4.7	黒耀石	横型
39		F3	"	完存	2.9	4.4	0.6	7.2	チャート	横型刃部に2つの深い抉り
40		土坑 59	"	"	1.8	2.3	0.5	1.6	"	横型・小形





## 第5章 資料

### 1. 竪穴状祭祀遺構（石棒、石柱の共伴出土）について

グリソトG4～G5、H4～H5で検出された配石祭祀遺構と考えられる施設は、一部北側農道下にかかり未調査の部分もあったが、調査の結果、5.2m×3.7mの不整長方形を呈していた。ただし、主体部についてはほぼ全容を把握することができ、大がかりな竪穴状祭祀遺構と推定した。遺構下面是北側が比高15cmで一段と高く、拳大から人頭大の礎を120cm幅に配石、敷石状に敷詰め、緩やかな勾配をもって南へ下る長さ260cmの配石遺構であった。その中には祭祀遺構の構築によく使用される半壊した石皿も発見されている。なお、この配石敷石状施設の両側区画外には、礎の散乱、また抜き取られたような痕跡もなく、明らかに意図的に構築されたものと考えられた。さらに、南105cmを隔てて、正面と考えられる場所に遺存して発見された高さ25cmの土盛りの上に石壇状の構築物を検出し、ともに45度に倒れかけていた壇上の石柱と石棒が発見された。さらに石壇の前には厚さ10cm、地面より高さ34cm、幅60cmと、厚さ6cm、高さ16cm、幅48cmの二枚の平石が、幅38cmの距離を隔て、横平行に地中10cmの深さで埋め込まれていた。おそらく祭壇の区画と土留石の配石ではないかと考えられた。

出土した石棒は厚川採集の花崗岩製で、長さ41cm、最大径11cmを計測した。石柱、石棒の併立は極めて珍しく、石柱祭祀、石棒祭祀研究に一石を投ずるものと考えられ、貴重な資料の発見であった。石柱、石棒の機能と用途および属性に相違が有るのか、無いのか。まず石棒について検証すると、小林達夫氏は「石棒は用途正体がかめない、しかし縄文人にとっては必要なもの、第二の道具として捉え、前期には東北地方に掌に収まる程度の小品が知られており、呪術、儀礼が開始され、既に男根をイメージした亀頭部などが作られていた。」と『縄文人の文化力』で述べている。一方、中部高地において認識されている石棒のイメージは、どのようであったか、山本邦久氏の『石棒』の説によると次のとおりである。「遺構との関係において、確実に時期がおさえられるのは、中期中葉（勝坂式併行期）からであり、事例として、山梨県上石田1号住、長野県北方1-8号住、東京都清水台F5号住など、炉址からの出土が注意されるとし、なお、長野県藤内7号住を引用し、屋内南西隅に樹立状態で有頭石棒が出土した。」氏はさらに、「屋内石棒祭祀の事例は中部山地域を中心としているのが注意される。一方、屋外の在り方は、確実な事例に乏しく、不明な点が多い。ただ、この期の石棒は、屋外に単独樹立されていたとする考え方が藤森栄一らによってなされており、次の中期後半期の屋内出土例の多さと対照的にとらえ、この期を境として、屋外から屋内へ石棒がとりこまれたとする考えも指摘されているが、単独出土や樹立例は時期の確定が難しいので、そうした理解が正しいものかは、今のところ何ともいえない。ただ、中期中葉期、中部山地帯にまず住居跡内出土例が知られるということからみて、屋外→屋内へという見とおしの中で、今後確実な時期の把握ができる事例の増加を期待しておきたい。」このように氏は石棒祭祀の変遷を5期に分け、中部高地の石棒祭祀文化は、1期（中期中葉期）勝坂式併行期に屋外から屋内に持ち込まれるようになり、奥壁際や炉端に立てられるようになる、と述べている。本遺跡で出土した第16号住居跡にその類例を見ることができるが、ただし、石棒ではなく石柱であり、北陸系新保第Ⅲ様式中期初頭土器を共伴しており、中期初頭期に比定した住居跡であった。中部高地特に松本平周辺地域においては中期初頭期には奥壁際に砂岩製の石柱が立てられる風習があったと考えるのは早計であろうか。中部高地の石棒も時代の推移とともに即物的になり、中期後葉から後期には矮小化もす

るが、大方は再び屋外の精巧（亀頭部を持つ）な大型石棒となり豊饒、出産など集落の陽の対象として多様な変遷をとげていく。

石棒祭祀について、平林彰氏の解説を引用する。「竪穴住居の炉や奥壁部の石壇や屋外配石遺構など立てられるか、小型化して儀器としてもちいられた加工痕をもつ棒状の石をめぐっておこなわれた祭祀。石棒は多くの場合、亀頭部を表現した男性器そのものを表現していることから、男性神の依代としての意味が付加されているという。」そこで氏は「石棒祭祀は男性の通過儀礼。狩猟、漁労はもとよりむしろ植物採集活動が活発化する中期段階以降、住居単位にて行われ、後期以降は屋外での共面祭祀となる一方で、石刀、石剣のように携帯出来る程度に小型化し、祭祀を執行する特定個人の儀礼的な宝器に転じるものもある。」として縄文階級制度の中での石棒のあり方を論じている。

一方、ふたたび山本禪久氏の2期、中期後半期（加曾利E式併行期）の文中から引用する。「長野県月見松3号住のように奥壁部につくられた石壇状施設内から小形の完形石棒が出土した例がある。ただ、この奥壁部石壇施設は石柱（立石）を伴う例が多く、石棒との結びつきはあまり強くない。」と石柱、石棒の関連について論及している。

また、報告書『井戸尻』から引用すると、住居址内の立石の項に「尖石博物館の調査の際に検出された与助尾根7号住居址および15号住居址の石壇状石組の中の立石と、曾利6号炉址F6と柱穴P2・P3の三角形の間位置で発見された烏帽子状の立石とかなり近似したものと思われた。また、尖石26号住居址にも立石を囲んだ円形配石遺構があった。いずれも立石が角柱状であったところに特色があった。3例とも曾利Ⅱ式に属するものでとくに7号の石壇からはそれをとり巻くように深鉢2、大甕1、大浅鉢1、両耳付壺1、大黒耀石片1個が出土し、信仰的遺構として把握している。」類似する本祭祀遺構の、砂岩製石柱は長さ40cm、厚さ15×11cmの方形で、一貫して屋内では家族、屋外では部落の祖霊崇拝の対象として伝承され、墓標など陰と、願望の陽の二面を併せ持ち、属性として祖霊の依代として呪術を昂揚する第二の道具の用途を具備していた。

石柱祭祀とは、平林彰氏の解説を引用する。「土坑墓や竪穴住居奥壁部に設けられた石壇、屋外の配石遺構などに立てられた柱状の石をめぐっておこなわれる祭祀。水野正好によると、墓に立てられた石柱は墓標としての役割以上に、祖霊の依代としての意味が付加されているという。同様に住居内の石壇に設けられた石柱は、家族という近親者間で共通する祖霊の依代であり、環状集落の中央広場などに設けられた配石遺構のそれは集落の全構成員にかかわるものであるという。つまり石柱祭祀とは依って立つところの祖霊を崇拝する祭りのことをさす。前期段階に集落の全構成員にかかわる集団の石柱祭祀が始まる。やがて中期には家族単位の祭りに移行し、後期以降は個人ごとの祭りに変化している。」その上さらに、「しかし実際にはこのような単純な変化を示さず、集団ごとに各階層の祭りが錯綜しておこなわれていた段階もあろう。」とはからずも今回発見された石柱、石棒の併立出土の様相を示唆している。

さらに、石壇から右（西側135cm）に離れて南向きに横たわって発見された頭部研磨の長さ63cm、幅20cmの硬砂岩製石棒と、石壇内の石棒、石柱との関連については、今後の課題として残されている。指向する礼拝の方向は東西の峰ではなく、太陽の輝く南の谷谷を指していた。

石壇の前面面輪にはほぼ原形を保つ縄文中期中葉土器が与助尾根7号に類似して、供献された状態で発見されている。右側（西）石柱際にはやや退化した人体文・蛇体文が融合した、半人半獣の奇怪なモチーフを

区画する隆帯懸垂土器、浅鉢、井戸尻Ⅰ式（第36図の4）と、左側（東）石棒際の信濃川中流域から北陸を經由し姫川を遡上してきた、あるいは信濃川、犀川遡上の半隆帯文加飾土器（上部のみの遺存のため器形不明）、北陸系中期中葉岩野原式（広義の馬高式・火焰型土器、王冠型土器）（第36図の3）が祭祀供献用具として自然の堆積土丘に押しつぶされた状態で発見された。さらにその周辺近く中期中葉大深鉢の口縁部大形片が2点（第36図の1、2）発見されているが、全体の器形および文様の把握は出来なかつたが、井戸尻Ⅰ式と考えられ、この遺構は、井戸尻期に機能していたものと推定した。

該期に位置し、祭祀および文化交流、交易、拠点的な性格を持つ中期中葉末、東部八幡原縄文人の最後の所産といえる。石柱、石棒二神合祀の竪穴状祭祀遺構であった。検出された遺構は、掘り下げおよび精査不十分のため、底面の状態やピットの有無については不明であり、さらに平面プランも不確実で、発掘時あるいは部落共同の独立した大祭祀場として、季節的あるいは有事の時のみ祭祀を行ったとの考察も検証不可能で、現時点においては竪穴状としか表現できない。ただ、入口→配石祭祀施設→奥壁と意図的な南北の主軸線は明確に推定可能で、石壇を含め後出する北陸形の複式炉、数石住居跡の様式変遷など、多様なメルクマールを秘め、かつ示唆していたと考えられるだけに、北側道路下、および全体的な詰め未調査が悔やまれるところである。

## 2. 第16号住居跡出土（第35図、写真）の小型深鉢について

### (1) はじめに

本資料は、平成63年に調査された東筑摩郡生坂村東部八幡原遺跡の第16号住居跡の床面より単独で出土したものである。全体の約1/3が残存し、推定口径13cm、底径7cm、器高21cmを測る。一見してその形態と紋様構成には在地的色彩が薄く、北陸地方の縄紋中期頭土器である新保式に近い特徴を備えたものと受け取られる。胎土も粗い砂粒を含むが素地は緻密で硬く、在地の中期頭土器とは異なった特徴を示す。ただし、北陸地方から搬入されたものか、あるいは在地にて模倣したものかにはわかに決定しがたい。

新保式土器については筆者の知識がほとんど及ばないので、以下加藤三千雄氏による分類・編年案にしたがって形態・施紋の特徴を観察し、時期比定を試みる。

### (2) 器形

深鉢B形態に相当する。内湾する口縁部、筒状を呈しながらも緩く腰の張る胴部からなり、頸部の内面、口縁部と胴部の境界は明瞭な稜をなす。口縁端部には2種4単位の突起が付され、内傾する面を設ける。

### (3) 紋様

文様要素としては半隆起線、爪形紋、格子目紋、細線文、「し」字状の貼付突起がある。このうち半隆起線は幅広の半割竹管状工具を用い、爪形紋も同一工具で施す。格子目紋は先端の鋭いヘラ状の工具を用いている。細線文は幅の小さい半割竹管状工具で施紋されている。

文様構成は口縁に2段、頸部、胴部の各紋様帯からなる。

**口縁部上段の紋様帯**／上端から半隆起線による口縁端部の縁取り、細線文帯、上下に半隆起線を伴う爪形紋帯の順に施紋が行われる。

**口縁部下段の紋様帯**／基本的に無紋帯で、頸部の貼付紋が割り込む。

**頸部紋様帯**／上下に半隆起線を伴う爪形紋帯に、半隆起線で縁取りをする「し」字状の貼付突起が4単位付される。その位置は口縁部の突起とは交互となる。

**胴部紋様帯**／頸部の貼付突起から垂下する半隆起線により縦割り構成となる。各区内は半隆起線による縦位の施紋が行われ（「U」字・逆「U」字状など）、空隙には細いヘラ状工具による格子目紋が充填される。

### (4) 位置付け

本資料の位置を考える上で鍵となる要素を抽出すると以下のようになる。

①器形が深鉢B形態である。

②細線文帯が見られる。但し三角形などの陰刻は加えられない。

③押引の粗い爪形紋が見られるが、口縁端部には施されない。また必ず上下に半隆起線が伴う。

④「し」字状の貼付突起が頸部に加えられ、底から胴下部まで垂下する半隆起線により胴部紋様帯は縦分割される。

これらの点のうち、①の器形と②の細線文および③の粗い爪形紋の存在は新保式第Ⅲ段階以降の特徴であり、②において陰刻がまだ顕著でないこと（彫刻蓮華紋が成立していない）と、③における爪形紋

の施紋部位のあり方は新保式Ⅲ段階に特徴的な要素である。次に④に示した胴部が縦割りの文様構成となる点は新保式Ⅳ段階に顕在化する現象である。従って、本資料を基本的には新保式Ⅲ段階に位置付け、その中でも新しい様相を呈するものとみなすのが妥当と考えられる。

一方で、北陸地方では新保式Ⅲ段階において細線文と爪形紋は施紋される紋様帯が同一であり、一つの個体においては二者択一的で同時施紋されることはほとんどないとされる。従って本資料のように口縁部上段の紋様帯において両者が重疊して用いられる事例はきわめて稀なのであろう。また胴部の半隆起線による施紋も新保式土器に特有の「B」字状、「L」字状やクランク状などの構図が見られないなど、違和感もある。

(5) まとめにかえて

以上、本資料についてその特徴を観察し、位置付けを行ってみた。冒頭でも触れたようにこの土器が北陸地方から直接もたらされたものか在地かその周辺にて模倣されたものか、筆者には窺い知ることができないが、いずれにしても中信地域において新保式系土器の良好な出土例はほとんどなく、中期初頭における地域間の交流を考える上で好資料といえよう。願わくば在地の土器との関係を追求したいところであるが、共伴する良好な資料に恵まれずなしい。これについては今後の課題としたい。

(竹原 学)

### 3. 逆三角形形状の石製垂飾りについて（第42図、写真）

A8～9、B8区の大形土坑内の西側テラスで、石の下部から床面に密着した位置で出土した石製垂飾りである。垂飾りは上方頭部に軽い抉りがあり先端部が尖り、逆二等辺三角形形状を呈する小型の石器である。石材は硅質岩で、やや暗い乳白色、淡い黒紫色のすじ状の剥離痕など擦痕がみられる。成形はほぼ完璧で、表裏・側面ともに研磨が丁寧に施され光沢を具えている。計測値は最大長4.2cm、幅：2.4cm、厚さ：0.52cm、重さ：6.7g。表面と見られる片面の上部には窄孔の工程開始の傷痕と思われる小さな窪み状の刺突痕が観察される。この窄孔痕が管錐の使用による貫通を目的とした前段階であるのかについては明言できないが、拡大観察の結果では刺突のための意図も推測できるものである。

このような形状の石器については、藤田富士夫氏による次のような解説がある。サメ歯のイミテーションとして『儀礼＝属性』を内包し期待するもので、発見例は少ないが、全国的に類例をみるとされている。形態の特徴として、先端の尖ったほぼ三角形。頭部に抉りがあり、鋸歯状の刻み目が付されている。各側縁にも同様な刻みがある。さらに装身具としては、上部に吊り下げのための1～2の窄孔が施される、などが指摘されている。本例は垂飾りとして、窄孔や側縁の鋸歯状の刻みなどで不完全であり、成型品の搬入、在地加工の有無の問題などととも、その類似品、ないし一例として取り上げるものである。

現在のところ、発掘調査による出土または資料報告されている類例は多くない。本遺跡に近接する出土遺跡としては、山梨県酒呑場遺跡19号住居跡（中期前半半戸尻Ⅲ期）の鋸歯状垂飾り。岡谷市梨久保遺跡55号住居跡（中期後葉でも古い時期）の垂飾り。松本市エリ穴遺跡構外（後晩期遺物包含層）の逆三角形垂飾り等があげられるのみである。なお、このような形状の石器の始源を辿ると、愛媛県上黒岩陰遺跡（草創期～早期）の出土品で、変成岩を加工した両側に鋸歯状の刻み目が施され、頭部に2つの窄孔をもち、胴部分に斜め格子の文様が彫られている製品を見ることができる。

本例が出土した大形土坑からは早期末、茅山式の尖底部分が、底辺部分の焼土塊の上方側壁に嵌入して検出されている。

今後、海岸地帯より遙かに隔絶する中部高地地方における当該類似資料の増加により、さらなる検証が可能となることを期待したい。

#### 4. 第12・13号住居跡出土のヒスイ製大珠垂飾りについて (第42図、写真)

出土状況と形態／本遺跡第12、13号複合遺跡住居跡より、ヒスイ製大珠が1点出土した。各住居跡は発掘調査区域の西南部、犀川河岸段丘の縁辺に位置する。遺構プランの大方は西側調査区域外のため、調査された面積は推定で12号住居跡プランの1/3、固く13号プランの1/4程度となった。大珠が発見された地点は13号住居跡の調査区域壁面よりわずかに東寄り、推定する住居跡プランの北東部寄りであった。最終日に13号住居跡の床面精査中、床面レベルから覆土とともに掘りあげて発見した。下面にはおよそ50片の細コハクが散乱して発見された。コハクについては項を改めて記述する。

出土したヒスイ大珠の形態は玉斧(石斧)に類似し、やや変形した撥形、もしくは短茎ヘラ状を呈し、縄文中期燦熟期の大型鏝形形の形態にはほど遠い粗製で、全体的に丸みを帯びる成型・研磨がなされていない。転石・漂石の作用による自然礫面は表裏に見られ、特に裏面下部には深い皺状の自然面が大きく残されている。この形状は、木島勉氏の「長者ヶ原遺跡(新潟県)等で出土する原石の多くは拳大の亀裂の入った円礫(転石)で、産地近くの姫川や青海川の河口や海岸で採集し、原石(素材)は粗割→敲打→研磨→穿孔→仕上げの工程を経て大珠はつくられ、蛇紋岩製石斧などとともに内陸部へ運ばれた」とする傾向とはやや異なり、粗割・敲打を必要としない成型に近い原石を採取、擦切→研磨→穿孔→仕上げの段階で形が損なわれるという事由で、全面的な成型研磨が不可能ではなかったかと推測され、大量に作出できる以前の傾向とも考えられる。ちなみに糸魚川や周辺の海岸でヒスイの転石を採集すると、時には成型に類似する形のものに穿孔箇所として適当な位置で緑泥岩が剥奪され穿孔に似た痕跡が残るものを見出すことができる。

石質は硬質ヒスイで、透光性に富み、緑色の深みのある色彩が漂う良質の逸品であることを窺わせる。計測値は長径(最大部位)4.13cm、同(最小部位)3.50cm。幅径(下部)2.70cm、同(上部)1.60cm。厚径1.14cm。重量22.3g。穿孔は上辺中央部に1カ所、孔径は表裏で各8.0mm、4.5mm。管錐工具により一方からの貫通方法によっている。穿孔の側壁を拡大して観察すると、管錐の穿孔過程での丁寧な硬砂研磨による擦痕はきわめて滑らかで、美麗な光沢を呈する。同時に研磨面でのヒスイ以外の石質(石英等)は微細に削落している。なお、貫孔直前の裏面には管状に細く段状の挟りが形成されていて、管錐使用における高度な技法の在り方を示唆している。なお、穿孔の内部などでの残存物は全く確認できなかった。

第12号住居跡における出土遺物としては縄文早期末茅山式の尖底部。前期初頭中越式。前期前葉神ノ木式。前期後葉諸磯A式(南大原式)に比定される前期土器が検出されており、12号に切られる第13号住居跡からは床面に密着して、前期中葉黒浜式(有尾式)併行の厚手のやや粗雑な深鉢形繊維土器の胴部大形片等が出土し、1点ではあったが、諸磯A式の小片が出土した。

住居跡か土坑か／従来、ヒスイ製大珠は縄文中期より出現し、ヒスイの原産地である北陸海岸地帯から内陸部へ流通伝播したものとされ、新潟県：長者ヶ原遺跡等の硬玉工房跡の存在が顕在化されていた。また出土遺構の内容をみると、たとえば中部高地の一部(長野県内)の場合、そのほとんどが土坑からの出土で、いわゆる土坑墓に関わるものかと推測されている。類例をみると、塩尻市：上木戸遺跡(中期後半)での1土坑での5点まとまったの出土は、副葬品とみても土坑墓と考えられる。富士見町：居平遺跡では約130基の土坑墓中、5基からヒスイ製大珠が発見されている。その他に塩尻市：柿沢東遺跡、岡谷市：梨久保遺跡、茅野市：福沢中原遺跡、駒ヶ根市：高見原遺跡、松川町：里見V遺跡などの長野県内での出土遺跡が挙げられている。小林康男による何らかの特殊遺構としての幅をもたせたヒスイ大珠内蔵の土坑論は副葬品以外の祭祀儀礼的な性格とみるこれらの類例を傍証するものと理解できる。いうならばヒスイ大珠の性質を、生命

と緑の再生を司る神との媒介を示し現す呪力の象徴としての意義があるとみて、着装者は昇華した特別の地位にある人物であったと推考すれば、これが墓中に副葬され、伝世されなかった事情も納得できる。このような論考を得て、再度出土状態を観察したが、格別の痕跡も明確には認められなかった。しかし、やはりヒスイの所持者、あるいは交易者による住居跡内での所有物とみるのが妥当であり、さらに推論すれば、何らかの特殊祭祀遺構（施設）の存在も否定できないものである。

ここでヒスイ製品の出土について他遺跡の状況を概観する。縄文時代における硬玉製玉類出土一覧によると、長野県に限定してみても計60遺跡が掲載されているが、住居址からの出土と記録されているのはわずかに塩尻市：平出遺跡、諏訪市：荒神山遺跡、高森町：増野新切遺跡の3遺跡に過ぎない。なおかつ60例のうち石質に問題があるものが若干あるとされる。発掘調査によるものは大方が土坑（土坑墓）出土であり、木島勉による「ヒスイの玉は出土状況から、単なる装身具としてではなく、宝器的、呪術的なシンボルとして、限られた集団の特定者に所有され、副葬されたことがわかる」を裏づけている。なお、富山県初の事例とされる大山町：花切遺跡ではヒスイ製石斧（玉斧）が東側に石を立てかけた住居跡から発見されたという。

出現時期についてヒスイ製品の製作出土が縄文前期末までさかのぼる傾向について二三の事例を挙げる。下諏訪町：武井林遺跡の場合、前期末諸磯C期を該期として、ヒスイ製石斧1点、海石（漂石）2個、ヒスイ小石（原石）が発見されたとするが、これは上述の60遺跡中唯一のものでありながら可能性に止どまっている。1994年、山梨県：天神平遺跡では前期末諸磯C期に比定される硬玉大珠の発見が報告されている。東部八幡原遺跡のヒスイ大珠との類似性については、住居跡と土坑（土坑墓）出土の相違はあるが、大珠の形態や推定時期などできわめて相似する関連性が指摘できると思われるので、以下、報告書中から要点を抜粋して記載する。「第421号土坑の底部からやや浮いた状態で出土。この土坑の壁寄りには諸磯C式新段階の深鉢形土器が倒立していた。埋葬にかかわる施設とするならば、死者の頭部に深鉢形土器が被せられ、胸のあたりに硬玉製大珠が置かれ（さげられ）ていたと推測される」。計測値は「5.5×3.0cm、厚さ2.2cmのもの。貫通孔の直径は片面が8.0mm、反対側が4.0mmとだいぶ異なっているが、孔内は穿孔の際についたと思われる筋がめぐっていることも含めて管切りの可能性がある。自然礫面を残しながらも、磨き削られた製品であり、寺村光晴先生のご教示では時期の分かるものとしては最も古い部類に入る大珠とされる」。以上のように新津健は前期末葉諸磯期にはすでにヒスイ製大珠垂飾りが装身具として北陸から伝播していたと述べている。岡谷市：清水田遺跡からは一部自然礫面が残る長さ約4.7cm、幅4.1cm、厚さ最大約1.2cmを計る加工途次の装飾品か、祭祀用の石斧とみられる大形ヒスイが、縄文前期の住居跡付近の遺物包含層から発見され、前期のヒスイ製品とみなされた。長者ヶ原遺跡では遺跡の南地点に出土した硬玉礫の伴出時期は中期前葉前後と考えるのが妥当であるが、しかし住居北東側近接地で出土した硬玉の大礫に伴出した土器は前期末葉のものに限られているので、この期に採拾された蓋然性も大である。として前期末葉出現を示唆している。

工房跡とされる遺跡／縄文期の内陸部のヒスイ硬玉工房跡については1990年に大町市：一津遺跡で貴重な発見が報告されている。ヒスイ原石とその製品・未製品、玉砥石等、多様な遺物が出土した。中条村：富遺跡からもヒスイ原石、製品、半製品を伴出した同様工房跡の報告がある。他例として戸倉町：円光房遺跡、上田市：下前沖遺跡、松本市：内田城遺跡、塩尻市：柿沢東遺跡等が挙げられている。松本市：エリ穴遺跡からはヒスイ大珠1点、未貫通ヒスイ大珠1点が発見されている。この遺跡の場合、特筆すべきは、垂飾りと

同様な装身具である大小様々の土製耳飾りの検出総計2534点をかぞえたことである。また岡谷市：梨久保遺跡の住居跡からヒスイ製磨製石斧、2基の土坑からヒスイ大珠各1点が出土、さらに8点のコハクが伴出している。

ヒスイのながれ、『天神遺跡←武井林遺跡←梨久保遺跡←東部八幡原遺跡←原産地：姫川流域糸魚川地方』という縄文前期末葉諸磯期の交易の流通経路が漸く明確になりつつある。寺村光晴氏の説く「北陸道は庄川、神通川を南下する2本のルートがあるが、メインとして姫川を南下（現代の塩の道）して諏訪盆地へ。ここより分かれて一方は伊那谷、一方は八ヶ岳西南麓～甲府盆地～多摩丘陵～南関東にいたるルート」がより鮮明となった。さらに黒曜石の搬出経路と重なり、前期の軟玉（滑石・燧石）製装身具類の出土遺跡を辿れば『北陸地方の前期遺跡～舟山遺跡～上原遺跡・一津遺跡～（A）有明山社遺跡～松本盆地西部。（B）女犬原遺跡～東部八幡原遺跡～（1）お供平遺跡（2）松本盆地東部の各交易ロードの様相が見えてくる。加えて本遺跡出土の北陸系土器の新保式第Ⅲ様式存在なども含めて、多くの様態を窺い知ることができる。

## 5. 第12・13号住居跡出土のコハク資料について

ここに記載するコハク資料とするものは前稿のヒスイ製大珠垂飾りと重なり合った状態で検出されたもので、コハクは大珠の下方に位置していたと思われる。きわめて貴重な資料であったにもかかわらず、現場より搬送の途次、取り紛れ所在不明となった。発掘の記録では、およそ50片ほどの細粒片で、赤褐色様の色調を呈し、透光性の淡い赤ないしセピア色とも観察された。形状など不明であった。

コハクは低湿地、泥炭地などでの保存には適するが、その他の包含地中の場合には保存には不適であり、発見されても日光、または風に当たるとたちまち細片になってしまう場合が多く、そのために発見例が少ない要因ではないかとされている。本遺跡の場合も保存に好適な環境とはいいがたい状況であったと考えられる。

発掘によりコハク製品が最初に報告されたのは、考古学雑誌38-1に野口義彦氏が資料紹介として掲載した「石器時代のコハクについて」である。『昭和24年10月下旬千葉市鏡子栗島台遺跡を語るとき、偶然にも未製品のコハク玉・小破片を発見することが出来たので報告する次第である。』と資料報告している。概略は次の通りである。栗島台遺跡は縄文前期から中期にわたる遺跡で、出土状況からコハクはおそらく中期の所産で、前期に遡ることはないとする。さらに製造プロセスについても原塊に打撃～擦り切り～研磨、相当鋭利な尖頭器による両面からの穿孔が計られるものとしているが、出土資料の小孔は未貫通であった。さらに調査地を西へ250メートル隔てた地域を、県立鏡子女子高等学校（現県立鏡子高）が発掘調査したところ、同様のコハク製石器が出土した。ために鏡子付近がコハクの原産地ではないかと考え、探索調査を行った。後日子期した通り同市外ッ町1丁目波止山採石場よりコハクの原塊が発見された。なお、氏はコハクの原塊採集について、海蝕され浜辺に打ち上げられた小塊を採集して、使用したものと推考している。

山梨県のコハク研究者五味信吾、野代幸和両氏は縄文前期後半から末葉にかけてのコハク製品の出土遺跡として、千葉県四街道市木戸先遺跡、東京都町田市三矢田遺跡、末葉から中期初頭段階として前掲引用の東京都八丈町倉輪遺跡。中期初頭段階として、関東から中部高地へのアンパルルート中部高地最大の交易拠点諏訪湖畔前掲岡谷市の梨久保遺跡をあげている。さらに本州におけるコハクの初現は、前期末葉から中期初頭段階にあるようだと推論している。中部高地（長野県内）に於けるコハク製品の発見例は、岡谷市梨久保遺跡の土坑から最も多い。原産地南関東・千葉県鏡子市、東北岩手県久慈市から山梨県を經由して、諏訪湖畔を中継点とし、そこから天竜川水系、さらには松本平の南玄関口塩尻市から木曾川水系と犀川水系に分岐伝播していく。木曾川水系では土坑からコハク大珠が出土した南木曾町大田垣外遺跡が見られる。一方犀川水系は東山麓と西山麓とに分ち、縄文前期に盛行した滑石・蛭石製装身具（<sup>氷</sup>状耳飾等）伝播コースを逆行して行く。犀川水系では生坂村の本東部八幡原遺跡の場合、住居跡出土であり、ヒスイ大珠との共伴は時期はもとより本集落の性格を推定する傍証となるべき重要な資料であった。

最近の注目すべき発掘例としては、北海道千歳市柏台Ⅰ遺跡より細石器に共伴して、原形は中央に穿孔穴を持つ円形の玉と考えられる直径1.1cmを計るコハク製の玉が発見され、固く北海道湯の里4遺跡からも葛と見られる遺構から出土したコハク製ペンダントと併せ、北海道の後期旧石器にコハク製装身具の存在が確認された。以上に鑑み、今後本州各地においても縄文前半期におけるコハク製装身具の出土を想定し、従来のいわゆる常識観を捨て、細心の注意をもつて発掘調査に当たることが望ましいと考えている。

以上、資料の各頁は次の各氏に懇篤な御助言、御教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

合田進、川久保清仁、川崎保、北沢伊弉男、小林康男、新谷和考、新澤健、樋口昇一、綿田弘実、糸魚川市教育委員会埋文担当。

## 結 語

この度の東部八幡原遺跡の調査は生坂村の圃場整備事業により緊急に実施された発掘調査である。1次、2次と2回にわたり間隔をおいて行われたが、その対象となった遺跡面は部分的に限定される結果となった。さらに遺跡の中央部分は国道19号線によって分断され、地層は長年の田畑の耕作その他の環境要因によりかなり削平された状況であった。

縄文期から平安期にわたる住居跡が複数発掘されたが、特に平安期の住居跡の検出では床面が地表から極めて浅い残存状態で、プランの特定には困難を生じた。しかし縄文期の住居跡は比較的良好的な形態を保って検出された。調査の結果、縄文時代早期末から中期中葉に至る多種多量の遺物が発掘され、さらに、悠久の時を経て、平安時代の遺物である土師（羽釜）須恵器（坏）片も若干出土した。なお、平安期の火災を示唆する状況で東西に流れる南北の幅広い焼土、骨片を含むカーボン層が観察された。いわゆる複合遺跡であった。主体は縄文時代で、平安中期（IX-XI期）に帰属する石組み北竈が遺存していた6号および7号住居跡の2軒を除いて、縄文時代の住居跡19軒、竪穴状祭祀遺構1軒、計22軒の発掘調査を行った。土坑は土坑墓1基を含めて105基を検出した。105基の土坑は全て縄文期に属するものであった。なお住居跡については調査区外にかかった第5・6・10・11・12、13・14、15号住居跡以外は全体調査を行う事が出来た。ただし、第20号住居跡、第21号住居跡は、小土坑の配列から、住居跡として確認したものである。

本遺跡は遺跡と自然環境の章中で述べたとおり、大河犀川の右岸の段丘面上に立地している。当初から犀川沿いや現在の八坂村、美麻村へ通じる溪谷・山間交易道路の要衝という要素をそなえた集落という特殊な性格を有していたことが、この度の調査で再確認されたといえよう。

出土遺物中、土器、石器についての考察は第4章において試みた。土器、石器の様相から縄文早期末（前期初頭並行期）から中期中葉全期におよぶ縄文前半を該期として、広く交易流通の中継オアシスとしての存在意義が顕著に認められる。その証例として二・三の特殊な遺物の出土が挙げられる。その一つは石製逆三角形垂飾りである。これは早期末から前期初頭期に帰属する大形土坑No.91からの検出であり、定かではないが日本海文化圏(?)での所産とみられるサメ歯状を呈するもので類例は少ない。

またヒスイ製大珠垂飾りは、第12・13号住居跡より出土したもので、第13号住居跡覆土下部から発見されたものである。鉅川流域の糸魚川海岸地方の産出と推定される。さらに下方に重なりコハクの検出が見られた。風化してほとんど微片状となった了ったが、これは南関東から東北産と思われるもので、前期中葉関東系黒浜式繊維土器（有尾式）を伴っており、その他の出土土器は早期末～前期中越式～神ノ木式など前期前葉の土器が主体で、ただ、第12号住居跡から小片ではあったが、前期後葉諸磯A式（南大原式）が1点発見された。発掘当時常態化していた中期中葉の所産よりやや上がる、中期前葉では?と処理してしまった。当該資料は現時点においては、一応諸磯期に比定するのが妥当と考えられる。

犀川上流よりもたらされる関東ないし僅かであるが関西系、および中南信系遺物と鉅川遡上の北陸

系遺物などの共伴出土は、早期末から前期後葉諸磯期における南北交通路（後世の広義の千国街道いわゆる「塩の道」）を彷彿させる。

特異な例として、第5号住居跡からは諸磯式土器に混じて平出で3A（第 図）が出土している。

中期初頭新保式第三様式土器は搬入土器、若しくは在地模倣土器。いずれにしろ能登・富山を中心に北陸一円に分布するもので、後続する中期前葉新崎式も出土しているが、色調焼成から在地模倣土器の可能性が強いと考えられるが、石製逆三角形状垂飾りなどを合わせ、縄文早期末から北陸地方文化の伝播と、人的交流を窺い知ることができる。新保、新崎式いずれも姫川沿いに遡上したと思われる土器様式である。新保式土器は第16号住居跡の床面から出土したものである。なお、壁際小土坑から、石柱、石棒の変遷に関わるキー・ポイントとも思える中期初頭期に属する砂岩製の石柱が出土している。貴重な資料の発見であった。また、礎礎を巡る柱穴は中央部に向かって角度をつけて掘られていた。縄文中期初頭期の住居建築様式の在り方について、なんらかのメルクマールをと、地元協力者のご好意を受け、杭材を立てて実験したところ、床面より高さ4メートルで交差した。最近の急激に変貌する縄文建築様式に一つのデータとしてあえて記録した。

新崎様式土器は第11号住居跡から出土したものである。さらに、新崎式の系譜を引く中期中葉北陸系土器、その色調、胎土から、明らかに北陸から搬入されたと考えられる古い段階での半陸帯（隆起線文）文土器が、在地中部高地、群馬地域に分布する焼町式土器に寄り添った状態で中南信系藤内Ⅰ式期に比定されると思われる、第4号住居跡覆上上部から出土した。信濃川流域中越地方に盛行したこの岩原式半陸帯加飾土器は、さらに進化して馬高式（火焰型土器、王冠型土器）として花開く土器群である。

又、グリッドE6、道路ぞいより中期中葉小型無紋深鉢（屋外埋喪土器、写真 図）が発見された。

本遺跡で発見された竪穴状祭祀遺構で、藤内式に後続する井戸尻Ⅰ式期に帰属する土器3点に共伴して、半陸帯加飾土器（広識の馬高式）が1点出土した。姫川を、若しくは信濃川から犀川を溯上したこの2つのコースのいずれかで伝播し、祭祀的様相を持つ献納土器として珍重され、祭祀遺構内に祭られた石柱と石棒に供献されていた。石柱祭祀と石棒祭祀との合祀、融合は全国的にも非常に珍しい現象であり、本遺跡の特異性を明瞭に象徴していた。

隣接する犀川下流信州新町に所在する前期『お供平遺跡』から多量の石匙が発見されているが、本遺跡第5・18・19号住居跡からも多数の石匙や石錐が出土し、同時期での両遺跡の関連を示唆している。既に報告がなされている前期後葉の、中南信地方の各遺跡にも（秩状耳飾り等軟玉製品などを含めて）共通する傾向が見出せるようである。

なお、本遺跡が多岐にわたる交易の要衝としての性格をもった一拠点と見られるふしは、検出された19軒の縄文住居跡の配置が、早期末ないし前期初頭から中期中葉の末期におよぶ長期的な定住集落のわりに、以前に発見された既出の出土遺物を検証した上でも、前期後葉の諸磯A、B期（南大原式・上原式）を除いては疎らに点在し、中期前葉新道式期に比定した第3号、第11号住居跡以外は、同時期の複数住居跡の未発見など、並みの集落としては把握できない事象からも推定される。しかし、このような現象は本遺跡出土の中期中葉藤内式中南信土器分布圏の北限をふくめて、あくまで現時点での推論の域を出ない。又、本遺跡から見つかっている前期後葉末諸磯C期（日向Ⅱ式）の土器出土は、

僅かであったが該期住居跡等遺構の存在を示唆し、早期末より中期中葉の終わりまで、各期を通して連続して居住が継続していたことが検証された。このような交易の拠点的性格を持つ遺跡として松本平東南部山麓に位置する塩尻市北熊井所在の埴原遺跡があげられる。1978年春から翌年と3度の発掘調査が県立松本深志高校地歴会が行い、その後1985年林間工業団地の造成開発に伴い本格的な発掘調査が行われ、縄文早期から中期末までの集落が発見され、特に中期全般におよんで大環状集落が検出された。本遺跡から犀川を溯上し、松本平東山麓→埴原遺跡など交易物集積拠点塩尻→主要黒曜石原産地をひかえた梨久保遺跡等の一大集積地諏訪湖畔への交易ロードの検証がなされたと言える。将来本遺跡の範囲拡大ならびにDNAを含めた好資料の発見がなされたならば、血縁集落か否か、婚姻等過儀礼の解明により、集落構成の在り方を明確に示唆する各期の遺構、住居跡の出土が予想される。平安期もそのようであり、採集食物の乏しい本遺跡の環境の中での存在意義、さらには生活基盤となった事象、および灰軸陶器の出土を見なかった事など、今後の課題が残されたと思われる。ただし生坂村南部下生野『田島遺跡』、上生野『上生野遺跡』からは灰軸陶器が発見されているが、平安中期、後期いずれに帰属するものか実見していない。

急峻な懸崖を浸食して流れる犀川沿いの立地と縄文文化の関わりなど、生坂村東部八幡原遺跡は特異性を具えた重要な遺跡であることは従前から周知注目されていたが、この度の発掘調査でその一端が明らかにされたといえよう。なお、別項東部八幡原遺跡の出土土器・石器および前述論及したとおり、北陸文化圏の影響が早くから浸透し、姫川水系を介して日本海文化圏の南縁に位置する可能性があると判明した。

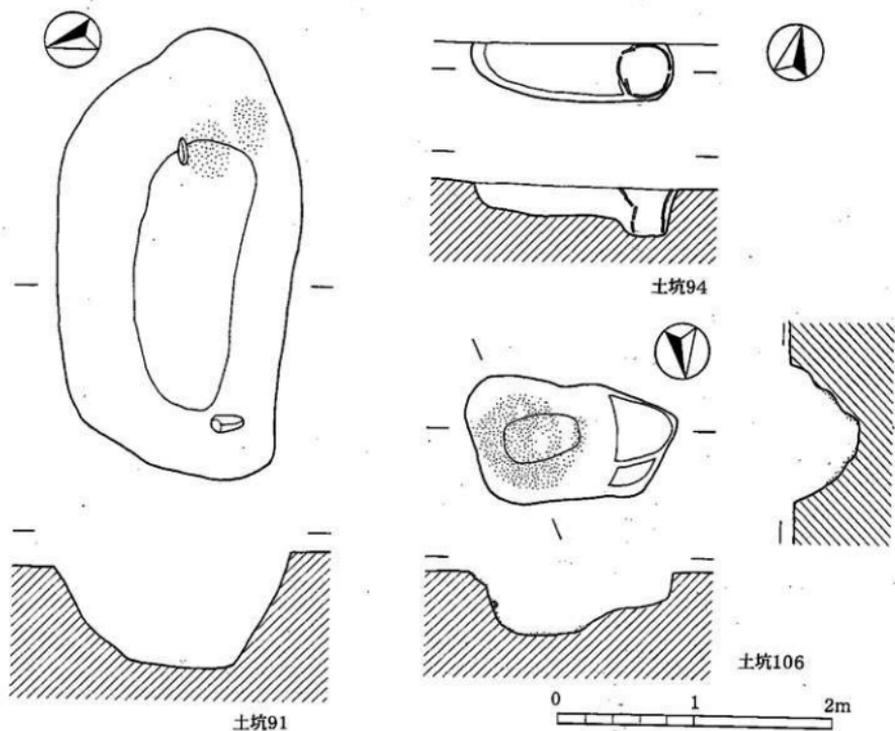
以上、生坂村東部八幡原遺跡の概要を記して結語とする。極寒の2月、炎天の8月の2回にわたるきびしい野外の発掘調査に参加して頂いた生坂村教委、関係職員、地元の皆様、ならびに考古学研究者の方々のご協力とご指導により上記の成果をあげ、中高生にも現地実習と学習の体験の場となった。

横田作重氏の訃報、第1次発掘調査において、発掘担当の重責を担い全日程に参加され、調査員としてご指導を頂き、調査後も膨大な資料の整理に当たり、詳細なメモを残され、本報告書作成にもご配慮を頂いた横田作重氏が逝去になりました。ここに感謝の意を表し謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

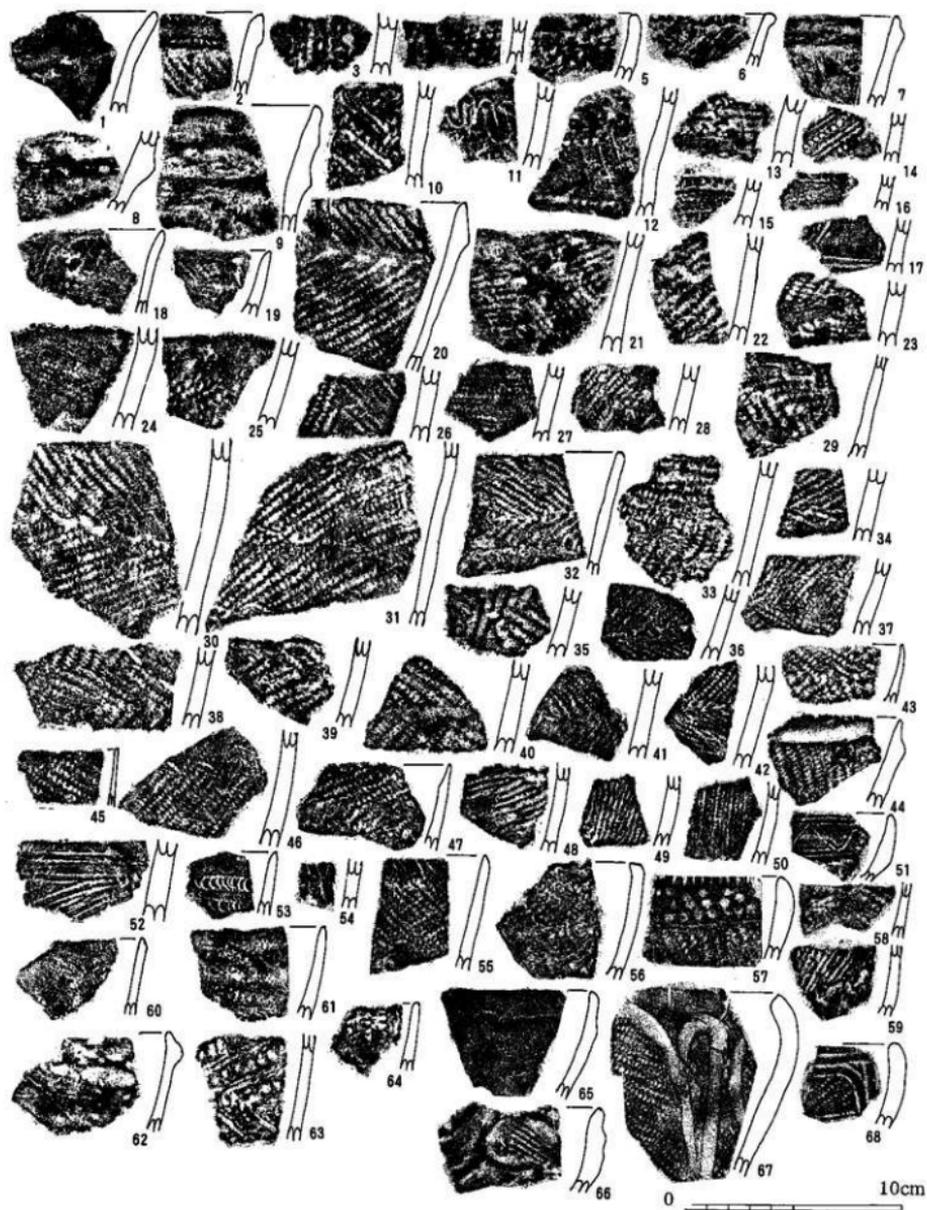
## 【参考文献】

- 藤沢 宗平 1989 信濃先史文化の研究 藤沢宗平著作刊行会
- 東筑摩郡・松本市・塩坑市誌 第2巻 歴史上
- 長野県史 考古資料編 全1巻1遺跡地名表
- 『犀川』 1994 犀川上流直轄河川改修建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所
- 遺跡と遺物 1982 長野県考古学会
- お供平遺跡ⅠⅡ 1982・1989 長野県信州新町教育委員会
- 『有明山社』 1969 藤沢宗平他 長野県考古学会
- 小林 達夫 1999 『縄文人の文化力』 新書館
- 山本日軍久 1995 『縄文文化の研究』9 縄文人の精神文化 雄山閣
- 平林 彰 1994 『縄文時代研究事典・戸沢充則編 東京堂出版
- 『井戸尻』 昭和40年 藤森栄一編 中央公論美術出版
- 加藤三千雄 1988 『新保・新碓式土器様式』『縄文土器大観』3 小学館
- 1995 『北陸における中期前葉の土器群について—新保・新碓式土器—  
『第8回縄紋セミナー 中期初頭の諸様相』 縄紋セミナーの会
- 『上原』 1957 藤沢宗平他 長野県教育委員会・長野県文化財保護協会
- 藤田富士夫 1998 『縄文再発見・日本海文化の現像』 大巧社
- 酒春場遺跡ⅠⅡ 1997 山梨県教育委員会
- 上木戸遺跡 1988 中央自動車道長野線・埋蔵文化財発掘調査報告書2 日本道路公団名古屋支局、長野県教育委員会
- 梨久保遺跡 第5次～第11次 1985 長野県岡谷市教育委員会
- 『古代ヒスイ文化の謎』 森浩一編 昭和63年 新人物往来社
- 柿沢東遺跡 昭和59年 塩尻東地区県営園場整備事業発掘調査報告書 塩尻市教育委員会
- 里見V遺跡 1973 昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書下伊那松川町地内3日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会
- 荒神山遺跡 1974 昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書諏訪市内(その1・2) 日本道路公団名古屋建設局、長野県教育委員会
- 増野新切遺跡 1973 々 々 下伊那郡高森町地内(その2) 々 々
- 木島 勉 1997 『ここまでわかった日本の先史時代』 角川書房
- 『一律』 1990 大町市教育委員会
- 宮 遺跡 1993 中条村教育委員会
- エリ穴遺跡 1997 松本市文化財調査報告No.127 松本市教育委員会
- 花切遺跡 1998 09 17 上新川郡大山村教育委員会北日本新聞
- 武井林遺跡 1979 下諏訪町教育委員会
- 天神遺跡 1994 山梨県教育委員会
- 清水田遺跡 1998 07 09 岡谷市教育委員会 長野日報
- 長者ヶ原遺跡遺跡範囲確認調査概報(第4次・5次) 1981 糸魚川市教育委員会
- 藤田富士夫 1989 考古学ライブラリー-52『玉』ニューサイエンス
- 寺村光晴 『古代人の交流・交易』 別冊歴史読本・人物往来社

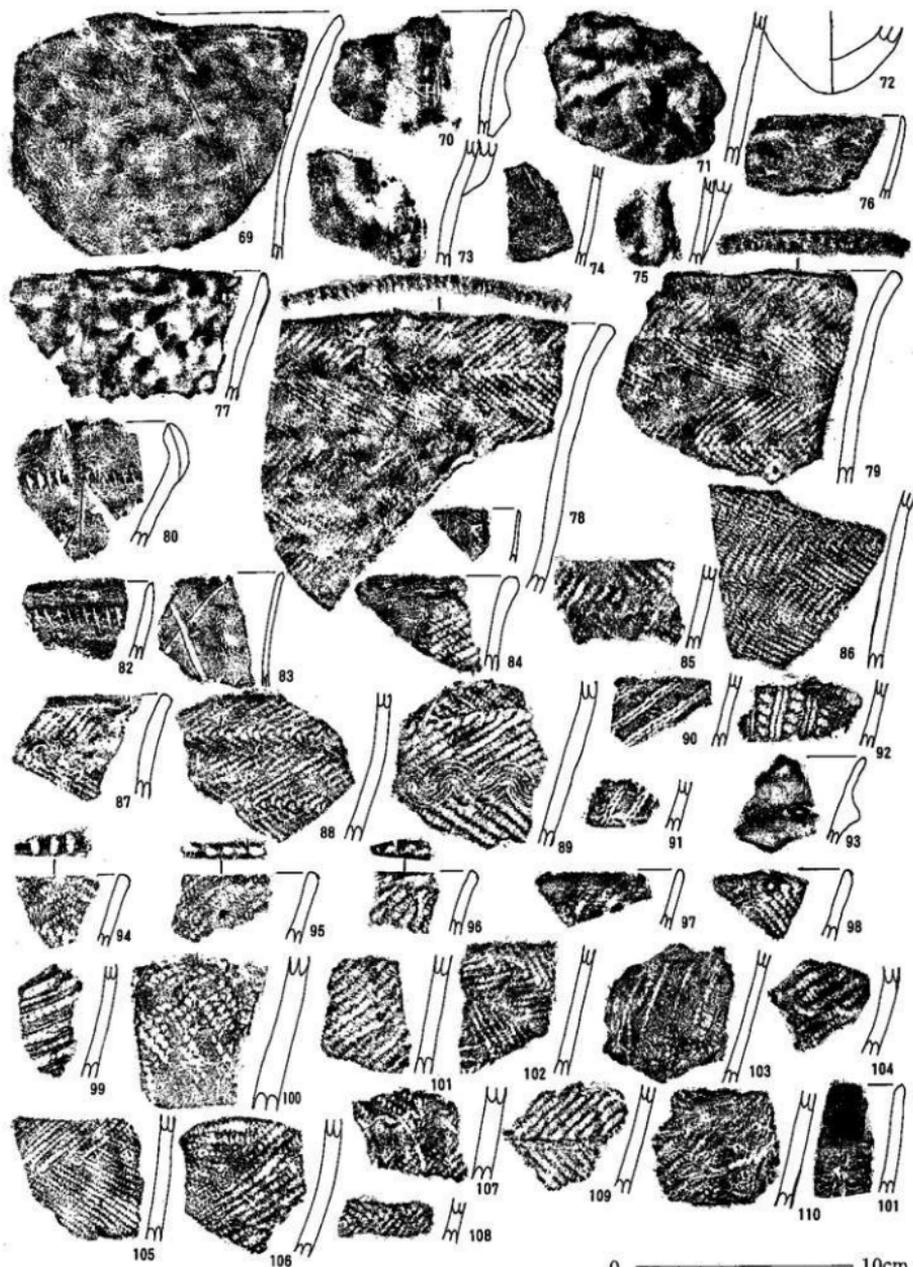
- 野口 義麿 1952 考古学雑誌38-1 日本考古学会編 学生社
- 五味信吾・野代幸和 1994 『研究紀要10』山梨県立考古博物館・県埋文センター
- 川崎 保 1994 同志社大考古シリーズVI 『縄文時代前期の玉と墓』  
『発掘された日本列島'99』新発見考古速報 文化庁編 朝日新聞社
- 『あぜみち』 1981 No.30 松本深志高校・地歴会
- 俣原遺跡 1986 塩尻市教育委員会



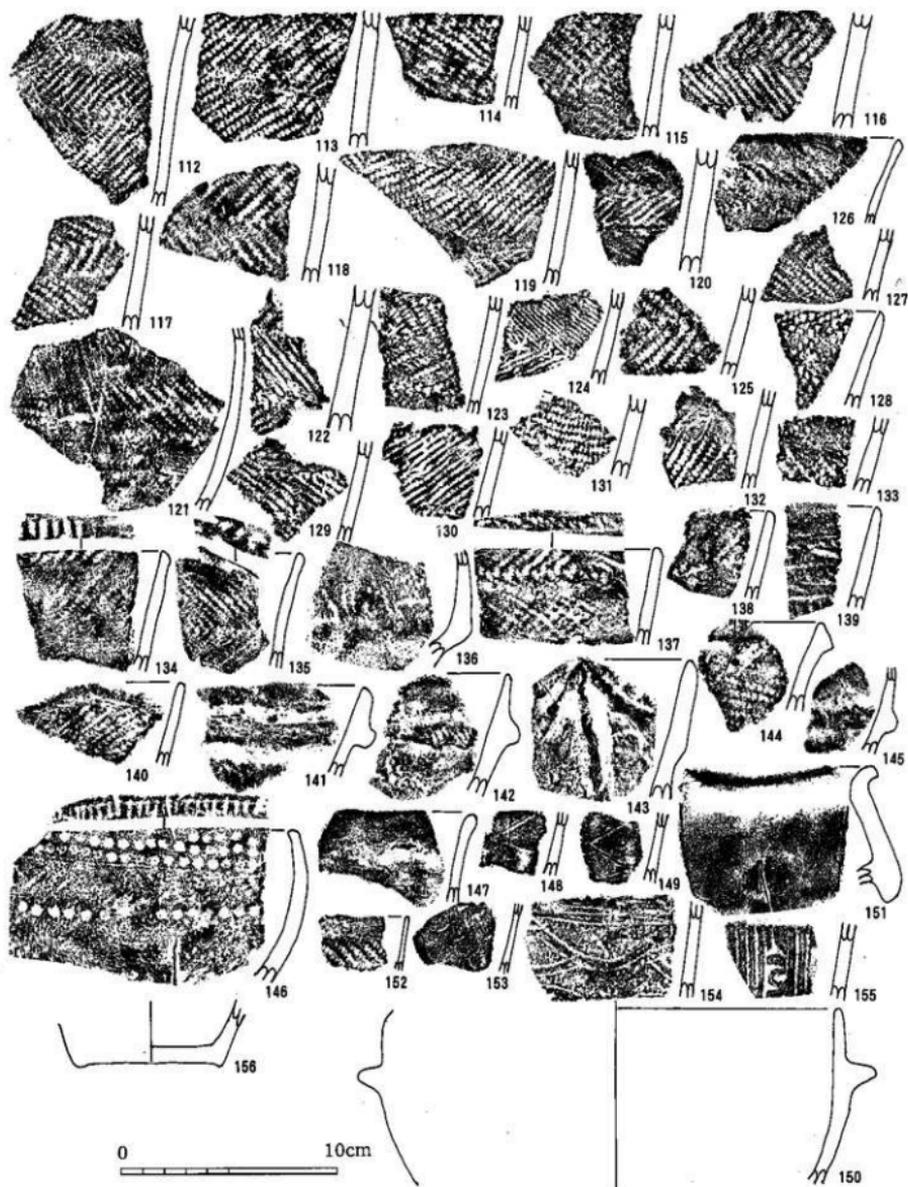
第20圖 土坑91・94・106



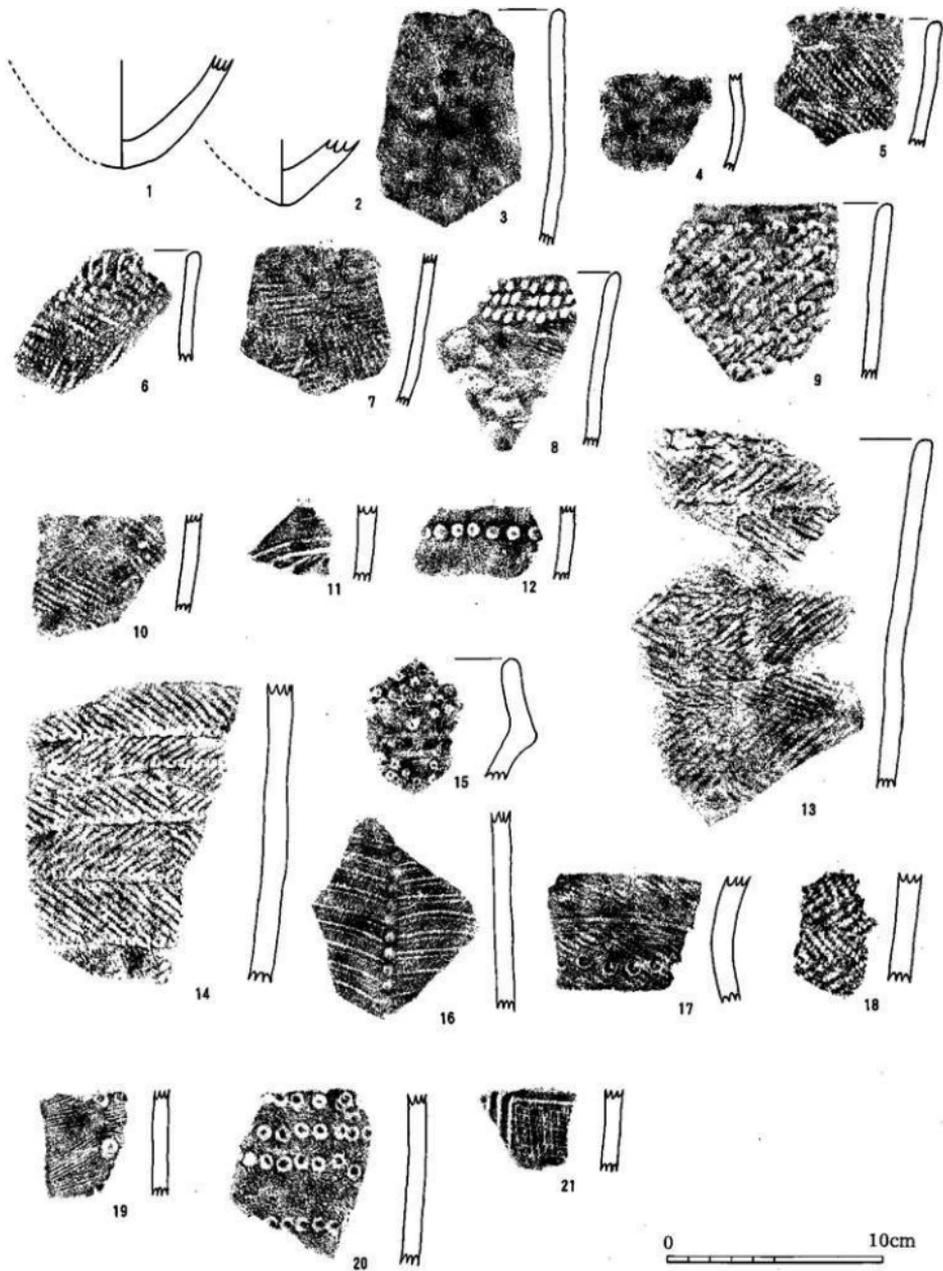
第21图 第1・2号住居跡出土土器



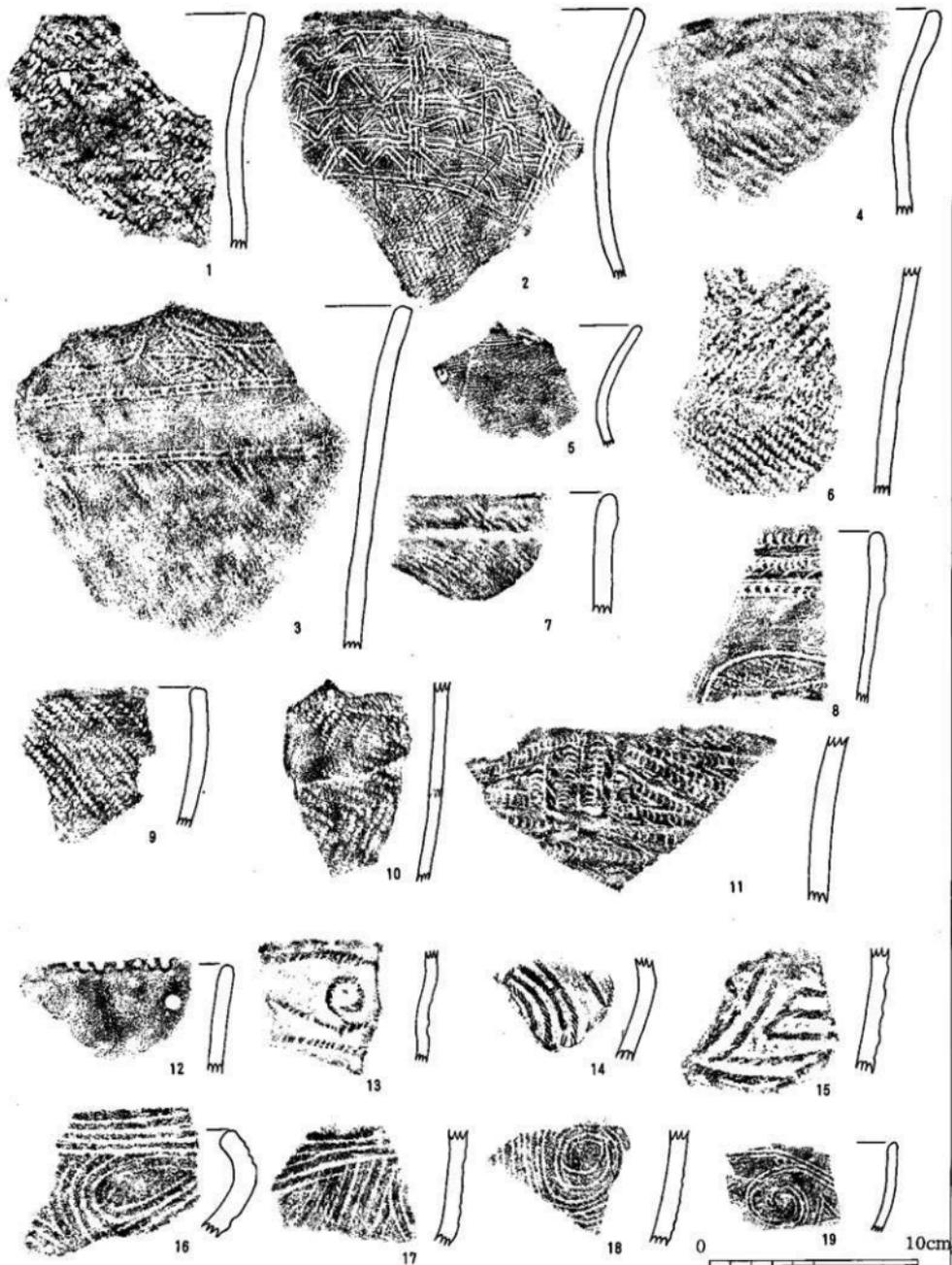
第22图 第1·2号住居跡出土土器



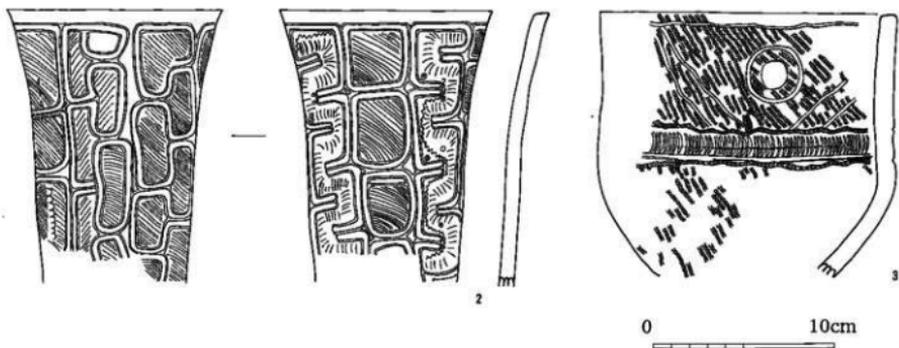
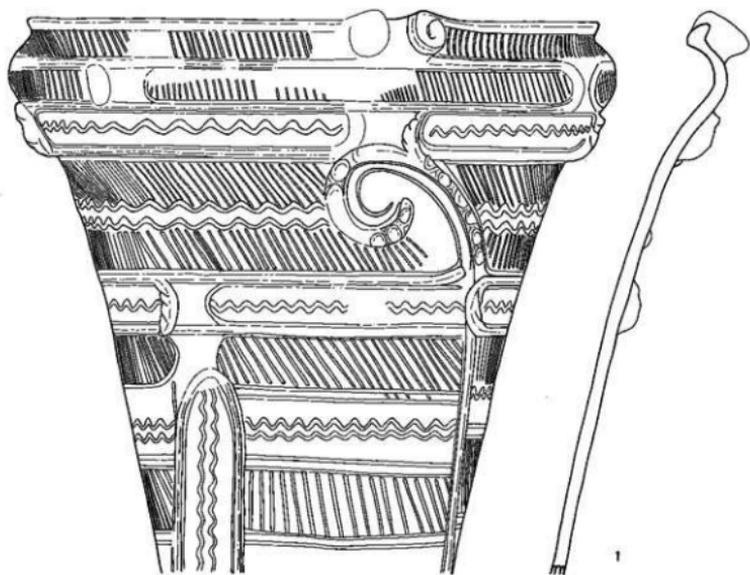
第23图 第1·2号住居跡出土土器



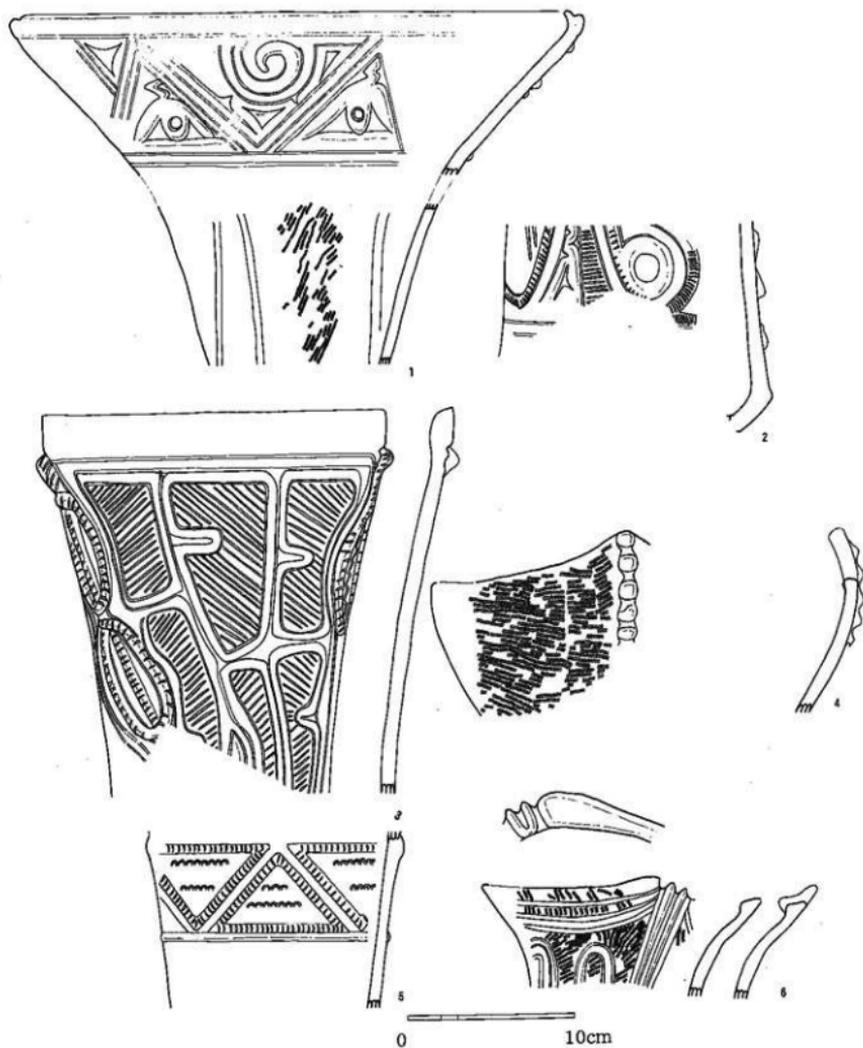
第24图 第12·13号住居跡出土土器



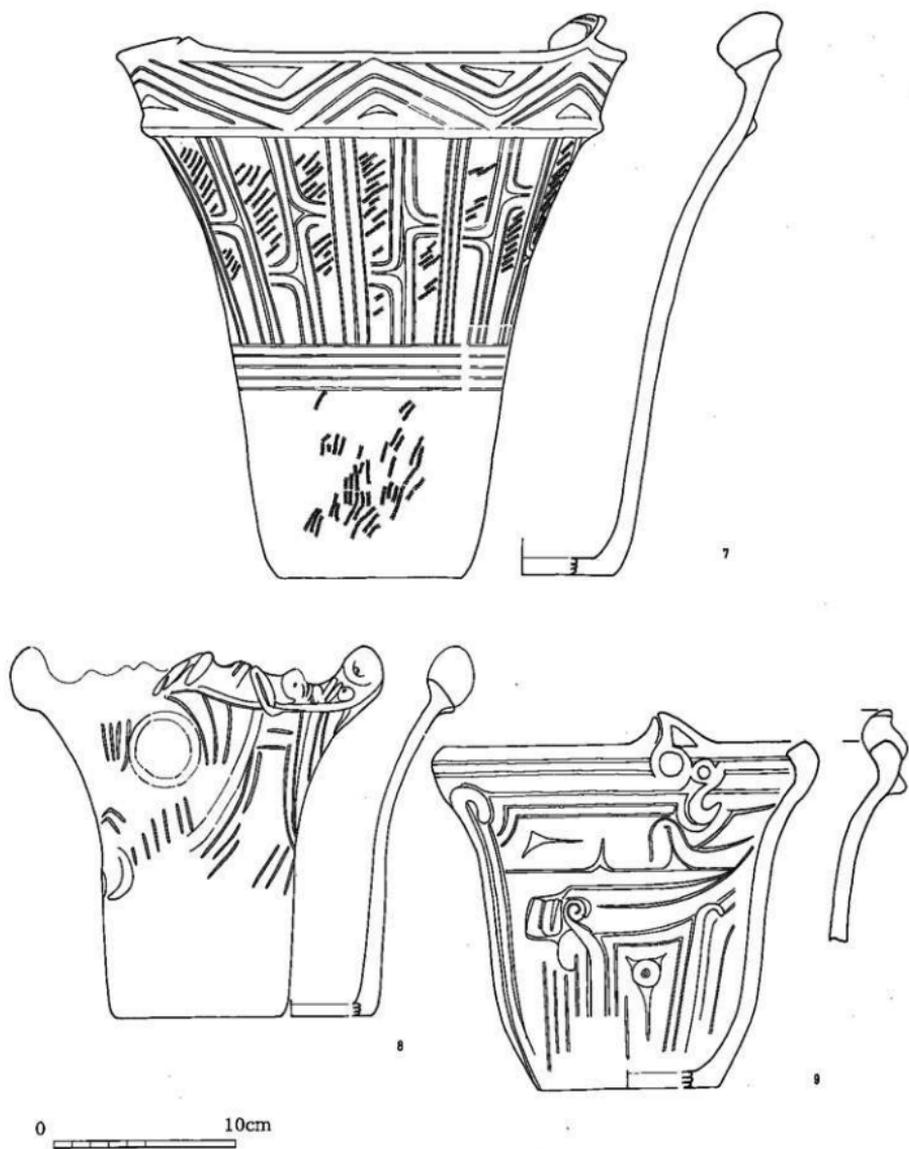
第25图 第18·19号住居跡出土土器



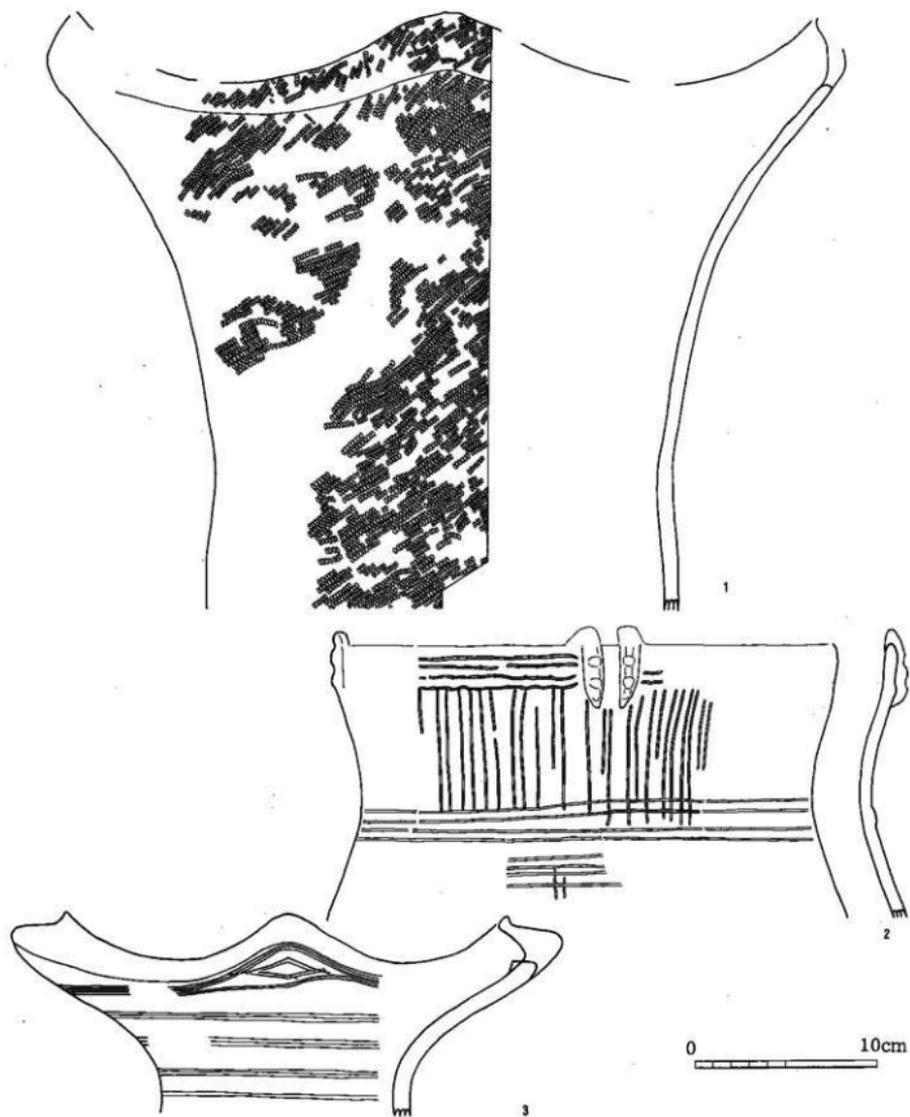
第26图 第3·4号住居跡出土土器



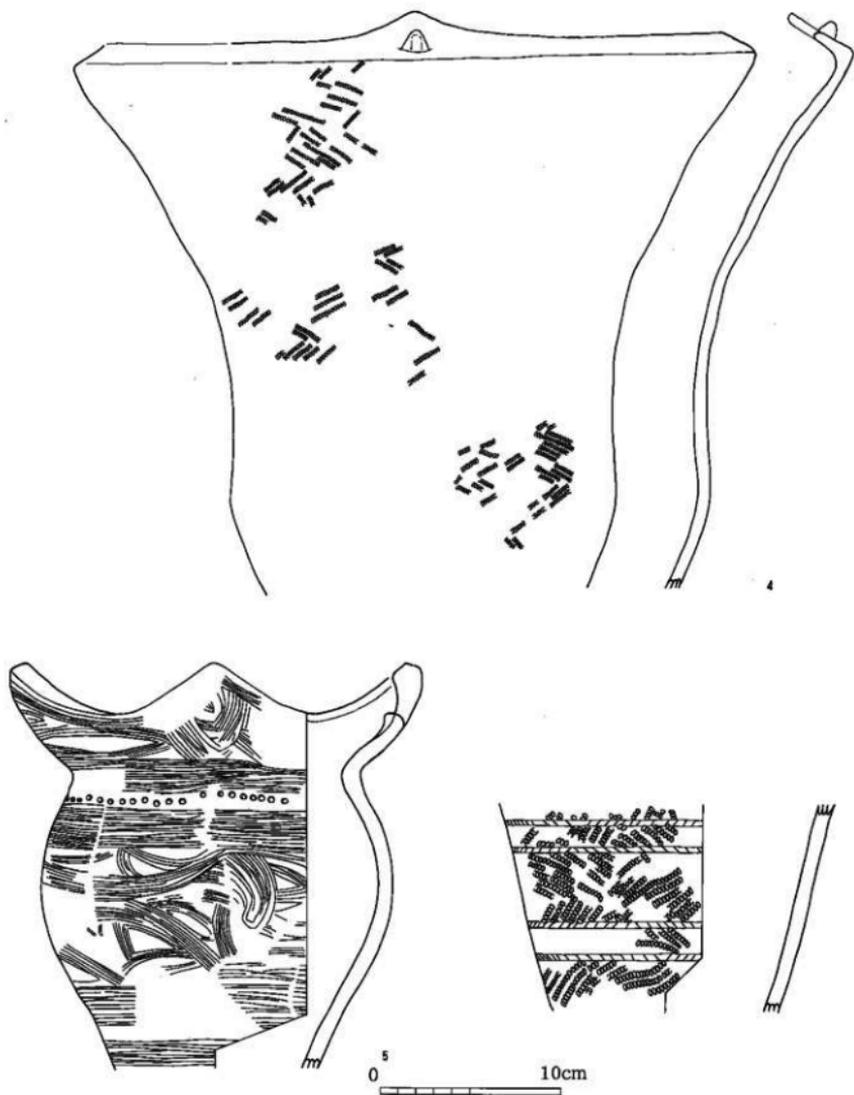
第27图 第4号住居跡出土土器



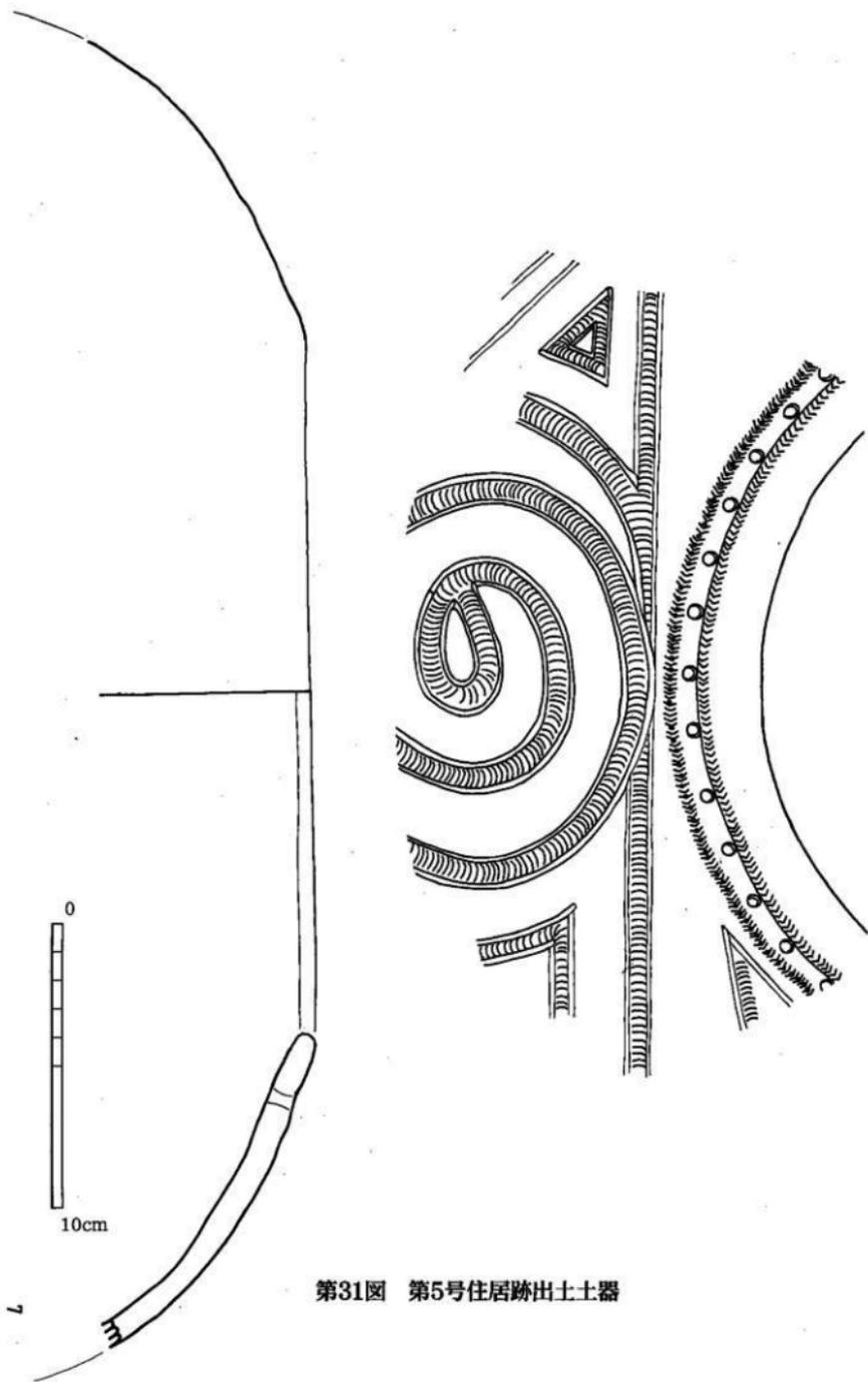
第28图 第4号住居跡出土土器



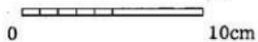
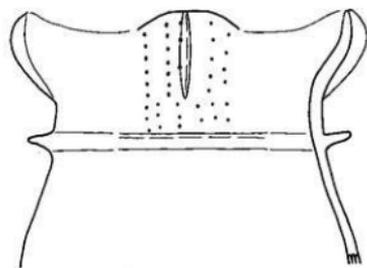
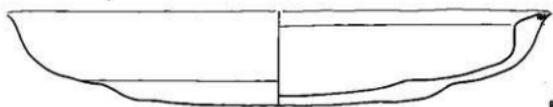
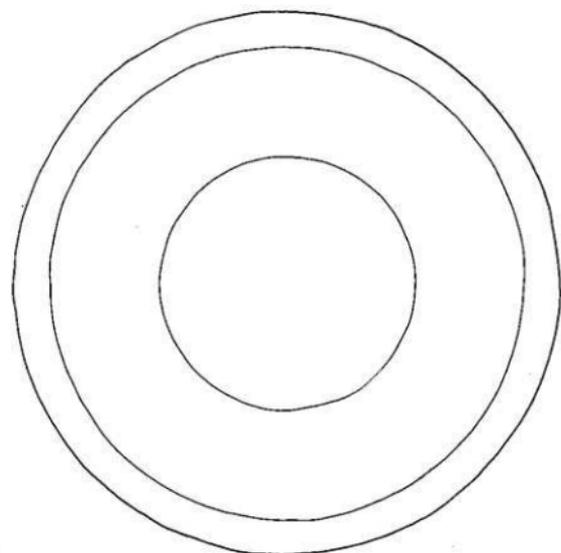
第29图 第5号住居跡出土土器



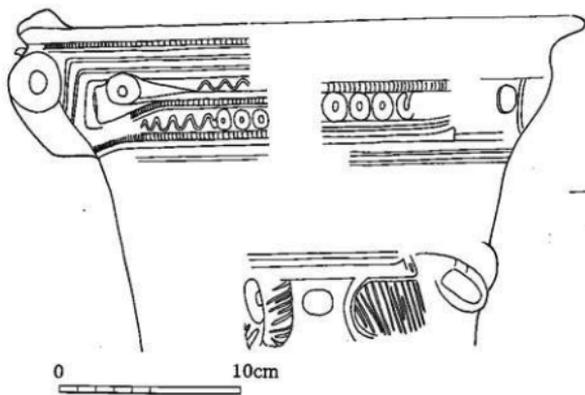
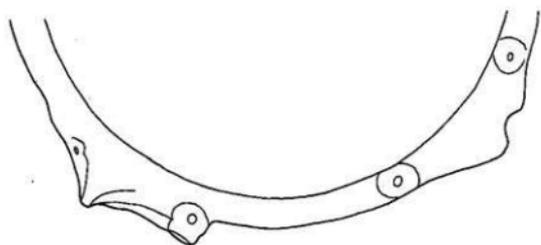
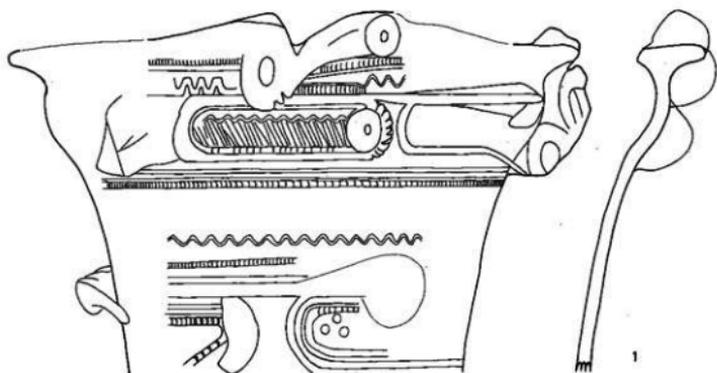
第30图 第5号住居跡出土土器



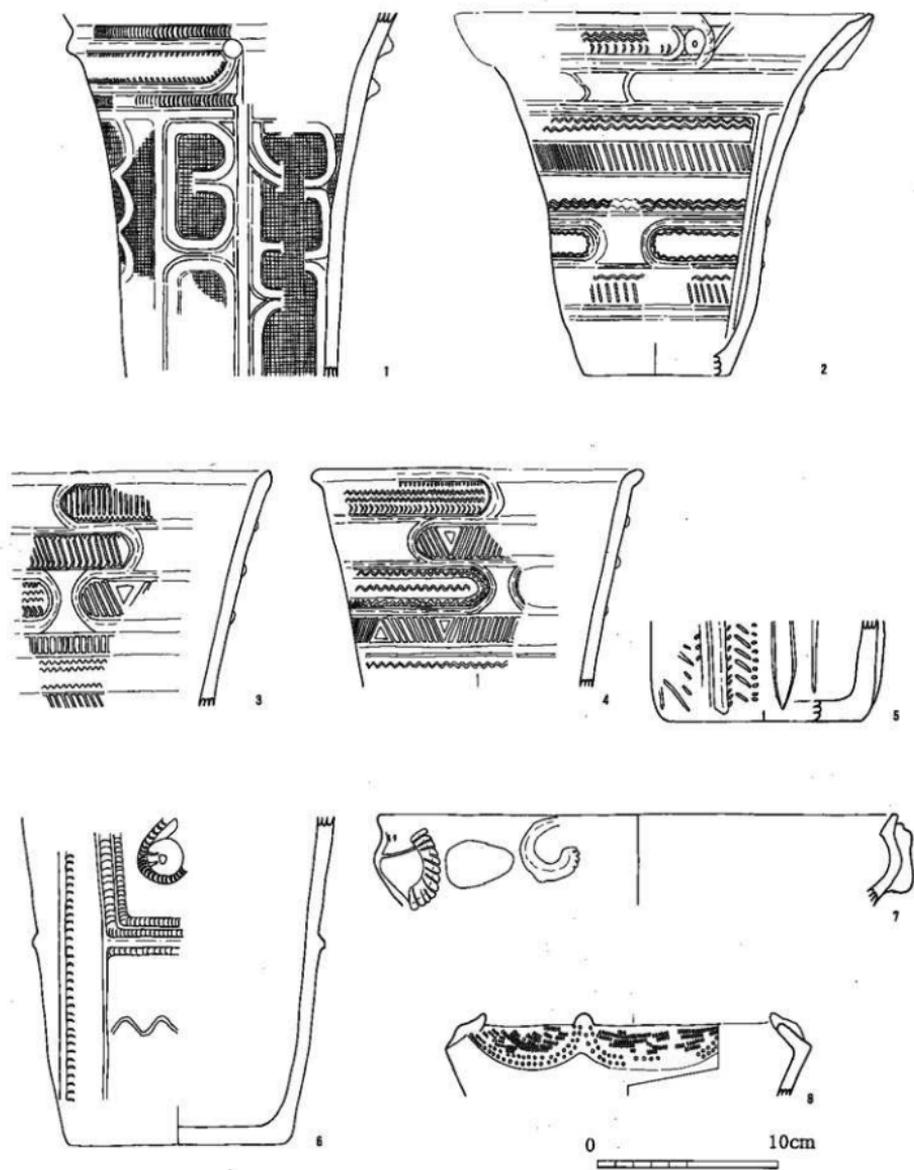
第31图 第5号住居跡出土土器



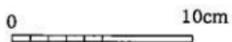
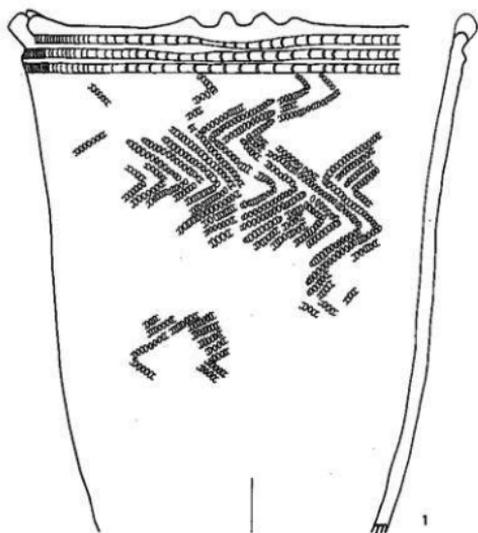
第32图 第5·8号住居跡出土土器



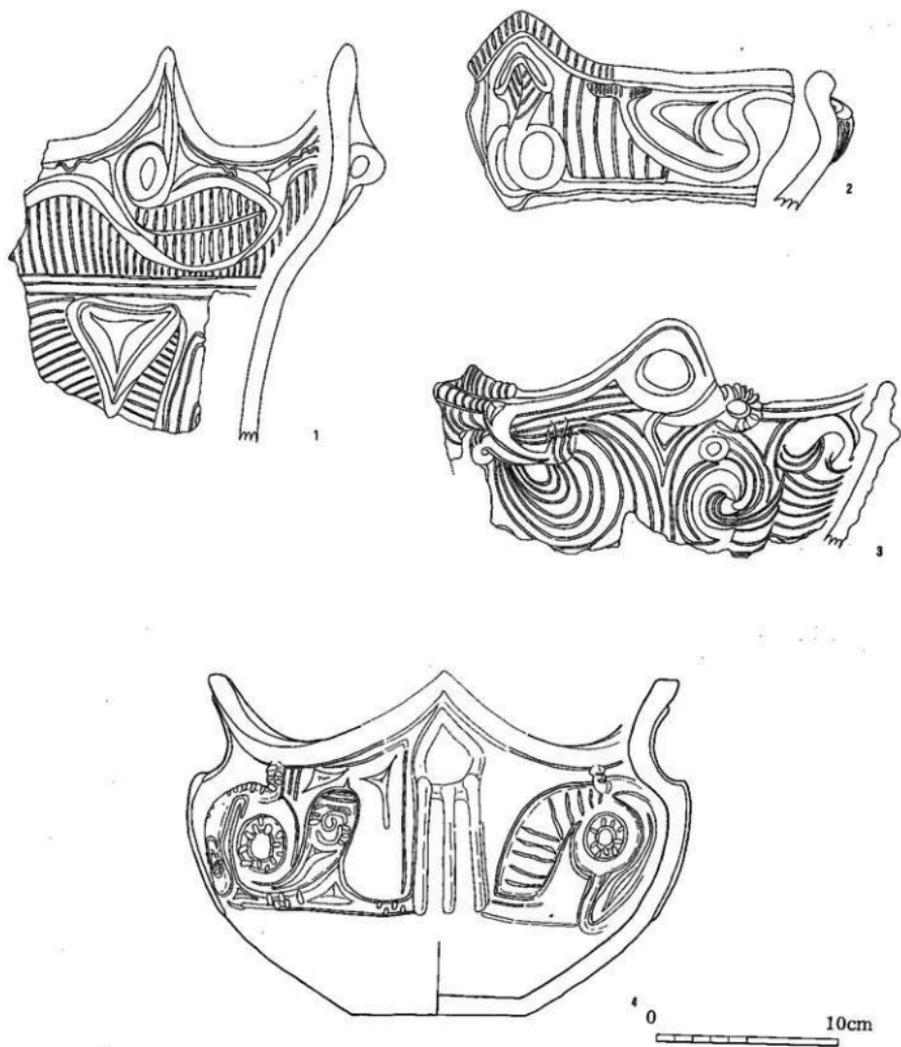
第33图 第9号住居跡出土土器



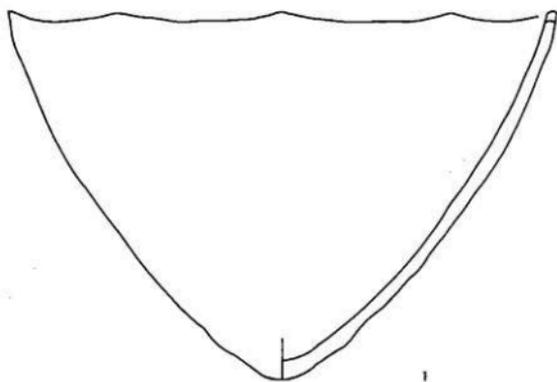
第34图 第11号住居跡出土土器



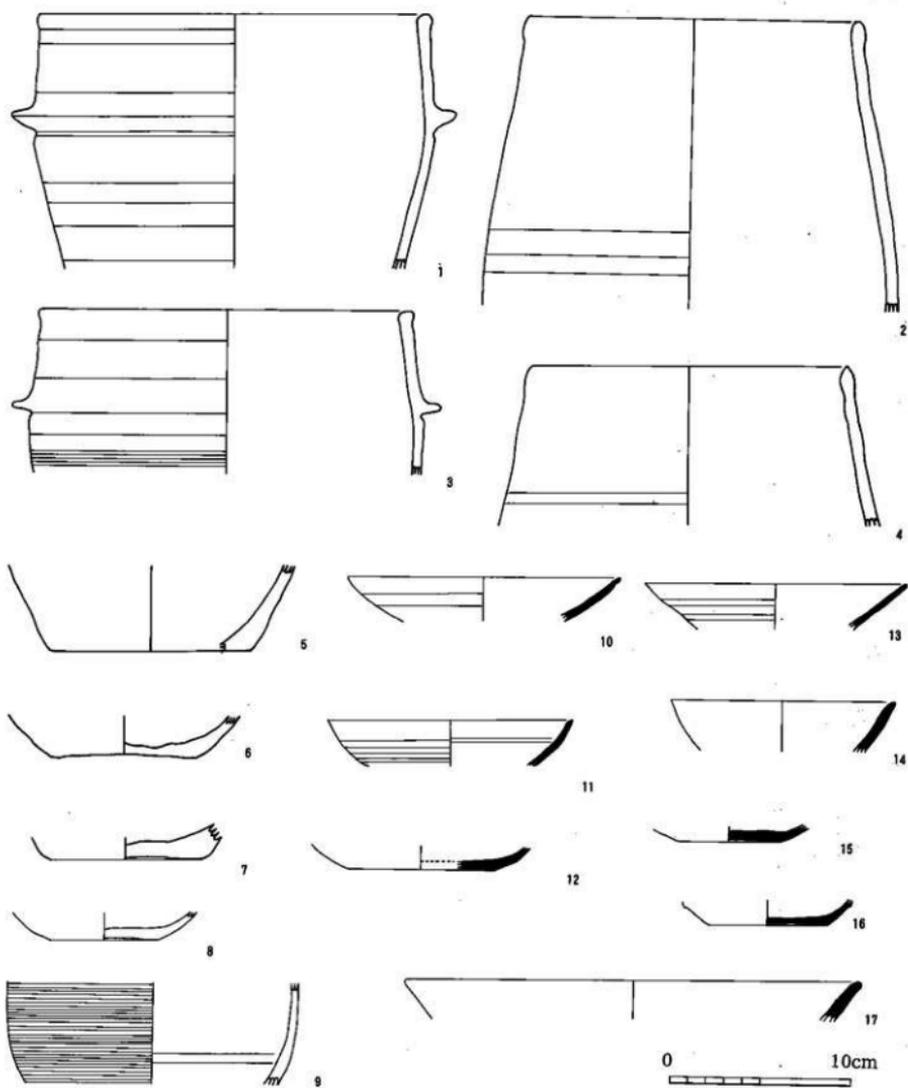
第35图 土坑No.106(土坑墓)・16号住居跡出土土器



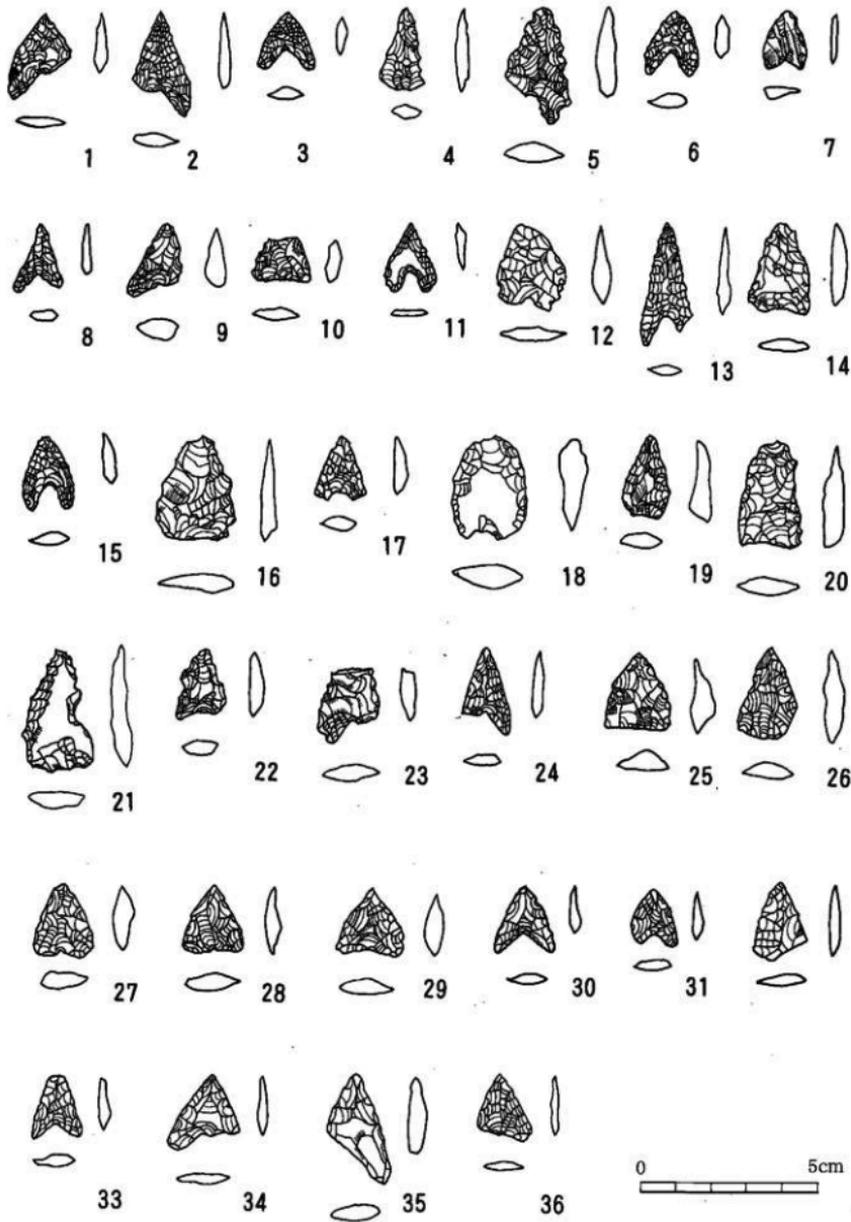
第36図 豎穴状祭祀遺構出土土器



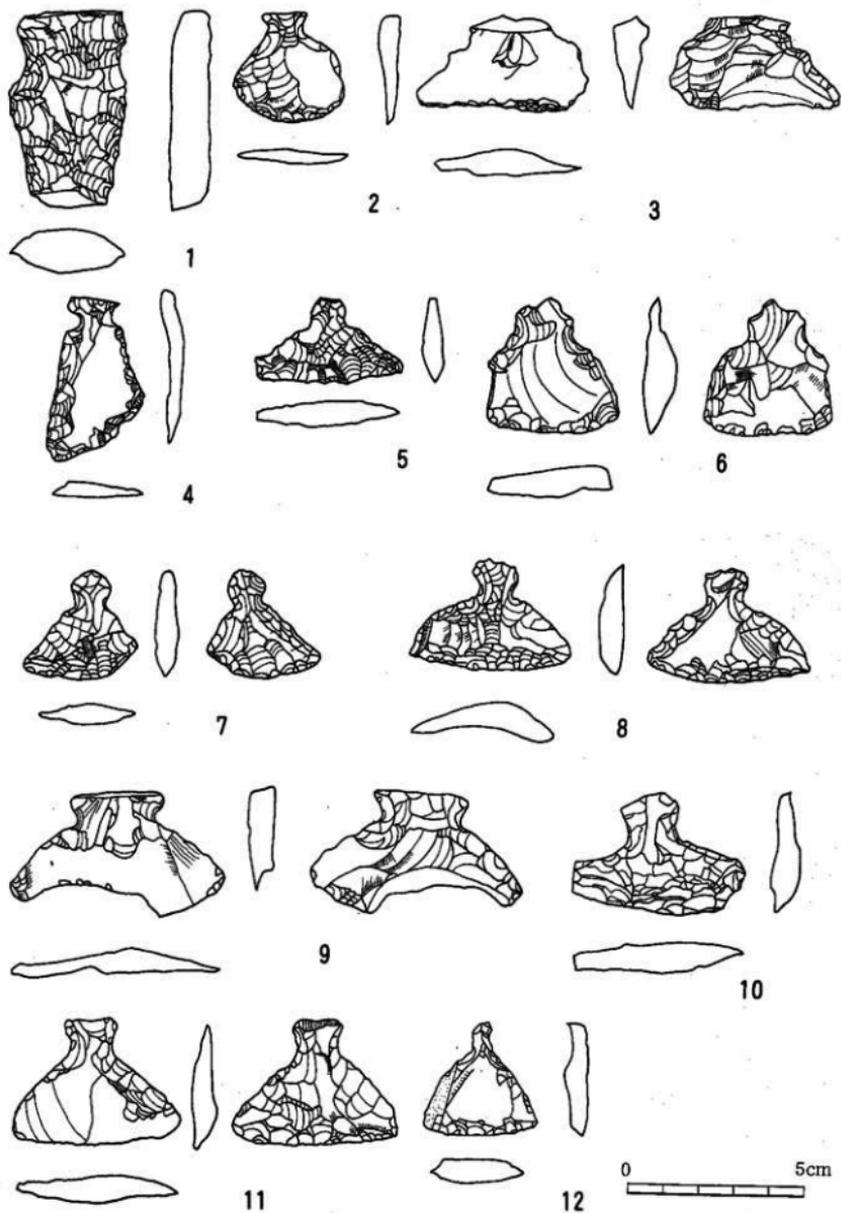
第37图 第8号住居跡 (1:中越式) 土坑出土土器



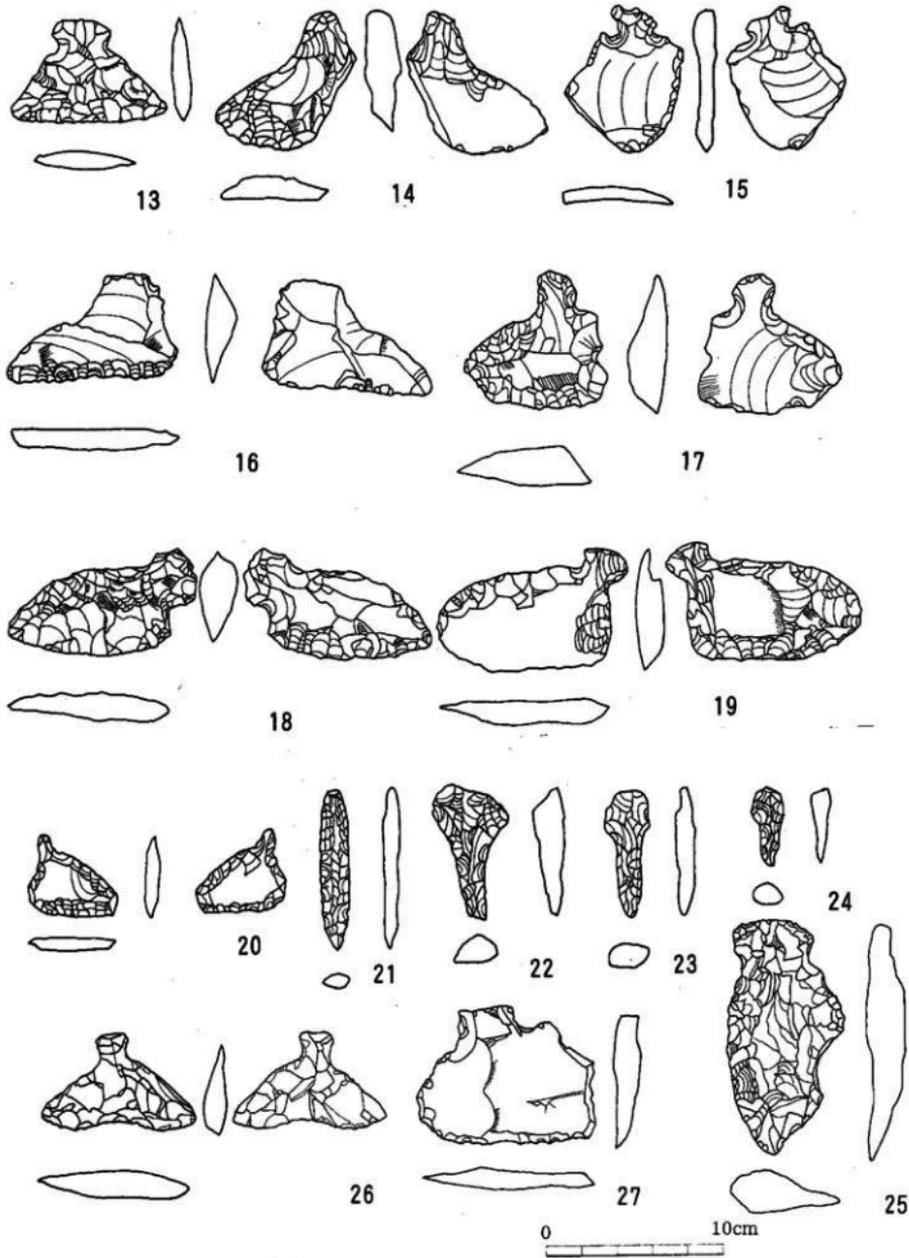
第38图 第6·7号住居跡出土土器



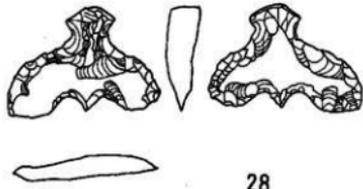
第39圖 出土石器 (石鏃)



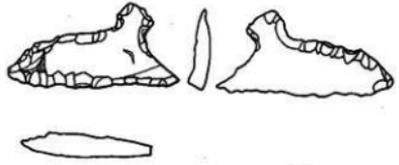
第40图 出土石器 (石匙)



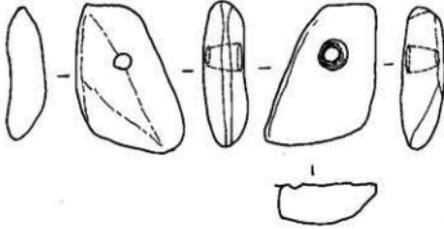
第41圖 出土石器 (石匙、石錐)



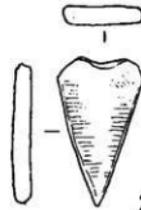
28



29



1



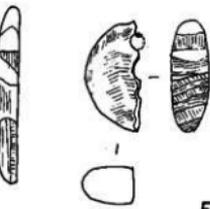
2



3



4



5



6



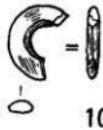
7



8



9



10



11



12



13



14



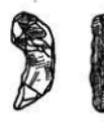
15



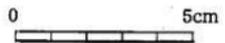
16



17



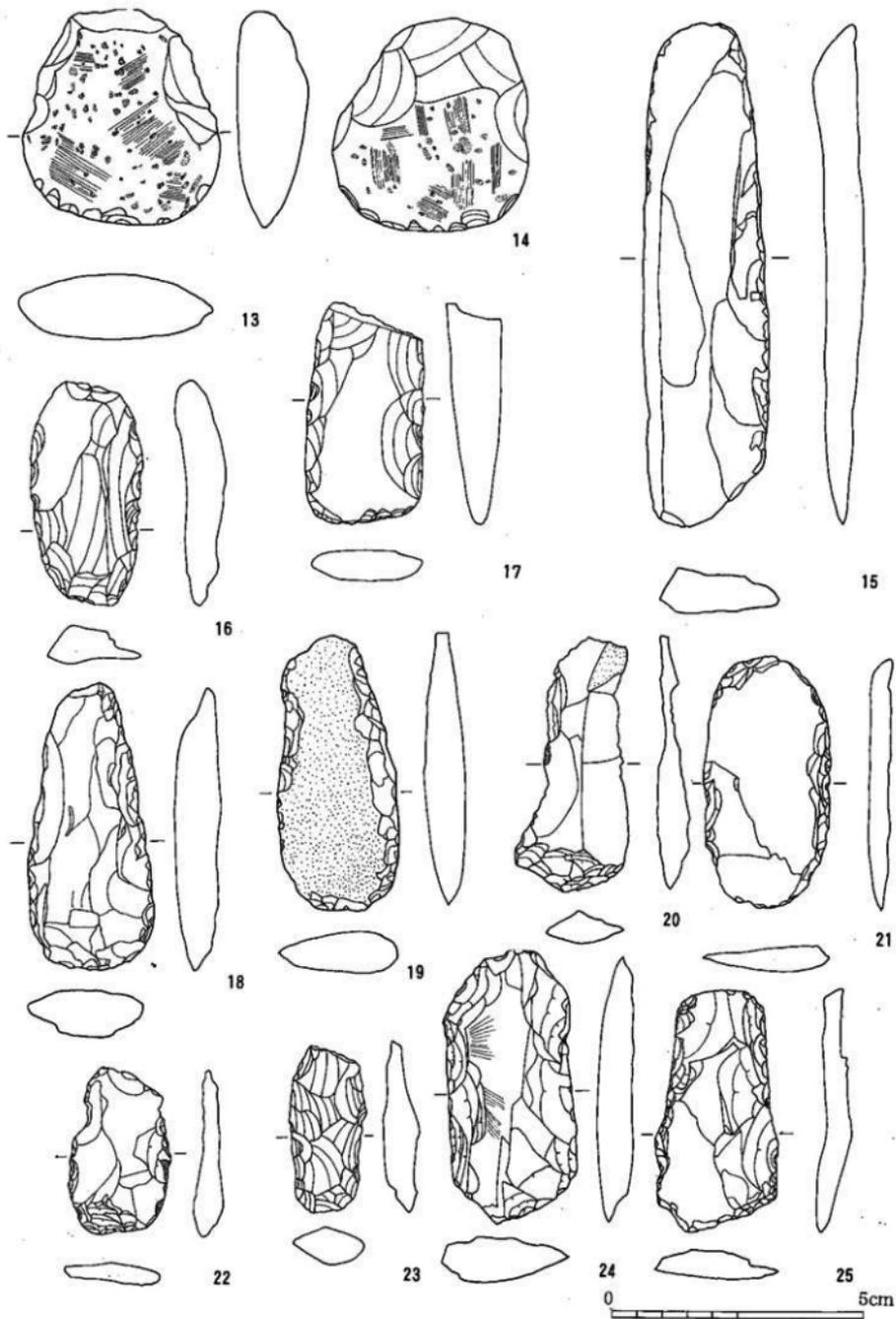
18



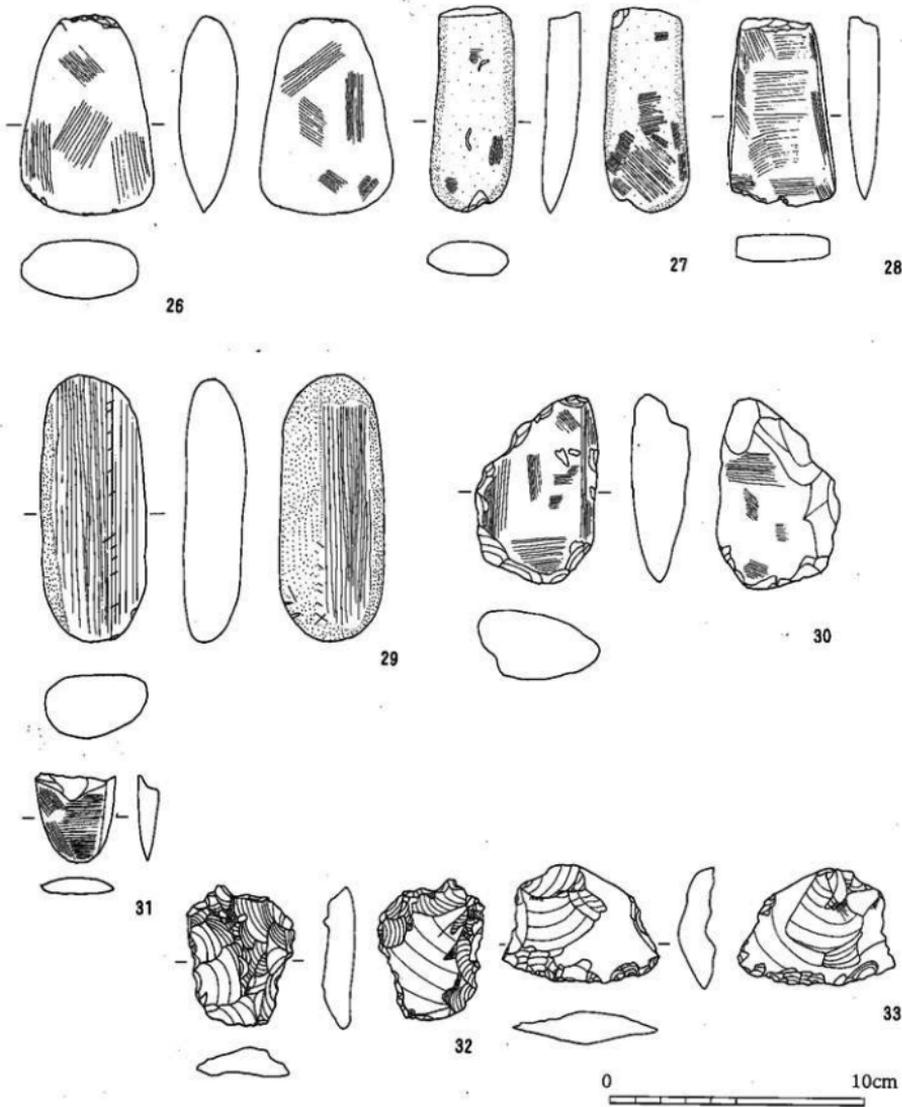
第42図 装身具類



第43图 出土石器打製石斧



第44圖 出土石器打製石斧



第45図 出土石器（磨製石斧スクレイパー）



遺跡全景



左：第1次調査区全景



右：第2次調査区全景



左：第1次調査区  
遺構検出状況



右：第1次調査区土坑群

左：第1次調査区  
遺跡検出状況





右上：第2次調査区層序



左：第1次調査区層序  
右下：第1・2号住居跡



左：第2号住居跡  
砥石出土状況  
右：第3号住居跡



左：第3号住居跡  
埋裏検出状況  
右：第4号住居跡



左：第3号住居跡  
埋裏断面  
右：第4号住居跡  
遺物出土状況



左右：第4号住居跡  
遺物出土状況



左：第5号住居跡  
右：同形状耳飾  
出土状況



右：第6号住居跡  
カマド

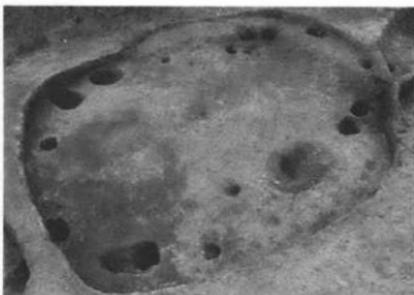
左：第6号住居跡



右上：第12・13号  
住居跡

左：第9号住居跡  
右下：第12号住居跡  
ヒスイ太珠  
出土状況

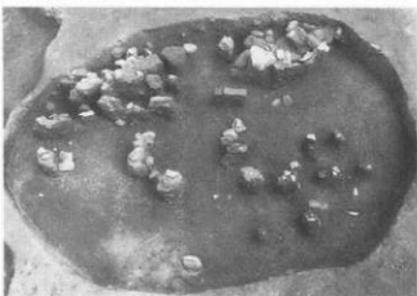




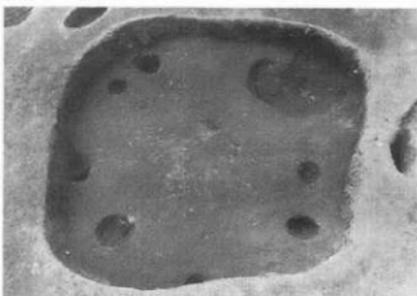
左：第14・15号住居跡  
右：第16・17号住居跡



左：第16号住居跡  
遺物出土状況  
右：同  
石柱出土状況



左：第18号住居跡  
遺物出土状況  
右：第18号住居跡



左：第19号住居跡  
右：第20号住居跡

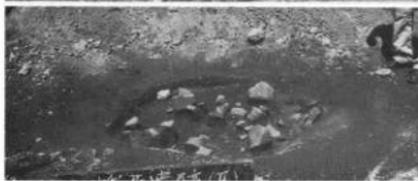


左：壁穴状祭祀遺構配石  
配石  
右：同祭壇



左：土坑114

右：第1次調査区  
調査風景



左右：第1次調査区  
調査風景



左右：第1次調査区  
現地説明会  
右：同(对小學生)



左：第1次調査区  
右：第2次調査区





3号住：1. 埋壺



左・中：4号住  
右：同



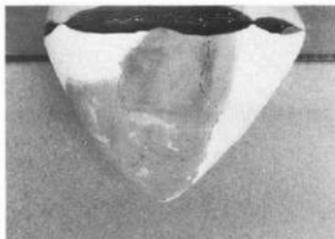
左：同  
右：同



左：4号住  
中：同  
右：同

右：5号住  
下：同





右：8号住.1



左：5号住.1



左：11号住.1

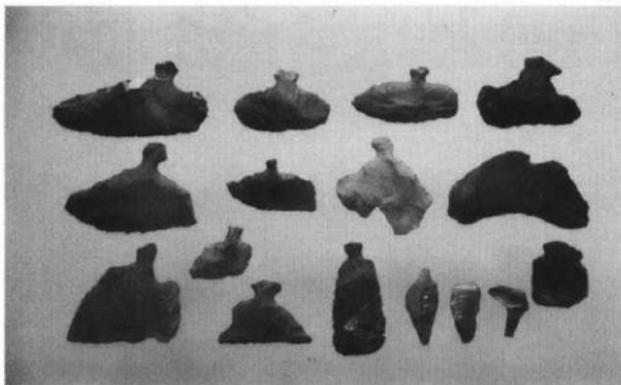


左：9号住.1

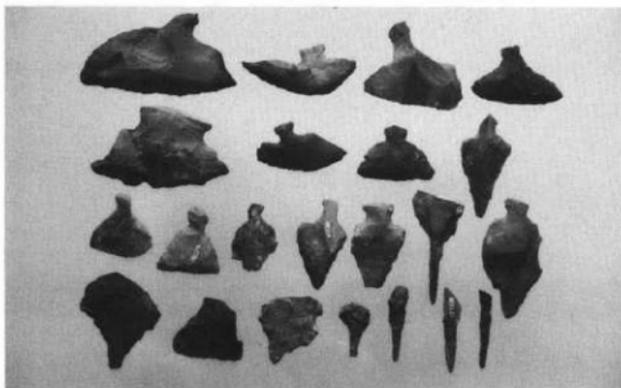
中：9号住.1  
右：グリット、屋外埋置



左：土坑103.1  
右：壘穴状祭壇遺構.1



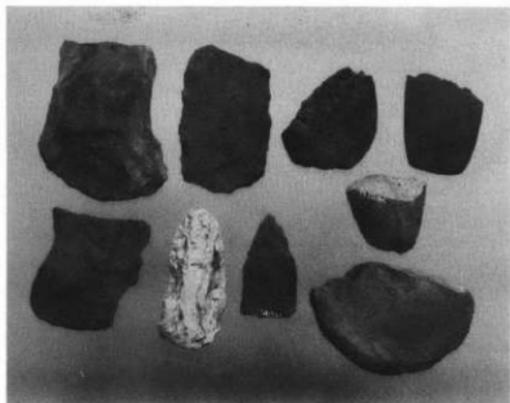
18号住出土石器

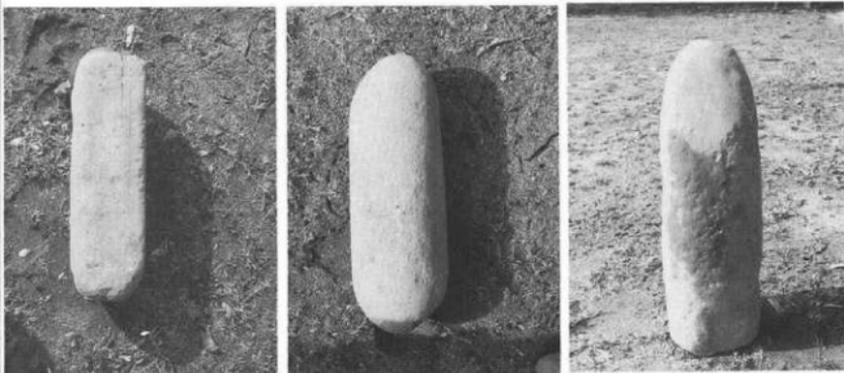


19号住出土石器

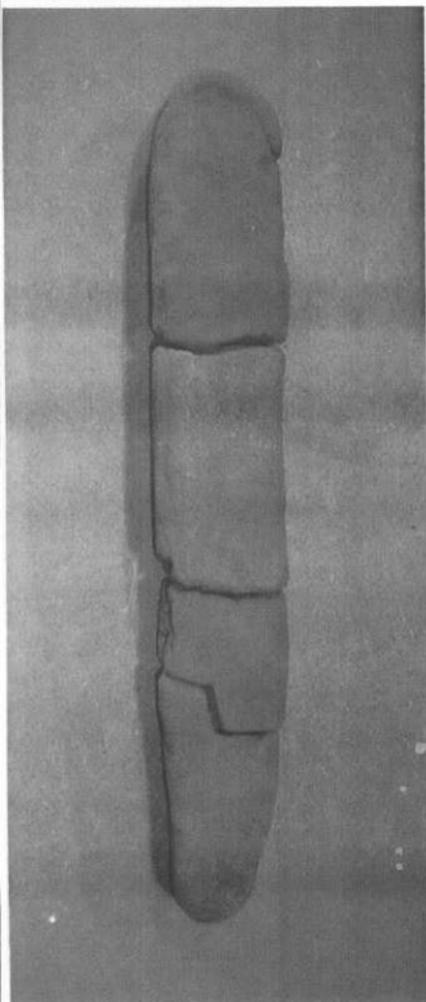


左：16号住出土石器  
右：17～19号住  
出土石器

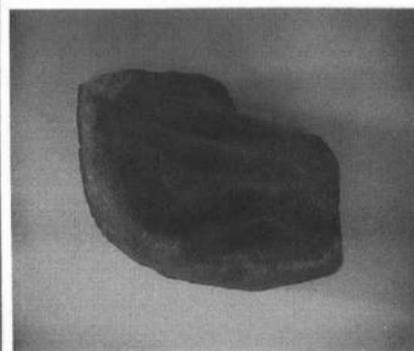
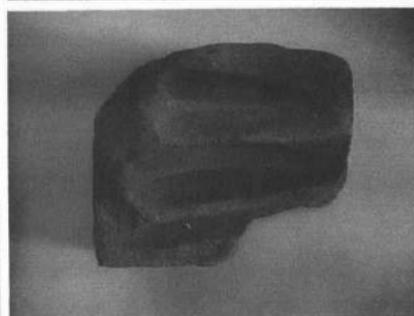




左：壑穴状祭祀遺構  
中：同  
右：同



右：16号住



左：16号住  
右：2号住

# 報告書抄録

ふりがな	とうぶはちまんばらいせき
書名	東部八幡原遺跡
副書名	東部八幡原遺跡園場整備に関わる長野県東筑摩郡生坂村緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	生坂村埋蔵文化財
シリーズ番号	NO.1
編著者名	大久保知巳、澤谷昌英、塩原久和、竹原学、西沢寿晃、三村肇、三村竜一、森義直、山越正義、横田作重
編集機関	生坂村教育委員会
所在地	〒399-7201長野県東筑摩郡生坂村5076 ☎ (0263) 69-2087
発行年月日	西暦1999年12月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 度分秒	東 緯 度分秒	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
		市町村	遺番 跡号					
とうぶはちまんばらいせき 東部八幡原遺跡	しもいくさかとうぶ 下生坂東部	4480	3	36 度 26 分 30 秒	東 経 137 度 56 分 46 秒	昭和62年2月23日 ＼ 6月28日  昭和63年7月30日 ＼ 8月20日	1000㎡	園場整備事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
東部八幡原遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	縄文時代 住居跡19軒 祭祀遺構1土坑墓1基 土坑105基  平安時代 住居跡2軒	縄文前期～中期土器、 石製品、石器10箱。  後期平安時代土師、 須恵器、少量	縄文前期から中 期中葉の終わり にかけての異文 化交流の中継点。 いわゆるオアス 的な交道路の拠 点小集落である 事が判明した。

